

歪な英雄

無個性者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーローが社会に認められている世界。

個性というモノが発現した人間たちによる社会で、少し変わった事情を持つ少女が居た。

本当に個性だと言えるモノなのか分からないチカラを持つ彼女。

そんな少女の傍には、個性を発現することが無かった「無個性」の少年が居た。

無個性にも関わらずヒーローに憧れる少年と、個性のようなものがある歪な少女の物語。

目次

少女と少年	1
継承、そして修行	8
少女たちの実技試験	14
少年少女たちの特攻受験	19
そして雄英へ	27
入学初日の試練	33
ヒーローの卵たち	41
屋内戦闘訓練―前	48
屋内戦闘訓練―後	55
頼られるということ	64
途方もない悪意	71
計画紛れ思惑現る	80
前哨戦	88
破滅的攻防戦	98
髑髏、骸骨、少女	106
憧れの背中	115
始めましてな再会	123
雄英祭前	133
雄英祭、開催	141
第1競技 障害物競走（改）	146
第2競技 騎馬戦―前	154
第2競技 騎馬戦―後	163
最終競技 始	171
一回戦、一組目&二組目	179



少女と少年

一人につき一つ発現する能力「個性」。

4歳までに発現する：だが、極々稀に発現しない者が居る。

それは無個性と呼ばれ、蔑称とされていた。

そんな無個性者が彼、みどりや いずく緑谷出久だ。

「ハ、ハ、ハ」

呼吸を意識しながらランニング。

これは彼が毎日欠かさず行っていることの一つである。

現社会には過去に超能力とも言われた個性を扱い、悪事を行う敵とサイラン其れを諫め捕えるヒーローが職業として成り立っている。

基本的にヒーローは皆個性者で、無個性者はいない。サポート役のサイドキックだってそうだ。

でも、それでも彼はヒーローになりたくて自分なりに体を鍛えていた。

そんな彼に後ろから走り寄ってくるものが居た。

「おはよう、出久くん」

「あ、おはよう紫ちゃん」

白い長髪、色素の薄い青い瞳と、同じように真っ白な色の肌の美少女。

ろくでんどう むらさき六道紫、出久の幼馴染である。

「今日も頑張ってるね」

「あはは、うん。もうすぐ受験も近いから」

「そうだね。絶対合格しよう」

将来有望なヒーローを育て上げる高校、雄英。無個性者である出久が合格できるなんて、クラスメイトも先生も……彼の親ですら思っていない。

個性があるからこそヒーローが務まるのだと、そう認識がしみ込んだ社会だからこそ当たり前前の現実として厚く高い壁となって出久の前に立ちはだかっている難問である。

だが、彼女は違った。出久ならヒーローになれる、貴方がヒーロー

になればNo. 1だって夢じゃないよ、と応援し続けてくれている。なんでそんなことを言ってくれるのかなんて出久はまるで知らないが、そんな彼女は出久にとって精神の支柱と言っても過言ではないほどに大事な幼馴染だ。

「よし、じゃあ何時も通り分かれ道まで競争しよう！」

「うん、いいよ」

？

六道紫にとって、緑谷出久はヒーローだ。

社会がどれだけ彼を否定しようとも、現実がどれだけ彼を認めなくとも、それだけは彼女にとって譲れない彼女だけの事実なのだ。

彼女の家、六道一族は少し他の者と事情が異なっている。

曰く、大昔から個性を有していた。

曰く、大昔から個性者を陰ながらに対処してきた。

曰く、大昔には大勢を死なせた個性者ヴァイランだった。

あり得ないと大勢が言う。でも現実なんだと、六道家の長子は知っている。

六道家の長子には、必ずある個性が発現する。

例えば片親が別の個性であっても、必ずその個性が発現するのだ。

その個性は、【骨の無限創造】およびその操作だ。

この個性も、専門家からすればあり得ないの一言が返ってくる。

無限など、人が行える所業ではない。カルシウムなり何なり、消費があつて初めておこなえるのだと。

「でも、違うんだよね……」

調子確かめるように身体から骨を生やし、戻しつつ彼女は身支度を
をする。

夢を見る。必ず、起きる直前に成るとその夢を見る。

—ノロイアレ—

大きな髑髏の怪物がそう言って自分を飲み込もうとする、そんな夢。

彼女は、一族は知っている。これは個性ではない、「呪い」なのだ。子々孫々と受け継がれてきた呪いは、現代社会においても六道一族を蝕んでいた。

過去に骨をどれだけ出し続けられるかという実験を行ったらしい。その時のことは書物にすら保存されていないが、現在の六道家でも口頭で伝えられていることだ。

「絶対、二度と行ってはいけない。災厄を蘇らせることになりかねない」

何があつたのかはわからない。だが、とんでもないことがあつたのは確かなのだろう。

確かめる気は誰にもなかった。

今は個性が現実には溢れ、六道家もそんな個性者だと思われている。平和と言えば平和なのだから、「災厄」とまでよばれる厄介事を起こすような面倒はする必要ないのだ。

「…個性、か」

これは個性なのだ、貴女の一部なのだと言われてきた。

家族には呪詛なのだ、貴方は怪物なのだと言われてきた。

彼女はコレが何なのか、わからなくなっていた時期がある。家族にあたり散らし、周りの人間を羨ましくも疎ましく遠ざけていた時期があつた。

そんな彼女と友人になってくれたのが、緑谷出久だった。

出会いは偶然。小学生になり数年、同じクラスになった時のことだ。

「クソナード」「無個性」「ザコ」

そんなワードを拾った彼女がふらつとその場を覗いたことがきっかけ。

そこにいたのは、苛められている少年を庇う、これまた苛められっ子の少年だった。

彼は掌からパチパチと火花を散らせている虐めっ子に対して、抗議して苛められていた者を庇っていた。

「無個性のくせに、ヒーロー気取りもいい加減にしろやデク！」

殴られながらも庇うことを止めない彼をみて、自然と脚が進んでいった。

イジメつこを捕縛し、壁に縫い付け無効化。想っていた以上にあっさりすんだことを覚えている。イジメられていた子は庇われている間に逃げていた。

でも、それ以上に……。

「ありがと、すごいね！」

そう言ってくれた彼の綺麗な瞳を覚えている。

「……キミの方が、凄い」

「僕なんて、全然」

「ううん。凄い、立派」

拾えた言葉から察するに彼は無個性、力のない人。

なのに、力ある人に立ち向かえるのは凄いことだと称賛した。

「キミがヒーローになったら、きつとナンバーワンになれるよ」

「そ、そそそそんなことないよ!!?」

そんなことがあるのだと、彼女は知っている。

強い力に勇敢にも向かっていけるのは凄いことだと、彼女は知っている。

——だって私は、あの髑髏に何も、言い返すことすらしたことがない。出来たことがない。

そう言いかけた自分を自重する。

でも、きつとそう出来る人こそ英雄ヒーロー足り得るのだと彼女は思っていた。

「あ、ありがと・えつと、ろくどうさん？」

「……わたしのこと、知ってるんだ」

「アハハ、うん。まあ色々みんなが話してたから」

きつとよくない噂だとすぐに察せた。

入学して数か月になるのに、彼女には一人も友人がいない。

答えは簡単、彼女が避けているからだ。基本喋らず、関わらず、虐めに似たことをされても無視か倍返しをし続けていた。

「え、えつと、聴いてた話しと、全然違ってイイ人だね！」

物静かな彼女で何も言わないのを落ち込んだと思ったのか、元気づけるように早口でまくし立てた。

突然なんなんだろう、きよとんとする彼女を置いて彼の口はスピードアップを続けた。

「ぎっぎのを見るに骨の創造の個性なんだろうけど、飛ばしたり動かしたり操作ができる素晴らしい個性だよ。かつちゃんの爆破を抑えるのに凹型の杭を作ったり自由度も凄くて、しかもそれで怪我させずに縫い付けちゃえるなんて凄いよね！しかも刺せたつてことは硬度はコンクリート以上つてことだし、もしかして自由に硬さを変えられるとかかな？量や大きさだつて自在となると本当に強力だと思う。それに六道さんの白髪と真っ白な肌は扱う骨の白さとあいまって純白、無垢つて感じが似合うよね。ヒーローになるならきつとそういうイメージを持たれる素晴らしい人に成ると思うよ。きつと女の子に人気、いや骨の使い方は格好良かったしきつと皆に好かれるんじゃないかな？ううん、絶対なるよだつて六道さん綺麗だからすつごく魅力的な——ムグツ」

「ストップ、待って、ちょっと待って」

口を掌で抑えて、出久を黙らせる。

前半は個性だと思われた骨の事だつたが、後半になるにつれヒートアップの仕方がおかしい。

(なんでこんな褒められてるの私、純白？無垢？え、なにそれ？)

異性に抑えられて出久は真っ赤になっているが、紫はそれ以上だつた。元の白さも相まって赤くなっているのが目に見えて丸わかりだ。

「褒めてくれるのは嬉しい、けど、私はヒーロなんて向いてない」

「そ、そんなことないよー！」

「・・・キミは、ヒーローになりたいの？」

「う、・・・うん。無個性だけど、何の力もない、んだけどね・・・」

ハハハ、と力なく晒う彼を面白くなく思った。

力なんてなくても・・・。

「キミは、ヒーローになれるよ」

「え・・・？」

「きつと誰より優しい、そんなヒーローになれる。力がある人だけがヒーローになれるなんて私は思わない。むしろ、そんな暴力的な者の中に、キミみたいな優しいヒーローが居ても、私はいいと思う」

「……」

「……?」

「ぐすつ」

「え、え!?!」

呆然となった彼を見て、拙いことを言ったかと思ったその時……出久が泣き出したのを見て大慌てになった。

「ご、ごめんね、何か嫌なことを」

「ち、ちがく、て、あの、う」

「落ち着いて、えつと、あつち行つて話そ」

その場を離れ、ベンチに座る。とつくに昼休みが終わる直前だったが、もうそんな場合ではなかった。

「ぼく、無個、性で、ヒーローに、な、なれないんだって、言われてきて、ぼくも、思つてて……だから」

だから、嬉しいのだと。喜びの涙なのだ、涙声で必死に伝えてくれた。

「ありがとう」

きつと、この瞬間だったのかもしれないと、後に彼女は語る。

彼を支えたいと思つた、彼を見て居たいと思つた、理由は何でもいい、彼の近くに居たいと思つた。

胸が痛い、心臓が痛い、凄く緊張してきた。

これに比べれば今までの自分の不幸も不運もちつぽけに想えてきた。

一体何なのだ、とその時の彼女は思つた。

あれから数年、今となつてはそれに対して相応しい単語を貼り付けられる。

その人を常に想い、胸には常に耐え難い激痛。これに比べればあらゆる苦痛がちつぽけだと言いきれてしまう。

そう、これは——「初恋」なのだ。

？

これはヒーローに憧れる少年、緑谷出久とそんな彼に惹かれる少女、六道紫。二人が英雄ヒーローと呼ばれるために頑張る、そんな物語。

継承、そして修行

数日後に入試を控えたある日のこと。

「むう・・・」

むつすーと頬を少し膨らませてご機嫌ななめな紫が一人で歩いていた。

基本出久と行動を共にしている彼女が、雄英入試前だというのに彼と一緒に居ないのには理由があった。

出久が、特訓を一人ですると言い出したからだ。

急なことでおかしいと思っただが、問い詰めようにも無言を貫かれてしまえば紫にはどうしようもない。

「六道、一人とは珍しいな」

「・・・黒水さん」

出久より少し身長の高い紫よりも、更に頭半分ほど低身長の少女が話しかけてきた。

紫とは対照的、真つ黒な長髪をサイドテールで一纏めにし、真紅のツリ目がジツと紫を見上げていた。

名前は黒水水舟くろみず すいしゆう。紫とは家の繋がりもあつて幼馴染だ。

だが、校区が異なっているため、小学中学と別の学校に通っている上に、肝心の紫が人を遠ざける癖が治って無いせいで、よく話すのに未だどこか他人行儀だ。

「まあちよつとあつて」

「ふーん」

他校の水舟ですら出久と紫が四六時中一緒に居ることを知っている。幼馴染ゆえに、休日ばったり会う事もあるのだが、必ずと言っていいほど出久が居るのだ。

居ないとは珍しいが、こういう日もあるのかと納得しつつ、ゴソゴソと懐をあさりだした。

「・・・ところで、六道」

「？」

「・・・いつはどうしたらいい？」

手渡されたのはタブレット小型端末。

懐かしの折り畳み式携帯ことガラケーから変えたとは聞いていたが、はて？

「…どう、つて？」

「……使い方が、分からん」

「……」

この間までガラケーだった少女がタブレットに変えたと、一か月ほど前に聞いていたのを思い出した。たしかあの時はワクワクしてて自分で何とかしてみらつて張り切っていたのだが……。

「…説明書は？」

「読んだ。だがわからん……教えてくれ」

「はあ……いいよ、時間あるし」

「助かる。ボクは機械関連はさっぱりだから……」

「分かっているならもつと早く言つてよ」

幼い頃から分からないことを自力でやろうとしては大失敗を繰り返し、その度に紫が教えてあげるということを繰り返していたら、失敗する前に教えを乞うことを最近覚えてくれたらしく、ここ数年は機械関連に関してずつとこんな調子だったりする。

ヒーロー社会であり、情報社会でもある現代において致命的過ぎる弱点にとても心配になってしまふ。

この日は結局水舟に端末の使い方を教えることのみ時間を費やすこととなった。

？

偶然だった。No.1ヒーロー「オールマイト」に彼、緑谷出久が出会ったのは。

何時もの学校帰り、忘れ物を取りに一人学校に戻った帰りの事だ。ヘドロ状の敵と出くわし、オールマイトに助けられることとなった。

助けたら颯爽と去ろうとする彼に抱き着き必死に話をしようとし

た。どうしても聞きたかったことがあったのだ。

「無個性でも、ヒーローになれますか……?」

成れると言ってくれる人が居る。でも、それでもやはり不安はぬぐえなかった。

親も誰も彼もが否定する中で一人居てくれることがどれだけ貴重かなんてわかっていた。だからこそ、自分の憧れでもあるオールマイトにも訊いておきたかった。

訊いてる最中に何やらマッチョな彼は萎んで骸骨のようになってしまったが関係ない。どうしても彼の考えを聞いておきたかった。

彼の答えは……。

「……残念だが、個性が無くとも成り立つ、とはとてもじゃないが口にできないね」

自分が骸骨のように萎んでしまったのは、命がけの戦いの結果負った傷のせいだという。今では一日3時間程度しか活動できないのだから。

個性を持つていても、命懸けなのだ。無個性の者にはとてもじゃないが……ということだった。

オールマイトは立ち去ったが、それでも出久は諦めきれていなかった。

憧れにすら否定されても尚、心に残っているものがあつたからだ。

「……まだ、入試だって受けてないんだ……まだ、まだ」

まだ、頑張れる。そう自分を虚勢で鼓舞しながら帰路についた。

その道中、またもやヘドロの敵が暴れていた。出久の時同様、誰かを取り込んで人質にする気らしい。

自分がオールマイトを足止めをしたせいで、捕まえ損なつたのだと理解した。

「ヒーローは……!?!」

近くに居るヒーローは、Mt.レディ……彼女は二車線以上じゃないと巨大化するには狭すぎる。次にシンリンカムイ……彼の個性は樹木だ。ヘドロが取り込もうとしている爆炎系の人質が必死に抵抗している今、近づけば樹木を燃やされ二次災害になりかねない。

他のヒーローも相性のいい者はいない……。

「……って、爆炎？」

ヘドロに取り込まれないように必死に抵抗し続けるタフネス、両手からの爆炎……ヘドロの隙間から覗くのは学ラン。

「かつちゃん……!?!」

幼稚園の頃からの幼馴染で、今では虐めつこと虐められつ子にも似たような間柄になってしまっている彼が脳裏に浮かんだ。

野次馬野次馬人混みをかき分け、最前列に向かう。

そこに居たのは、やはり爆豪勝己ぼくごうかつきその人で——気づいたときには、走り出していた。

(何やってんだ、僕!?)

自分で思いつつも足は止まらない。

ヘドロ状の体には触れられない、狙うなら眼だ。ヘドロにしてしまえば何も見えなくなるからだろう、瞳だけはずっと出っぱなしだ。

勢いよく背負っていた鞆を投げつけ、中身をばら撒きながらも眼に当てる。

自分を見失ったヘドロの懐に潜り込むと、ヘドロをかき分け勝己の腕を掴み引きずりだそうとする。息ができるように口元のヘドロも弾くと、勝己が大声を上げた。

「何で!! テメエが!!」

「そんなの、僕だって分かんないけど!!」

理由なんて、理屈なんて後々幾らでも湧いてきたけど、でもただ今はシンプルに一つ。

「君が、救いを求める顔してた……!!」

救いを求められれば、どんな苦難でも飛び込んでどうにかするのがヒーローなのだ。

どんな状況からだって誰かを救い上げる。そんなヒーローに憧れたからこそ、身体が動いたのだ、と。

でも、どんな精神論を並べたところで、自分は無個性。纏わりつくヘドロから引きずり出すなんて芸当は出来なくて、結局オールマイイトに助けられてしまった。

しかも周りの大人たちから叱られ、散々なことになったその帰り。また、オールマイトが現れた。

そして……。

「私の力を受け継いで……ヒーローに、なってみないか」

緑谷出久の人生が、大きく変わりだした。

？

そうして数日後、出久はオールマイトと浜辺に居た。

「いやはや、中学生とは思えない身体の仕上がりでびっくりした。小柄だから器から鍛えなければと思っていたのだがね」

「え、えつとこれはその、毎日鍛えてたので……」

「そうかそうか、感心するよ。無個性にもかかわらず、キミは本当にヒーローを目指していたんだね」

「……僕だけの意思でも力でもありません。その、小学生の頃からの親友が、応援してくれて……それで」

「ほお。それはいい友人を持ったな」

「はい。……あ、それで今日から特訓って言いましたけど」

オールマイトから髪D_NAの毛を摂取した出久は、数日たって彼の個性が身に着いたらしく、今の今まで過度な鍛錬をしないようにと言われていたのだ。

何故なら、受け取ったばかりの力はとても強大で、幾ら鍛えていると言っても中学生が扱って無事で済むとは思えないとのことだった。

「なんせ何の特訓もしていない者なら、摂取した時点で爆発しかねないからね」

「ええええ」

四肢爆散の可能性があったことにドン引く出久だが、それだけ強力なのだと理解もした。

「まあどのみち特訓には怪我が付き物だと思ってね。……実は数日待ってもらったのは、彼女を連れだす準備をしていたんだ」

「彼女……つてもしかして」

さつきから隣にいた白衣のおばあさんを見つめる。

「ああ、彼女はリカバリーガール！これからキミを診てくれるスーパーな女医さんだ！」

「ヨ、よろしくお願ひします！」

がちがちに緊張しながらも、出久の中ではリカバリーガールの逸話が飛び回っていた。自分が知る中で治療に関してこれ以上の医者はいないと断言できるほどの人だ。

「この子が後継ねえ……」

値踏みをされながらも、出久の辛い修行が始まろうとしていた。

その修業とは……。

「ワン・フォー・オール手加減のコントロール。これが出来なければ、キミは入学できたとしてもすぐに退学にされてしまうだろう。自滅前提のヒーローなんて迷惑なだけだからね」

「はい！」

「つてことでまずは一発全力でぶっ放してみようか！」

「は、え、ええ!? 加減の練習じゃ!?!」

「フルパワーを知らなければ加減も何もないさ。さああの海に向かって思いつきり撃ちこんでごらん。そうして君は力を自覚し、同時に痛みを知らなければならぬ」

後は自分のイメージを固め、少しずつコントロールを確かになしていくのだ、と。

「使う時のコツは、ケツの穴をグツと締めてこう叫ぶといい」

『SMASH!!!』

——この日、僕は人生で初めて海を割り、そして人生初の大怪我をしました。

少女たちの実技試験

試験当日、雄英高校にて紫はまたもや不機嫌そうにしていた。

「……」

理由は単純明快、出久と会場が分かれてしまったからである。

それ自体は運もあるので仕方ない事なのだど理解はしているのだが、それとこれとは話が別というもの。

不機嫌の理由も分かれたこと以上に出久が心配で落ち着いて居られないだけだったりする。

(筆記は大丈夫、私ですらすら解けたんだから出久くんだって問題ないはず……テンパって無ければ)

何より心配なのは実技だったりする。説明を受けたが、個性と戦闘値を競い合うようなポイント制のこれは無個性のはずの出久にはかなり難問となる。だが、心配しつつも紫は半ば合格を確信していた。(……何してたんだろ、ホント)

ここ一ヶ月ほどだろうか。彼が紫に黙って一人特訓を始めたのは。試験日までの日数が一週間ほどに迫った時、彼の両腕両足が包帯でぐるぐる巻きになっていたのを思い出す。

「特訓って何をしてるの!？」と一度本気で問い詰めたが、やはり無言を貫かれてしまった。出久の事なら、何か言ってくれば僅かな情報で予測がつくが、何も言われなるとなるとどうしようもない。

(個性が発現したから、その特訓……でも自分が怪我するような特訓なんて)

本当に何をしていたのだろうか、とひどく気になって仕方がない。

仕方がないのだが……特訓が形になったからあんなにやる気満々で入試に向かったのだらう。緊張でガクブルなのに変わりはなかったが、もし形になっていないならそもそも落ち込んでいるはずだ。

イジイジと動きやすいようにと着た運動着のまま考え込む。

『んじゃ、始めるぞ。はい、スタート』

思考を続けていると、なにやら説明会の時とは違い静かな先生の声が会場に響いた。

周りの者が「え？」という顔で立ち止まっている。

ああなるほど、と自分を含めた数人が先に動き始めた。

『オラオラ、どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ! 走れ走れえ! 賽は投げられてんぞ!!?』

出久の心配は後回し。彼の努力を、合格を信じて自分も合格するために疾走するのみだ。

『標的捕捉!! ブッコロす!!』

「……邪魔」

建物の壁を破壊して迫ってくる2メートルほどのロボに対し行った方法はシンプル。

バキバキと音を立てながら瞬時に形成した大きな骨の籠手。そこらの刃物よりよっぽど鋭利な爪を振るう。

それだけで、ロボは真つ二つに裂けてしまった。

「IP……にしても、これ戦闘向きじゃない個性の人は怪我するんじゃない……」

速くて脆いらしいが、それでもロボ。コンクリの壁をやすやすと壊す破壊力は常人には荷が重いだろう。

事実、始まって数分だというのに幾らか苦戦して怪我をする人がチラホラと。

「……ん?」

走りロボを屠っていると、視界に黒髪が入り込んだ。

よく見知った顔……黒水水舟だ。

「あれ、六道?」

「黒水さん、雄英志望だったんだ」

「ん? 言ってなかったっけ?」

初耳だ、と群がってくるロボを屠りながら呑気に会話を続ける。

骨を伸ばし二刀流擬きで刺したり斬ったりする紫。

水舟は水を創製し、操ってロボに水を入れ込ませ故障させている。

ウォーターカッターのような使い方もできるのでだろうけど、周りに人が多いからその配慮だろう。

「なあ、六道」

「なに？」

「組まない？」

「ハ？」

試験でポイントを奪い合うのだから、ライバル関係にしかならないはずの相手に何を言ってるのだろうか、と疑問符を浮かべると水舟は思案顔で語りだした。

「このポイント制の試験だけだし、これじゃあ戦闘力しか測れないと思う」

「……」

「ヒーローに必要なのってさ、戦闘力だけじゃないだろ？」

男まさりな彼女はニヤつと口許を歪めた。

ああ、なるほど。

「観られてるってことを自覚しろってことね」

「そういうこと。言われてないことだけど、多分間違ってると思う。

他の人が気づいていない今こそ、ボクたちで点を稼ごうぜ」

「何で私なの？」

「んー、そりゃ一番信用できるし。何だかんだ幼馴染だしな。それに……」

「それに？」

彼女はそこで一拍空けて、悪い笑みをからかう様なニヤついた表情に変えて、紫を肘でつついた。

「お前の愛しの彼なら、余裕さえあれば同じこと考えてると思うぜ？」

「な、ななななな!!!」

ボツと顔を真っ赤にして、思わず彼女に詰め寄る。

「な、なにを、なんで!？」

「幼い頃からの付き合いのボクにツンツンな六道が微笑む相手なんて、彼くらいだからなー。六道を嫌ってる奴ならともかく、ボクみたいな奴とか、周りを観れる奴にはまるわかりなんじゃないか？」

まあ彼自身気付いてない辺り重症かもだが、と付け足した。

出久に気付かれていないことにガツクリすればいいのか安堵すればいいのかわからないが、ともかく水舟の言いたいことは分かった。

……下手をしなくても親にもばればれなのだろうか……。まあそれは置いておいて。

たしかに、紫にとつてのヒーロー像は世に出て有名になっている誰それではなく、力が無くとも誰かを助けようと動く、そんな優しい彼だ。

所謂オリジンというもの。紫にとつてそれは出久なのだ。

「……いいよ、乗った。ロボの掃討しつつ、怪我人やピンチな人の手助け。なにより、互いのカバー」

「よっしゃ、よろしく！」

「骨折とかしてる人いたら優先的に教えて。添え木位は作れるから」
「OK」

そこから先は、二人の独壇場と化した。

まさしく台風の目。リーチも長い二人の範囲攻撃はロボを薙ぎ払い、手助けや怪我人の簡易治療までめまぐるしい活躍を行った。

そして、試験終了間近となって現れた、「OP」の特別な敵巨大ロボに至っては。

「両腕よろしく」

「はいよ」

巨大ロボはいるだけでも威圧的で不安を煽り、動くだけで建物を破壊する。

「救助」を目的として考えた場合、これ以上ない邪魔者である。

敵はロボだからこそ、容赦なんてしない。人が射線上に居ないことを確認し、斜め上——ロボの両肩目掛けてウォータースライサーで内部の関節のみを破壊する。両腕を落としてもよかったが、そうすると地面に腕が落ちて被害を出すから止めた。

「っ」

バキバキバキと骨の籠手、脚甲、簡易的な鎧を作っていく。

腕の動きは止まっても、他のギミックが無いとは限らない。近寄って自分がやられてしまえば元も子もないのだ。

それになにより、こっちの方が速い。

ガチンツ、高音が鳴る。

紫の身体で扱うことを考えるとかなり大きめな脚甲と籠手の中から出した音だ。

「トリガー、オン」

バゴンツ!!!という大きな音を立てて、地面を砕きながら一気に加速した。

その音の正体は、脚甲として作った骨にある。大きく作ったのは頑丈にするためとかリーチを長くといった理由もあるが、それ以上に中で工作しやすい様にだ。

外見は大きな脚甲だが中に空洞を作っている。その空洞を一瞬で埋めるように骨を生成、射出することで大きな反動を得て一直線に高速移動する。

同時に籠手の中でも同じように空洞を作成、中で杭を造りだす。所謂パイルバンカーだ。

少女の肩でやるには反動が凄まじいため、肩まで覆う外骨格を創りあげるほどに大きな籠手となっている。

(やつぱり、あの個性オカシイよなあ)

杭を放つ、はまだ分かる。勢いよく創製すれば、水舟自身自分の身体から直接放つことだって可能だ。

だが、それは水流として扱っているからだ。

(骨の籠手とはカッコいいけど、どう考えてもあの大きさをあの細腕で扱えるとは考えられない)

まるで、骨自体が動いているみたいだと、水舟含めそれを見ていた試験監督全員が思った。

骨の杭が刺さり、そこからさらにロボ内部に骨の創製を繰り返す。

枝分かれしながら中をズタズタにする骨の刃はロボを完膚なきまでに破壊し、内部から露出した骨は近くの建物や地面に刺さり、ロボを固定し破壊したまま直立させた。

これなら、壊れても倒れることは無い。

「次いこ」

「オツケー」

文字通り巨大口ボを瞬殺した二人は、次の目標目掛けて走り出す。

少年少女たちの特攻受験

この一カ月間、オールマイトと出会ってから二カ月足らずの短い期間だが、出久は個性を得た。

ワン・フォー・オール。聖火の如く引き継がれてきた、ヒーロー達の力。

未だ最大出力は1割ちよつとしか出せない上に、ブレが酷く加減しようとするれば5%から10%をフラフラとして安定しない。

(で、でもどうにか身体がバキバキにならないようにはなった……)

早朝、もしくは深夜の海岸での地獄の特訓。

加減を間違えて海を割っては泣き叫び、治療。小学生からずっと鍛え続けてきたおかげで身についた体力が尽きるまで繰り返した。

リカバリーガールが居るからこそできた無茶である。

「と、ともかく入試、が、ががんばらばばるるぞお……!」

「出久くん、一回深呼吸して落ち着こうか。ガクブルだよ、特に足」

「いや、だって……緊張しない?」

「し過ぎって言うてるの。出来ることはやったんだから、入試に集中しよ?」

「う、うん」

そう、ここで結果を出さなければオールマイトにもリカバリーガールにも顔向けできない。一度頬を叩いて気合を入れ直し、会場へと赴いた。

その際結局足を滑らせ、名も知らない同じ受験生の少女によって助けられ、紫の機嫌が少し悪くなるのは蛇足である。

?

『今日は俺のライブにようこそー!!!エヴィバディセイハイ!!』

めっちゃ声量の大きいヒーローが実技試験について概要を説明しだした。

彼は「ボイスヒーロー」プレゼント・マイク。毎週ラジオ放送まで

してる一風変わったヒーローだ。

『入試要項通り！リスナーにはこの後10分間の「模擬市街地演習」を行ってもらうぜ！持ち込み自由！プレゼン後は各自指定の演習会場へ向かってくれよな！』

演習場には仮想敵を三種、多数配置してあり、それぞれの難易度に応じてポイントを設けてあるぜ！各々なりの個性で仮想敵を行動不能にし、ポイントを稼ぐのが君たちの目的だ！勿論、他人への攻撃等アンチヒーローな行為は御法度だぜ！』

そこまで聞いて、出久は疑問が浮かんだ。

まず、持ち込み自由。これは個性に応じた武器や装備を持ってきていいという事だろう。無個性の者や戦闘向きではない者でも、武器を持ち込めるのだとしたらチャンスがあるということ。

次に「行動不能」。ロボの破壊ではなく、行動不能。つまり動きを止めてしまえば何でもいいということ。無理に破壊することは無い。

最後に、アンチヒーローな行為は御法度……つまり。

(協力プレイは、ありつてことかな?)

初対面でライバルに囲まれる中、酷く難しいことだがチームプレイも許容されている。少なくとも、故意に他者を傷つけなければ何でもいいのだ。

最後に0点の仮想敵を「ギミック」と説明し、最後にこう付け加えた。

『Pius Ultrala!! それではみんな、良い受難を!!』

?

さて、困ったと出久は頭を抱えそうになった。

周りの人たちは皆個性に合わせた装備をしており、対する自分は素手。

(メリケンサックでも準備しておけばよかったアー!!)

ロボを相手にするとは思っておらず、これから彼は素手で鉄板をぶん殴らなければいけない。後悔するも、全て後の祭りである。

(あ、あの人)

ふと、足を滑らせた自分を「浮かせて」助けてくれた少女を発見する。

(……態々受験のライバルである僕を助けてくれたし、お礼ついでにちよつと話を……)

緊張でがちがちになりながらも歩み寄って行こうとすると、ガツシリと体格のいい眼鏡の男子に止められた。

「その女子は精神統一を図っているんじゃないか？」

「え？」

「妨害目的ならやめたまえ」

「いや、そんなつもりは……」

悪いことをするつもりじゃなかったのに悪者扱いされ、思わず視線が下を向いてしまう。そこで、彼の脚が普通じゃないことに気付いた。

(……エンジン?)

そこで周りの視線が一気に気にならなくなった。

深い思考をするために集中力が増し、スローモーションの様な錯覚を覚えながらあることを思いつく。

「ねえ、ちよつといいかな！」

「？」

「試験前に話したいことが出来たんだ。出来ればキミにも」

「……え? 私??」

「うん。……あ、ちよつとこつちに」

隅っこに移動し、こそこそと内緒話へ移行する。

「時間がないから手早く用件を言うね。——この実技試験、組まない?」

「……ハ?!」

「何を言ってるんだキミは?」

「そもそも、協力とかって良いの?」

「アンチヒーローな行為は禁止されてるけど、お互い助け合うことについては何も言ってなかったから大丈夫」

「ここで、「多分」とか「だと思う」のような不安要素がある言葉は使わない。

自分を何時も鼓舞してくれる純白の少女を思い浮かべ、説得する。

「そもそもこの実技じゃ戦闘に関する個性が圧倒的に有利だと思わない?」

「それは……」

「……! そうか、そういうことか!」

薄ら出久が気づいていたことに眼鏡の少年も気づいたらしい。

「この学校はヒーローを選出する学校。なら、人助けだって勘定に入らなければ寧ろおかしい」

「うん、だから——」

『ハイ、スタートー!』

説得を締めようとしたその時、さつき説明していたプレゼント・マイクの声が響いた。

『どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ! 走れ走れえ! 賽は投げられてんぞ?!』

彼の言葉に他の生徒が一齐に動き出す。

だが、出久にとつての賽はとつくに投げられていた。

「時間がない。急いで決めて、組むか組まないか」

「……」

「キミと組めば、合格できるのか?」

「作戦はある。キミの脚と、彼女の力があれば多分……うん、絶対合格して見せる」

「……私はいいよ。そこまで言い切るキミにかける」

「ふむ。……俺も乗ろう。で、作戦とは何だね?」

よし、とガッツポーズをとった。

「時間がないから個性の説明をしてほしい。僕の個性は純粋な増強系。キミは多分加速だね? で、貴女は多分浮遊とか重力操作とか?」

「俺の個性はおおむねそれで合っている」

「わ、私は重力をゼロにできるといふか、そんな感じ。人数関係なく

キヤパ以内なら重さを無くせるけど、自分にかけるのは気分が悪くなるから、ちよつと無理かな」

「OK、大体あつてればいいよ」

出久の考えがまとまり、二人に概要を伝えた。

？

監督室であるモニタールームにて。

「おいおいおい、嘘だろなんだEブロックの二人!？」

「相性が良すぎるな。……もしかして知り合いだったか？」

「かもな」

紫と水舟のコンビネーションに舌を巻く教師陣。

「恐らく救助活動Pに気付いたんだろう。チームを組めば互いに助け合うことでポイント^{レスキューポイント}は効果倍増だしな。合理的判断だ」

「お、B地区のほうも気づいたやつがいるみたいだぜ。こつちはスリーマンセル^{スリーマンセル}三人一組だ！」

言われた画面に映っているのは出久達三人だった。

？

B地区を疾走する影。

眼鏡の少年、彼に背負われた出久と少女の三人組だ。

——「まず、彼女の個性で僕達の重さを無くしてもらおう。それだけで浮いちゃうけど、彼女ごと背負えば彼女の重さで走れるはず。それで、仮想敵のいる場所を駆けまわってもらおう」

そのうえで、仮想敵が居る場所に後から駆けつけ、離れすぎないように散開。

仮想敵を破壊しながら地区内を駆けまわる。

——「仮定が正しいなら、人助けも何かしらのポイントになるはずだから、困ってる人が居たら積極的に手を貸そう！」

ロボに囲まれていたり、がれきに道を塞がれているような人たちを

助けていく。

更にお互いの助け合いもすることで、相乗効果を狙う。

「よし、これなら!」

「うんうん、いけるんじゃないかな!」

「……いや、まだ一つ忘れているぞ、二人とも」

試験が終わる3分前。

巨大仮想敵、OPの大型ロボが現れた。

「アレはどうするの!?!逃げる?!」

「ダメだ!アレは少し動くだけででも街を破壊する!」

「うむ、ヒーローなら放つてはおけないな!　しかし、俺の攻撃だけではとてもじゃないが……」

眼鏡の彼は驚異的な加速を生み出せる。距離に比例してエンジンが温まって強力になっていくが、今は生身の脚にスパイクだ。

脚がエンジン内蔵という事もあって頑丈なため、そこらのロボなら蹴り抜くことが出来たが、巨大ロボとなるとそうはいかない。

「私は流石にキャパオーバーだよ……」

「……」

思考時間は10秒。

だが、そのほとんどは決心を固める為だった。

震える身体を無理やり抑え込み、静かに覚悟を決める。

「僕がやる」

「え!?!」

「出来るのか?」

「うん。……ただ、普通に壊してもダメだ。真上から潰す」

「そんなこと、出来るの?」

「比較的脆く作ってあるらしいから、少なくとも壊すことは可能だと思おう」

真後ろに倒れても横に倒れても迷惑だ。

理想はその場で沈黙だが、殴り壊すことしかできない出久は、上から叩き潰し、なるべく被害を抑えるしかない。

普通に殴り飛ばすよりはマシだという判断からだった。

「普通にやつても無理だと思う。……えっと」

「そういえば、自己紹介をしていなかったな。飯田だ。飯田天哉」

「あ、私は麗日お茶子」

「：緑谷出久。よろしく」

改めて自己紹介をした三人は、視線を真つ直ぐ巨大ロボへと向けた。

「飯田君、まず真後ろに回って。それから麗日さんは僕を無重力状態にして。ロボの頭上を越えたら解除してほしい」

「了解した」

「わかった」

「それから、僕、着地は出来ないから、二人に頼むことになるけど、大丈夫かな？」

スツと二人が目を合わせ、頷いた。

「大丈夫！絶対受け止めてあげるよ！」

「安心してくれ」

「よし、行こう！」

改めて二人を背負い、全力で駆けだす。

ばれないように少し大回りに背後に移動し、麗日によって無重力状態になった出久が手加減した脚力で跳びあがる。

加減しても無重力なら引力の減速が存在せず、体重も関係ないのであつという間に頭上を取った。

「ワン・フォー・オール、100%……い！」

ググつと拳を握りしめる。筋肉が膨れ上がり、体操着が右腕だけ吹き飛んだ。

「DETROIT SMASH!!!」

重力と引力が戻った出久の右拳により、巨大仮想敵の頭が押し潰され、胴体まで減り込んだ。地面に罅が入ったが、ロボは奇跡的に崩れず沈黙した。

「いっつツツ痛ええええええ!!!」

代償は大きい。右腕は腫れあがり、骨はバキバキに折れてしまっている。

そのうえ撃ち抜いた衝撃でロボの真上から逸れて、このままでは地面に真つ逆さまだ。

「飯田君、お願い!」

「ああ!!」

飯田が加速し、ジャンプするその瞬間に麗日自身の重力をゼロにした。

結果二人で大ジャンプし、墜ちはじめていた出久に追いつく。

「キヤッチー!」

出久を捕まえ、同じく無重力にする。

同時に麗日のみ重力を戻し、彼女の重みで落ちる。

だが飯田の大ジャンプの推進力は残っており、そのまま向かいのビルの窓へと勢いよく突入。ガラスに当たる前に三人の重力を戻し、勢いよく蹴り割って入った。

「……い、生きてる?」

「ああ……」

「い、痛いけど」

「わわ、緑谷君大丈夫!?!」

「これは酷いな」

「あ、アハハ：まあ試験が終わったら病院かな」

リカバリーガールが居ることを話すわけにもいかない出久は苦笑いを浮かべた。

この会話の直後、試験が終わり地区内に入ってきたリカバリーガールに治療されるついでに、軽い御小言を戴いたのは蛇足である。

そして雄英へ

一般入試修了後、雄英教師陣は巨大モニターのある会議室にて話し合い、もとい今回の試験のぶっ飛び具合を議論しあっていた。

「ハツハツハー！ YEAH——！ 何だ今年は豊作だなあ！」

例年、敵を倒した点数VILLAINNPと救助した点数RESCUEPを合わせても、80点を超えるものはそうそういない。

「まさか5人も90点超えて、うち2人は100点超しちゃうとはなあ」

「しかも0点の大型仮想敵、アレを仕留めるなんて何時振りだ？」

大型モニターには今回の上位陣がずらっと表記されていた。

【1位 黒水水舟 壊敵 VP44 救助 RP109 合計153P】

【2位 六道紫 VP66 RP85 合計151P】

「この六道って子はアレだな、もうちょっと積極的にいくべきだったよな」

「まあそれでも大型倒して70も点数取ったんだ。充分だろ」

大型仮想敵を倒した際、迅速かつ的確な行動の結果、二人に100Pが与えられた。止めを刺した上に直立させたまま行動不能にした判断力と戦闘力を加味して、紫に70P、見事なサポートとして水舟に30P与えられていた。

もつとも、その前も後も紫は積極的に人助けを行おうとせず、個人的に勝ち取ったRPは15P。骨折した者への添え木の作成や、水舟が瓦礫に埋もれた者の救助を行った際のサポート程度。自分から積極的に動けなかった、人見知りか治っていない証拠である。

「その点黒水って子はもう満点だろ。戦闘力、判断力、救助の心意気。文句なしだな」

「水流操作だったか？ 水を生み出してから自由に操作してる所を見るに、軽く念動の力も混ざってそうだな」

「てか混ざってんだろ確実に。水球をどうやったらあんな長時間維持したりできるよっ。」

「救助する時につかう布切れとかを、煮沸消毒してから水分を飛ばし

てたりしてたしな。分子レベルで操ってるな」

黒水を褒め称えつつ、次の三人に注目が集まった。

【3位 飯田天哉 VP50 RP47 合計97P】

【4位 麗日お茶子 VP25 RP70 合計95P】

【5位 緑谷出久 VP31 RP61 合計92P】

「移動の効率化、無重力による上下の移動。この三人の立役者は、言わずもがな麗日女子だな」

「3位の子は高速移動しつつの仮想敵破壊が主だったとはいえ、やはり機動力の要を果たしたのは大きかったな」

「5位の少年。アレは凄かったな。二人の個性を活かした作戦を考え、指揮を取っていた。見事だ……ただ」

同じく大型仮想敵を倒した三人には、被害や倒すまでの時間を考慮し、同じように三人に70Pが渡された。そのうちの20Pずつを飯田と麗日に与えられ、実際ぶっ飛ばす……もとい、潰した出久には30P与えられた。

100ではなく70だった理由は、言うまでもない。

「惜しいよなあ。倒すためとはいえ、怪我さえしなければ文句なしだったんだが」

「三分前だったから、時間がなかった、なんて言うのは言い訳にしかないからねえ」

結局彼らは倒した後、怪我をした出久を放っておけず終わるまで待機していた。

この待機の間倒すなり救助なりしておけばさらに点を稼げただろう。

そうしなくても、行動不能にすればいいのだから、態々潰さなくても手はあったはずだ。

「無重力の子の限界値の関係でもあったんだろうけどな」

「自分を無重力にすると気分悪そうにしてたわね、そういえば」

瓦礫を浮かし、それを蹴るなり投げるなりして飛ばして中^あてるなり、脚を潰して動きを阻害するなり、麗日以外にも方法はあったはずなのだ。

出現から3分間。その短い時間だけ上手いこと耐えられれば、多少街に損壊がでて90Pは固かっただろう。

民間人を考えるのも重要だが、自分を守らなければその後が続かない。怪我をしたのは大きな痛手だった。

「まあ6位のRPがまさかの0^{ゼロ}つてのにも驚いたけどな」

【6位 爆豪勝己 VP77 RP0 合計77P】

「仮想敵は標的を捕捉して近寄ってくる。他の者が後半になるにつれ鈍っていくなか、寧ろ過激になっていった彼のタフネスの賜物だな」

10分の全力戦闘。それがどれだけスタミナを、精神を消耗するか。プロとして活動すればするほどその難しさを理解する。

彼はそう言った点で考えて、間違いなく戦闘のプロに引けを取らないセンスを持っている。

「つてことで、今回の問題点だが…ぶつちやけどどうする?」

「どうって…」

全員が睨むように見るのは、1位と2位の名前と点数。

3位と50点以上も突き放しての合格は、異例中の異例だった。

「つーかこんな金の卵見逃してたのにびっくりだわな」

「特待の方で見つからなかったつてことは、派手な結果を小中と残していなかったつて事だろ」

水舟は家が古風で、電子機器の類が僅かしか見当たらないほど古い歴史を持つ。彼女は所謂お嬢様というやつなのである。家柄が古すぎて現代に馴染めていない感は半端ないがその反面、黒水家内々で行われている英才教育の賜物でこれほどの実力者となっていた。

そして幼馴染の紫がその影響を受けないはずがない。そもその話、出久に体を鍛えようと誘ったのは彼女である。その紫が誰に影響されて自らを鍛えていたかなど、最早言うまでもないことだ。

その事実を知らない教師陣はハテナ顔で困っていた。

「文句なしの合格、なんだが…」

問題点は一つ。優秀過ぎることだった。

此処まで大差がつくと、後々モンスターな方々がカンニングだの裏金だのなんだの言い出しかねない。

「……………特待扱いで、二つ強引に枠を増やそうか」

校長、根津がそう呟いた。

静まった会議室にいる大きなネズミの彼に、視線が集まった。

「彼女たちをA組とB組に分けよう。21人は初めてのことで、この点が公になるよりはずっといい」

特待として二人を扱い、出久達三人を繰り上げることで二人の順位を無くし点をうやむやにしておもうということだ。

「まあ、それくらいしか手はないか」

「……これだからこの試験は不合理だと毎年進言しているんだ」

「でも今年はあり得ないって」

こうして、特例中の特例として異例^超の特待生^Vとして二人が扱われることとなるのだった。

「問題は……二人の両親がモンスターじゃないことを祈るしかないわね」

なにせ特別扱いするから成績取り消させてって言っているのだ。

子供が頑張った結果を抹消されるなんて、親馬鹿が過ぎれば我慢が利くとは思えない。

返事が来るまでの数日ほど、校長含め数人の教師の心労が少し増えたのだった。

？

そうして届けられた小包と合否通知は無事彼女達に届けられ、その説明は内装されていた写真機にて映し出されたオールナイトによって説明された。

『と、いうわけで。キミと黒水くんは特待扱いにさせて欲しい。こっちの都合で申し訳ない』

「……………うわあ」

取りあえず入学金諸々ゼロになる上、既に払った試験代まで返ってくるらしく、彼女達にしても両親にしても問題はない。

ないのだが、一つだけ紫は安心したことがあった。

「出久君に見せなくてよかったあ……」

圧倒的大差とか、先に合格を喜んで告げてくれた彼に……3位で凄く喜んでた彼に申し訳が無さ過ぎた。

「取りあえず、合格したよーってだけ伝えよう……点とかはてきとーに言っておこう」

あと水舟が出久に言ったりして伝わらないようにメールを打とう、として止める。

「メール、ちゃんと見れるかな……というかそもそもこの合否通知の聞き方分かんなくなってる……今から黒水さんの家に行つてみようかな」

そうつぶやいた直後、彼女の端末が鳴った。

案の定水舟からである。

「………もしもし」

『あ、もしもし六道?』

「………どうしたの?」

もう言ってくるであろうことは予測付いているが、一応訊いてみた。

『合否通知貰ったんだけど、一緒に入ってたやつが使い方分かんなくて……後なんでもか特待についてのパンフレットも一緒について来たんだけど、なんでかな?』

「……ハア」

やつぱり、と思わずため息を溢す。

おかしいな。それは普通に置くだけで起動するのにな、なんで分かんないんだろうか……逆向きに置いてるからだろうなあ……もしかしたら壊してたりは、しないよね?

「取りあえず今からそっち行くから、大人しくしててね」

『ハ―イ』

そうして合格兼特待の通知と一緒に観て、彼女とこの事は内密にするように相談した。勿論、そのことは校長を含めた雄英高校の教師たちとも話し合った。

やんややんやと忙しくもなんとか話し合いをこなし、数日後。無事

に二人の少女は特待生となった。

入学初日の試練

雄英高校。ヒーロー科が2クラスしかなく、倍率はそのため毎年300を超える。

そんな難関校に入学した少年少女が、そこにいた。

「つ、つつついに……！」

「はいはい、落ち着こうねー」

これから先の不安や緊張、なにより念願を叶える為の第一歩という事もあって少年、緑谷出久はカチコチのガクブル状態で登校していた。

その隣を歩くのは真つ白な少女、六道紫。彼女は彼女で同じ難関校、それも同じクラスに通えるとなつて浮ついた気持ちを抑えられないのだろう。出久の前とはいえ、すでに笑顔だった。

「…………紫ちゃんは、何も訊かないんだね」

合格したことは中学にも伝わり、必然と幼馴染である爆豪勝己にも話が及んだ。

——「何でテメエが合格してんだ・アイツだけならともかく、しかも3位だア!？」——

そう叫んだ彼の言葉が出久には忘れられなかった。

真つ直ぐで、オールマイトとはまた違う意味での羨望。そんな存在に返せたのは最低限のことだけだった。というか、最低限どころか変に挑発してしまったかもしれない。

そんなことがあつたからこそ、今まで一緒に居てくれる彼女が何も訊ねてこないことに安心しており、どこか不安でもあつた。

「んー、聞いて欲しいなら聞くよ。でも、出久くんが言わないのには理由があるんだろうなーって思つてさ」

「うん……答えられない、んだけど……」

「なら無理に言わなくてもいいよ」

スキップして出久の前に立つと、彼もあまり見たことがない満面の笑みを浮かべていた。

「どんな理由でも、何があつたとしても、私は出久くんを信じてる。だ

から私が言うことは前と一緒に、何も変わらない。貴方は絶対素晴らしいヒーローになれるよ。だから、頑張ろ？」

「……うん、ありがとう」

気づけば、震えは収まっていた。

？

1—Aと書かれたクラスへ辿りつくまでの道のりは、中々に長かった。

そもそも雄英自体が広いのに、ヒーロー科は2クラスしかない。初めて来た人は迷っても仕方ないだろう。

「出来れば、飯田君や麗日さんとかも一緒だといいいんだけど…」

「実技試験の時に協力した人達だったっけ」

「そうそう、すっごく頼りがある人たちで…あ」

「「あ」」

個性の都合上、体の大きさが変動する人たちへの配慮、バリアフリーの為か、5 m以上はある扉を開くと直ぐに彼らを見つけることが出来た。

紫と一緒にのんびり来たためか、自分たちが最後らしい。

「緑谷君、試験では世話になったね。改めて礼を言うよ。それと、これからよろしく」

「う、うん。僕も助けられたから、お互い様だよ。よろしく、飯田君」

「みんな無事合格できてよかったねー！わたしもよろしくね、緑谷くん！」

「うん、よ、よろしく」

出久が挨拶をかわす中、紫は一步下がり出久に隠れるように立っていた。

真面目な人に、明るい人。どちらも彼女とは全く違う人種だと思った。

ヒーローを目指すのだから、悪い人は居ないだろうと理解はしているのだが、もはやこればかりはどうしようもない。悪癖だと自覚し

ているのだが……。

そう反省しつつも中々治そうと動けない彼女を、飯田と麗日が発見する。

「ん？そちらの女子は……？」

「もしかしてA組？ハッ！緑谷くんの彼女さんとか!？」

「へ?!？」

麗日の言葉と、大きなその声に反応したA組の生徒の視線が集まるのを感じ、二重の意味で真っ赤になる紫。

「ち、ちちちが、いや、ちがくないけど、えとえつと、あ、あう……!!」
「お、おちついて紫ちゃん!？」

——未だ告白すらしていないのに彼女とかそんな違うから否定を、でも先に否定をするとA組であることを否定しているような気が、じゃあやっぱり取消し、でもそうなる彼女であることを肯定しているようで——。

そんな風に頭が一気に沸騰しかけた彼女を出久が慌てながら落ちて着かせようとする。

元の無表情に戻るのに暫しかけつつ、紫はどうか言葉返した。

「わ、私は出久くんの小学校からの幼馴染で、彼女とかじゃ、ないです

：クラスは、同じA組です」

「そっかー。ごめんね急に変なこと言っちゃって」

「いえ、すいませんでした」

「私、麗日お茶子。今日から同じクラスメイトだね、よろしく!」

「六道紫です。よろしくお願います、麗日さん……貴女と、そちらの方のことは出久くんから聞いてます。試験で彼がお世話になったところで」

どうにか平常運転に戻り、麗日と握手を交わしつつ、飯田にも視線を向けた。

「出久くんに協力してくれて、ありがとうございます」

「いや、彼の考察に助けられたのはこちらのほうだ……悔しいことに、言われるまでボ・俺は気付けなかった」

「試験でしたし、しかたないです。大型仮想敵も、ギミックとか0点と

か興味を無くすようなことを態々説明していたので、むしろわかる方が少ないと思います」

「ならなおの事助けられたのはこちらの方だよ。俺は飯田天哉、よろしく」

「……六道、紫です。よろしくお願いします」

おずおずとあまり接触することがない異性とも握手を交わし、自己紹介を終えた。

「入学式の後にはガイドダンスかな？先生ってどんな人だろ、緊張するね！」

麗日の言葉に賛同しようとしたその時、ふと背後から視線を感じて振り返る。

「……」

「……」

一瞬誰もいないと思ったが、地面に何か転がっていた。

寝袋だ……そして、そこに黒髪の男性が寝ている。

「出久くん、ふ、不審者……！」

「え？ うわ?!」

「なに不審者だ?!」

「え、ええ!!」

出久の裾を引っ張ってその存在を教ええると、気づいた面々が驚いた。

「……まあこんな格好してた俺が悪いか。静かにー、担任の相澤消太あいざわしょうただ。よろしくね」

——た、担任?!?!——

入学初日にしてA組の心が一つになった瞬間だった。特にうれしくなかった。心を一つにするのがこんなギャグ展開だなんて、と数人が落ち込んだ。

「早速だが、体操服着てグラウンドに集合しろ」

「え、入学式は……?」

「ガイドダンスは?」

「ヒーローになるんなら、そんな悠長なこととしてられないよ。雄英は

「緑谷出久、4秒2」

「っ！」

ガッツポーズ。5〜6%を維持出来た予測値とほぼ同等である。紫が小さく拍手しながら、彼女の番になる。

「トリガー、オン」

創り出した骨の脚甲から衝撃が放たれ、それを推力にして加速。

片足ずつで行うことで減速せずに50mを跳ぶ。

「六道紫、3秒7」

周りが驚くなか、出久は微笑んで見守っていた。

紫の籠手や脚甲、鎧を見て全身に力を纏うフルカウルを思いついた出久からすると、もつといけるんじゃないか、と色々脳内で彼女の力の活用法を、彼女の為に考え込んでしまう。

実を言えば、彼女の籠手や脚甲を考え付いたのは出久なのである。鎧のように纏うことは紫が自衛のために度々行っていたが、それを見た出久がこうしたらどうだろうか、と話をして改良して行った結果が大型の籠手と脚甲だ。

(……無茶しようとしたら消すつもりだったが、問題ないか)

試験で右腕をバッキバキにした出久を気にかけていた相澤。

彼の個性は他者の個性の打消しであり、また大怪我をするようなら止めるつもりだったのだ。

(にしても、流石というべきか)

元々2位だった紫。その後の種目でもほぼほぼトップを取っている。

握力は骨の籠手で握り潰し、立ち幅跳びは脚甲の衝撃波の同時使用でぶっ飛び、反復横跳びも脚甲の横から衝撃波を交互に放つことで記録を伸ばした。

持久走や上体起こしに至っては全身に纏った骨の鎧によってほぼ全自動。長座体前屈も、骨を操るだけあって柔らかい上に骨を手から出し続けることによって記録を伸ばしていた。途中で勢い余って計測器が離れてしまって残念がっていたが、相澤はキチンと計測をしていた。

そうして最後のボール投げに至っては、籠手の中にボールを飲み込み、撃ち出すという荒業までおこなっていた。

(やっぱ創造系はイイな。骨限定な分八百万の奴よりよっぽど速いのも強みか……気になるのは、代償がなにかってくらいか)

あれだけ骨の創造を繰り返している割には疲れている様子も何かを消費している様子もない。そのことが少し引っかけりながらも、種目は進んだ。

そして最後のボール投げまでが終了したところで、一人の生徒が暴走した。

「テメエ、どーいうことだこら！ワケを言えデクテメエ!!」

「か、カツちゃん!」

掌の爆破で加速した爆豪が出久に迫る。

彼からすれば、身体を鍛えていたとはいえ、つい最近まで無個性だった幼馴染が急に個性を得て、しかもその力が自分に負けずとも劣っていないのだ。

それは気になるだろうし、プライドの高い彼からすると道端の石ころが行き成り壁になったような錯覚を覚えて気に入らないのだろう。

「たく、あまり個性使わすなよ……俺はドライアイなんだ!」

(凄い個性なのに、もったいない……!!)

そんな暴走した爆豪を自身の捕縛武器で捕縛し、彼の個性を視て打ち消した。

出久がそんな彼のセリフを聞いて失礼なことを思ったが、ギリギリで口から出すのを我慢する。昔からブツブツと考えを呟いてしまう癖があり、少しずつではあるが紫に指摘され治ってきているのだ。

「ハア。まあパパッと結果発表な……」

そう言っつて宙に投影された結果表。

- 1位 六道紫
- 2位 八百万百
- 3位 轟焦凍
- 4位 爆豪勝己
- 5位 緑谷出久

「や、やったあ〜」

「よかったね」

「うん！あ、紫ちゃんも1位おめでとう！」

「んー私は∞出せなかったのがなあ」

「何言ってる、∞なら二つ取っただろう」

自分の名前を見つけ、思わず号泣する出久と喜び合っていると、先生からそんな言葉を貰った。

だが当の本人は相澤先生の言葉に疑問符を浮かべる。はて、何だろうか。

「まず持久走だ。八百万は電動二輪だったが、お前の場合全自動で特に疲れている様子もなかったからな。時間の都合上切り上げさせたが、時間無制限ならいつまでも走れただろ。次に長座体前屈。途中で計測が離れて言って残念がっていたが、あの様子なら延々と出し続けられたんだろ？」

なるほどーと納得して頷きしていると、相澤は気になる除籍の件についてついでのようにサラッと言った。

「ああそれと見込みまったくなくなしってわけじゃなかったから、アレ除籍無しな。はい、今日はこれで終了、解散ー」

その言葉に最下位だった峰田実少年が「おっしやああああああああああああ!!!」と全身全霊の雄叫びをあげていた。

こうして、入学式の無い入学初日の日程が終了した。

ヒーローの卵たち

出久と紫はいつも二人だった。小学、中学の朝の登校時間から下校時間、つまり放課後まで。

「それが、それが……！」

「出久くん気持ちはわかるけど泣かないで……？」

「えっと、どうしたのかな？」

「どこが悪いなら保健室に行くかい？」

「ううん、大丈夫！ありがとう、本当にありがとう！」

出久が感動している理由。それは麗日、飯田の二人が放課後の帰宅を共にしてくれるという事実にも無い。

ずっと二人だった。寂しくはなかったけど虚しくはあった。周りに人が少ないというのは、それだけ自分が見られていない、認められていない証拠のようで。

さらにそれを覆す出来事はまだ止まらなかった。

「あれ、六道？」

「……——」

「え？」

「紫ちゃんの、知り合い？」

「……ん？」

紫はチラツと少しだけ背後を見て、動きを止めた。

そこに居たのは黒水水舟。今日の今日まで同じ学校ではなかったが故に、出久にはその存在を教えはしたものの会わせたことのない人物。

小柄なのに良くも悪くもインパクト抜群の彼女は、やはりこうした再会もインパクト抜群だった。

「……黒水さん、それどうしたの？」

「ん？ああ彼か」

なにやら一人の少年の襟首を引っ掴んでズルズル引きずって来ていた。おなじB組なのだろう。

AとBで違うことはあまりない。先生が違うくらいで、あとは試験

の順位が平均的になるように割り振られている。A組には1位から4位までが勢ぞろいしているが、その分合格した中でも下の成績の者が複数いる。

そういう点で言うなら、A組がピーキーで、B組はすぐれ過ぎた者がいないが落ちこぼれと言われる可能性を持っている人材が最も少ないと言えるかもしれない。

「えつとねー、もの、モノ……物?」

「も・の・ま、だ!!物間寧人!」

「おおーそれだそれ。おはよーモノ」

「この……!」

黒水は興味のある人間以外をあまり覚えようとしない。

だから今まで出久とは極力会わせることを避けてきた。

無個性の彼に惹かれた紫に興味を抱いていることは知っていたけど、無個性の彼を見て知って、何をしだすのか紫にも予測できなかったからだ。

半端な興味を抱かれた結果が目の中のコレなのだろう。

「そんなに嫌がることないだろう?」

「帰る方向が一緒だと言ったが、誰が一緒に帰ると言ったよ?そもそも様子を見るにA組に知り合いがいるようじゃないか。態々こんなポイント稼ぎなんてせずに、仲良しこよしな奴と帰ればいいだろう?」

「そんなこと言うなよー、ボクとモノの仲だろー?」

「僕はキミと仲良くなった覚えはないんだけどねえ。いや、仲良くするのはいいけども、自己紹介と数回会話をしただけでこんなにアプローチ強いってき、なんなの?尻軽でもこんな軽率な行動とらないよ?」

なにやらポイント稼ぎとか兆発的だったり、後半セクハラ案件スレスレだったり、どこか嫌味な少年らしい。

それこそ水舟の興味を引いた一因かと付き合いの長い紫は理解した。

制服の上からではあるが、それなりに身体を鍛えはしているらし

い。それでもどこか細い印象を受けるのは、ひとえに彼の見かけが一見すれば優しい好青年だからだろう。

口を開けば印象ががらりと変わるようだが、そう言った個性能力外に惹かれたのだとすれば、これから彼は酷く苦勞することだろう。

「オイ、なんでキミは僕に合掌しているんだい？」

「上手く言えないけど……ご愁傷様」

「酷く不穩だ止めてくれ……!!」

取りあえず水舟が気に入るなら悪い奴ではないと判断し、自己紹介を交わすことに。

「A組の六道紫。これから頑張つてね……」

「その憐憫の眼差しを今すぐ止めるか彼女の手を放させるかしてくれないか」

「先人として言わせてもらうね……諦めて」

学校以外での付き合いが長いため、黒水の性格を詳細に知っていた。

だからこそ、合掌も眼差しも止めない。

「えっと、A組の緑谷出久です」

「同じく、飯田天哉だ」

「麗日お茶子です！よろしくね」

「B組の黒水水舟！六道とは昔馴染なんだ」

「紫ちゃんと……？ あ、もしかして凄い人って」

「わー！出久くん、待って変なこと言っちゃダメ……!!」

「え？」

必死に出久の口を止めようとしたが、時すでに遅し。

そもそも出久に興味があった水舟は引きずったまま彼に近づいていった。

「ふむ、遠目に見たことはあつたけど、二人の会話を聞いたことは無かつたなそういえば。参考にどんなこと言つてたのか聴いても？」

「え、えっと」

水舟は興味が向くと一直線な面があるが、あくまで一般常識は持っている。

お嬢様だからこそむしろその辺は重要視しており、空気を読んだ結果として休日出久と一緒に居る紫を見かけても関わろうとはしてこなかった。

性格のバリエーションが豊富な英雄に来るにあたって、どこかでその縛りを解いたのだろう。その結果が、放課後話しかけてきたことと、彼を引きずっている理由。

詰まる所、今まで家柄で固められていた彼女は、彼女なりを重視することに決めた。……もしくは決めていたということ。

(だからって初日から……！)

顔を近づけられた出久がちよっと右往左往しているのにも苛立ちを感じつつ、強引に間に割り入った。

「ほら、今日は入学記念でマックに寄るんでしょ！行こう、三人とも！」

「え？寄るってそんな、ってわわ、引っ張らないで紫ちゃん?!」

「待ってよ二人ともー、それと私そんなお金ないよー?」

「驕るから、いこ」

「えつと……失礼する」

出久の手を握って小走りで行って行く紫たちと、その彼女達を追う麗日と飯田。

そんな彼らに、水舟は笑顔で手を振り見送った。

「うんうん、六道にも友人が出来たようだなによりだ」

「…………それは、興味対象の観察が深まるからかい?」

「んー?言つたろう?昔馴染みなんだ」

観察という意味ではとつくの昔に済んでいる。

彼女の性格は把握しきっている。だからこそ。

「あの子が馴染めるか不安だったけど、一安心かな」

「随分不器用だねキミは」

「そんな褒めるなって。それにモノほどじゃないよー」

「褒めてないしその渾名は気にいらぬし、いい加減手を放せ…………」

「アハハ、そーだ六道たちがマック行くならボクらはカラオケにでもいかないかい?今ならクラスに人も残ってるだろうし、イイねよし行

こう」

「オイコラ待て、自己完結するなっていうか引つ張るな、歩くから自分で歩き、ええい歩かせろ……!!」

くるりと180度体の向きを変えた水舟は楽しげにB組へと戻って行った。

その後、学則に引つかからない程度にカラオケで騒ぎまくったのは言うまでもない。

？

次の日から、学校生活が始まった。午前は普通授業、昼は大食堂でクックヒーロー「ランチラッシュ」の料理を戴き、そして午後は念願のヒーロー基礎学。

「わーたーしーがー!!」

大きなその声に出久を含めた数人がワクワクし始めた。

そう、この声の主こそNo.1ヒーロー。

「普通にドアから来た!!」

最高峰の英雄
オールマイトである。

「すげえ、オールマイトだ！本当に先生やってるんだな」

「画風違いすぎて鳥肌が……同じ人間だよな？」

「銀時代のコスチューム、カッコいい……!」

各々が騒めく中、オールマイトは大きく響くその声で授業を開始した。

「ヒーロー基礎学！ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行う科目だ！単位数も最も多いぞ！」

いまさらではあるが、雄英は単位制である。高校にしては珍しいほうだが、怪我などで授業を受けられなくなる人もいることを考えると、合理的なだけなのかもしれない。

「早速だが今日はコレ！戦闘訓練!!」

戦闘という単語に数人が反応した。特に強い反応を示したのは、爆豪である。

紫は彼についてあまり知らないが、あの派手な個性は戦闘向きで楽

しみなのも領けた。

「そして、そいつに伴ってこちら！入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえた、キミ達の戦闘服だ！」コスチューム

壁からコスチュームを納めた鞆が出現する。態々ロッカーを壁に内蔵するとは、やることが一々派エンターテイメント手である。

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!! それを着て自覚するといい、今日から自分たちは……ヒーローなのだトー！」

渡されたコスチュームの配色は、真っ白。

昔出久が言ってくれたイメージを重要視した結果だ。

(純粹、無垢……)

ほど遠いと思う。人が成長すればするほどにかけ離れていく言葉だし、何より――

(きつと私から、一番かけ離れてる色)

昔から見る夢は変わらない。大きな髑髏の怪物が、自分の目の前に。

だがそれは段々近づいて来ていた。段々、力を使う事をよしとした彼女をまるで呑み込まんとするように。

聴こえてくるのは呪詛で、髑髏の向こう側に見えるのは血に沈んだ、誰か分からない、見たこともない人達。

(それでも……それでも、私は)

出久が喜んでくれた、出久みたいな――なによりも、出久が幻想してくれた英雄でありたいから。

(だから、頑張ろう)

化物だと自覚はある。人でなしの怪物に堕ちてしまう可能性を、きつと誰より持っている。

でも出久の隣を歩くなら、歩きたいのなら、堕ちてはダメだ。呪詛に吞まれてはいけない。

他の人より頑張って頑張って、出久の隣を歩ける英雄になるのだ。

「……よし、行こう」

純白のジーンズ、純白のシャツに純白の上着ジャンパー。

難しい注文はしていない。通気性が良く耐衝撃、ポケットを多めに

つくってもらえるようにと要望を出した。

装甲やら道具やらは自分の骨で瞬時に作成可能だからこそ、なるべく身軽でいたかったのだ。

そして最後に、自分の顔をすっぽり覆ってしまえるフード付きの、大きなコートを羽織る。このコートは骨を出してもなるべく怖がられないようにと要望をしてある。

大きな籠手を作成しても大丈夫なように袖はぶかぶかを通り越してだいぶ長い。コートの裾は立っていても地面につきそうだ。

それでいて自分の身体を隠しながらも動きやすいように、要所要所に切れこみが入っている。

「さあ、始めようか有精卵共!!」

オールマイトの言葉に頷く。ヒーロー見習い^卵がプロヒーロー^{成鳥}になる第一歩、ヒーロー基礎学がスタートした。

うまでもない。

「状況設定は、敵がアジトに「核兵器」を隠していて、「ヒーロー」はそれを処理しようとしている！」

状況設定が意外にアメリカンだった。オールマイトは金髪だが、確かに日本人のはず……。まあ着ているスーツからしてそう言うのが好きなのだろう。

「ヒーロー」は制限時間内に「敵」を捕まえるか「核兵器」を回収すること、「敵」は制限時間まで「核兵器」を守るか「ヒーロー」を捕まえること！ 捕まえたって証はこの確保テープを巻くだけでいい！
そして、コンビおよび対戦相手はくじ。

但しクラス人数が2人で奇数になり一つチームが三人になるが、そこは――

「Plus Ultra」さ！ 不利な状況を乗り越えてこそヒーローの真価が問われるってね。逆もまた然り、有利な状況だからと言って遊びを入れるようではヒーローとは言えない。頑張っ乗り越えてくれたまえ！」

そうして別れた結果は、以下の通り。

- A 「緑谷出久」「轟焦凍」「芦戸三奈」
- B 「障子目蔵」「飯田天哉」
- C 「麗日お茶子」「八百万百」
- D 「爆豪勝己」「六道紫」
- E 「峰田実」「青山優雅」
- F 「口田甲司」「砂藤力道」
- G 「耳郎響香」「上鳴電気」
- H 「蛙吹梅雨」「常闇踏陰」
- I 「葉隠透」「尾白猿夫」
- J 「瀬呂範太」「切島鋭児郎」

「え……？」

「チッ」

思わず爆豪を見る紫と、紫から視線を逸らして舌打ちをする爆豪。あからさまにチームワークに欠けている。

「よ、よろしく二人とも」

「おう、よろしく」

「よろしくね。三人一組なんて、ラッキーだね！」

「ア、アハハ。そうだね」

「……まあな」

三人一組になったAチームは、意外と和気藹々としていた。

入試で三人一組を経験済みの出久はそこまで緊張していない。陽気な性格の芦戸が、軽く緊張をしている出久と、悪く言えば無関心の轟の間をうまく取り持っている感じだ。

陽気な性格をしており、軽い緊張をしている出久と悪く言えば無関心の轟の間をうまく取り持っている感じだ。

「続いて最初の対戦相手は……こいつ等だ!!」

ヴィランとヒーローの二箱に分け入れた英単語の書かれた球を、オールマイトが左右の手で引いた。

「ヒーローチーム、A！ヴィランチーム、D!! ヴィランチームは先に入ってセッティングをするようにね！五分後に潜入でスタートだ！他の皆はモニターで観察するぞ！」

響き渡るその声に、出久と爆豪の視線ががち合った。

？

所定の位置に着くようにと言われ、ビルの建物へと入っていくDチームの二人。

物静かだが、決しているいい意味ではない。ギクシャクしていると丸わかりである。

爆豪と紫に接点はあまりない。出久のことで喧嘩を売る爆豪を諷める役目を負ってはいたが、何時も間に入れば意外なほどに爆豪はすぐ引いていた。

「……オイ、六道」

「へ？な、なになな？」

だから紫は彼から話しかけられたのは、これが初めてだった。

「デクは個性があるんだな？」

「……らしいね。最近発現したんだって」

「最近……ハ、冗談だろ。あんな分かり易い個性が、最近発覚するかよ！ あの、クソナードが……！」

「……出久くんを随分敵視するんだね。彼は努力家で、誠実だよ？ 私よりずっと前から知ってるんだから、わかってるでしょ、それくらい」
出久のことを悪く言う彼に、ムツと少し苛立った紫は珍しく反抗的な口調で返した。

「気に入らねえんだよ……！ アイツも、勿論お前もな!!」
「……」

睨み付けながら怒号を上げる彼に対し、紫の瞳はあくまで冷め切っていた。

「いいか！ No.1になるのは俺だ！ お前らなんかには負けねえ!!」

「……なんでそんなに」

「言つたら、気に入らねえんだよ!!!」

幼い頃から知っている。

何でも持っていた自分と、何も持っていなかった出久。

——「大丈夫？ 立てる？」

誰もが慕ってくれた自分と、自分についてくるしかなかった出久。

——「君が、救いを求める顔してた……！」

石ころ同然だった。簡単に蹴り飛ばせる、そんな軽い存在のはずだった。

なのに、いつもいつも「ヒーローになる」「オールマイトは凄いと、自分と同じことばかり言っていて……それが真似じゃなく本心だったのが、尚の事苛立ちを感じさせる要因になった。

それを加速させる原因になったのは——

——「キミがヒーローになったら、きつとナンバーワンになれるよ」

目の前の、白い少女だ。

よりによって何故出久なのだと、自分を軽くあしらっていて、何で無個性の出久なんだ。

——丁度いい機会だ、あの時は怒りと痛みで言えなかったことを、今言おう。

スツと大きく息を吸って、堂々と爆豪は紫に宣告した。

「俺がナンバーワンになる！アイツじゃねえ、アイツより……俺が上だ!!!」

「……………」

これは、ダメだと思った。

彼がダメではなく、紫自身のことだ。

爆豪の想いはあくまで出久に向いている。その過程で自分が引つ掛かっただけなのだ。

怒りの欠片でこれなら、出久と彼を遭わせるのは避けたほうがいいかもしれない。……でも。

「出久くんは、貴方を凄い人だって言ってたよ」

「ア”ア!?だからなんだ！加減でもしろってか!?”

「違う、全然違う。頭が良い貴方なら分かってるでしょ、そんなのを求める人じゃない。……露払いはしてあげる。堂々と真正面から想いをぶつけ合うといいよ」

「言われねえでも、アイツは真正面から叩き潰す……………」

その言葉が強くて、どこか出久に似てるなんて紫は思ってしまった。

(…………ああそっか)

何処までも真っ直ぐに何かを見つめて自分の感情を露わにするその憤怒の姿は、同じように、どこまでも愚直にヒーローに憧れる出久のそれと同質のモノなんだ。

自分にはない出久との共通点を見つけてしまった。

この時点で、紫が爆豪に協力しない理由が消えた。

?

「えつと、二人の個性は半冷半燃と濃度調整が出来る酸だね」

「ああ。ただ、戦闘で左熱を使う気はねえ」

「え？」

「勝つ気はある。安心しろ」

「う、うん……よし、作戦だけど」

「いや、大丈夫だ。それより外出てる、危ねえから」

「え？」

声を揃えて疑問符を浮かべる彼らをおいて、ビルの前に立つ。

「向こうは防衛戦のつもりだろうが、俺には関係ない」

そして、スタートと同時に建物ごと凍らせてみせた。

「足元滑るし、後は俺が——」

「ダメ！避けて!!」

「？」

出久の言葉に、頭より先に身体が動いた。入口に向けて跳びこむ。

同時にBOM!という大きく派手な音が、先程まで自分のいた辺りから響いた。

爆豪だと理解した瞬間、前方から伸びてきた骨の腕に轟と芦戸が捕えられ、屋内に引きずり込まれた。

「デエクウウウウウウウウウ!!!」

「かつちゃん……!」

屋内に引きずり込まれた二人の心配は一瞬だけ。轟の個性なら凍らせて砕くことも可能だろうし、芦戸なら自分ですり抜けられる。

そう判断した直後、視線を巡らせ状態と状況の確認をする。

そして少し火傷した裸足の爆豪を見て、一瞬で状況を理解した。

(凍った足を靴ごと爆破したのか……!)

爆破した直後、窓をぶち破り落下、加速して真下に居た轟を狙ったのだろう。

紫が無事な理由は考えるまでもない。彼女は全身に骨を纏って戦う。

脚が凍っていたとしても、自分で纏った骨を砕いて解除すればすぐ動けてしまう。

更に、内側から骨が生える彼女には、生える際にあいた穴が直ぐに塞がるという、一種の高速治癒があることも把握している。恐らく、

轟と芦戸相手に万全の状態を迎え撃ってくるはずだ。

「まずっ」

迎撃しようとする、爆破を器用に使い空中で方向転換される。背後に回られた直後、ビル内に蹴り込まれた。

(あくまで屋内戦闘をする気なのか……！)

恐らく、轟と芦戸を中に引き入れるまでの流れは、紫との作戦通りなのだろう。

このまま外で戦えば授業の内容にそぐわないから中止をくらうかもしれない可能性を、ギリギリ逃れるためだ。

「やっぱ、強いなあ……！」

あんなに怒号をあげているのに、頭の中は意外とクールだ。

一周回って冷静になっていられるのかもしれない。なら尚のこと強敵であると判断して——笑った。

「ンだよ、ヘラヘラとよオ！」

「かっちゃんだって、知ってるだろ」

——「私が来た!!」

「ヒーローは、笑顔で皆を救うんだ……！」

「そんなの——！ やっぱ、ムツカつくなあ!!!」

一階にて、爆豪と出久の戦闘が始まった。

屋内戦闘訓練―後

轟と芦戸が引きずり込まれた先は、二階だった。

一階の天井を破壊し、そこから骨の巨手が伸びていたらしい。数秒と掛かっている回収速度に驚きながらも、骨を急速冷凍し、砕いて降りた。

隣では芦戸が衣服を溶かさないように、器用に骨の一部を溶かして滑り降りていた。

(……落ちずに、降りれた?)

さつきまで大穴があいていた場所は、骨が幾重も重なり合い、絡まり合うようにして埋められていた。

急いで飛びのき、慣れ親しんだコンクリートの床に移動するが、さつきの埋め方は上にかぶせるのではなく、まるでシャッターのように穴の側面から骨が突き出ていた。

(もしかしなくても、囲まれてるって考えたほうがいいか)

轟がビルを丸ごと凍らせたように、二階部分のコンクリ内部に骨を刺し込むことで、自分たちを骨の檻に囲み入れたのだろう。ただ骨で囲まれただけなら、全て凍らせて砕くことは容易だったのだが、こうしてコンクリに阻まれてはそれを一瞬でこなすのは困難だ。

一見すればコンクリートの壁にしか見えないが、何処から骨が飛び出るか分からない緊張感が二人を圧迫する。

「……出来ればおとなしく捕獲されて欲しかったんですが」

「そう簡単にやらせねえよ」

「ああびつくりしたー。凄いな六道さん！」

一人何やらテンションが違うと思いつつも、お互いを観察する。まず紫。二人を前にして、巨大な手を関節を外し落とすことで切り捨て、新たに籠手を創造している。先日の授業で見せたのより右が大きく、左が小さめだ。

(恐らく右で範囲攻撃、左で近接ってことなんだろうが……)

気になる点として、脚。脚甲を纏ったそれは地面にピタリと癒着したまま動く様子がない。

落とした巨手は動く様子がない……つまり。

(アイツは脚から創造した骨を地面に突き刺すことで、2階の壁と地面内部に骨を入り巡らせたまま、操ることができる。だが、恐らく動けない)

なら、遠距離から攻撃すれば勝機がある。

「……ここで大人しくしてくれるなら、攻撃しません」

「勝機が少しでもあるんなら、諦めねえよ」

「え、マジ？勝機見つけたの!？」

「芦戸、少し離れる。壁には近寄りすぎるなよ。……おそらく、六道は動けない」

「マジか!？」

轟の推測と芦戸の驚きに対し、紫は無反応で返した。

それが正解かどうか覚らせないためだ。

「俺の失敗でペース持ってたんだ……悪イが汚名返上の為にも倒させてもらうぜ」

パキパキパキと冷気を右から放出する轟に対し、紫がとった行動はシンプルだった。

「よ、っと」

「な?!」

「おおーなるほど」

足元を伸ばしたのだ。足裏から骨を新たに創造し、竹馬のように立ったままジャンプした。

「轟さんには悪いけど、此処は私の空間です。……勝機なんて、与えませんよ」

更に紫の背後の壁や天井から、関節が幾重も連結した細い骨が何本も生え、紫の背中に突き刺さった。

コンピューターで言えば、新たに配線を増やしたのだ。

伸ばした骨を外し、脚甲を何時もの状態に戻す。

「……ごめんなさい」

地面に改めて降り立った瞬間——轟と芦戸を、全方位から骨が襲った。

「この！」

「わ、わわわ!？」

凍らせようとする轟と、どうにか避けようとする芦戸。

だが無意味。無限に増殖し続ける骨は避けようと思っただけ避けられるものではない。

凍らせ、砕いた端から新たに作り出され、あつという間に二人を霜の降りた骨の檻が囲んだ。

「寒そうですね、轟さん」

「……チツ」

轟の体には、霜が降りていた。

彼が使える凍結力には限界がある。使いすぎれば自身を凍らせてしまう諸刃の剣。

「昨日の授業で少し使っていた左を用いれば、まだ戦えるはずですよ？」

「……そうだな。だが、この密閉空間で、しかもこうも分かり易く命を握られちまうとどうしようもねえよ」

左の熱を使えば確かに体温は戻せるが、この密閉空間で無暗に炎を扱うわけにはいかないし、氷を溶かすことになり、芯まで凍らせ無効化した一部の骨が全て復活することになる。

降参だ、と轟が呟き、無理に避けようとして変な体勢になった芦戸も同じくと辛そうに呟いた。

「六道さんー、助けてー、この体勢キツイー」

「……取りあえず、テープ巻くまで待つてください」

「はやくー」

芦戸と轟に確保テープを巻きつけ解放する。

「これ見よがしな籠手も、脚甲も俺の意識を集中させる陽動か。流石だな……昨日のことで分かったことだが」

「つよすぎー」

圧倒されてしまった二人は文句を呟くが、紫は無言を通した。

何を言えいいのか分からないのだ。

取りあえず一階が気になるが、行くわけにはいかない。

「……頑張つて」

紫は少し下を向いて祈るように、静かに呟いた。

？

——BOOM!!

一階の戦闘は、爆豪が僅かに優勢だった。

爆豪の縦横無尽な動きに対し、昔からの癖を知り尽くしている出久は彼の動きを分析、予測し避ける。

対する爆豪は天性の戦闘センスに任せ、避ける出久を追い詰め、時折予測を超えた動きをして少しずつ圧しはじめていた。

「どおしたよーそんなもんじゃねえんだろ!!」

「ぐうウツ!?!」

避けきれない爆破を両腕でガードするが、衝撃が体を通り抜けて何度も行えることではないと判断する。

(ダメだ、今のままじゃかつちゃんの動きに追いつけない……!)

身体を鍛えていたし、本を読みこんで得た格闘に関する知識は人一倍持っている。その知識を組手と称した実戦形式で紫相手に試したことだってある。

だからこそ、空中を自在に動く爆豪相手には通用しない。

地に足を付けた闘い方ではダメだ。

「なあデクーいや、緑谷出久!!」

「!?!」

急に蔑称から本名で呼ばれ訝しむも、その間も猛攻を防ぐのに必死で、怒号に耳を傾けるしかない。

「今まで面白かったか!?!愉快だったかヨ!?!ずっと俺を騙して、ひ弱なフリしやがってよオオ!!」

「ぐっアツツー!」

違う、違うと心の中で否定するが、言うだけの暇も余裕もない。

このままじゃなぶり殺しである。

「ガキの頃からずっと、オレを舐めてたんだろ!! ずっと、ずっとよお!!」

「——う」

「なあ、どんな気分だったよ。俺もあの女も、全部騙して満足かア!?」
右の大振り。爆豪の一番分かり易い攻撃の癖が来た。

タイミングとしてはばっちりだった。さっきまでの調子ならあたっていた。

だが、爆豪の叫びに応えようと必死だった出久は弄ばれている間に新たなステージへと跳びこんだ。

「——違うよ」

爆豪の目の前から、出久の姿が一瞬消えた。

優れた動体視力がギリギリ彼の影を後追いし、天井へと顔が向いた。

「スマッシュュッ!」

「ガッ!」

天井を蹴り、上から落ちるように降り下ろした拳は、防がれることなく爆豪に直撃した。

「騙してなんかない。この間まで、僕は無個性だった」

「この」

「キミを舐めたことなんてあるもんか! ずっと、ずっと凄いと思ってきたんだ!! ずっと、身近なキミだから憧れてきたんだ!!」

爆豪の叫びの全てを否定する。

トリツキーに空中を爆破で飛び回る彼に対し、天井、床、壁の全てを発着点とした、まるでゴムボールのように跳ねまわる動きをする出久。

出久はこの短い間に、爆豪の動きを吸収し、取り入れていた。……否、爆豪の動きだからこそ取り入れられた。

「そんなキミだから、勝って超えたいんじゃないかバカヤロー!!!」
届け、届けと必死に声を荒げる出久。

何処までも真っ直ぐで、真摯で、今まで無視しようとしてきたそれらが、自分とキミは同格なのだと目の前で輝いていた。

その全てが目障りで、爆豪も叫び返していた。

「その面^{ツラ}ヤメロヤクソナードオオオオオオ!!」

爆豪の左手が、右の手榴弾の形をした籠手のピンへと向かって行った。

耳元のマイクからオールマイトの静止の声が聞こえた気がしたが、爆豪の頭の中に入っては来なかった。

一方出久も、彼の籠手のギミックについては想像がついていた。どれだけ彼を見てきたと思っっている。どれだけ、彼の個性に魅せられてきたと思っっている。

「――!!」

振り上げた腕に力が籠り、袖が破けた。

今の出久にはとても耐えられない力が右腕へ込められていく。

――次の瞬間、ビルどころか仮想街を大きく揺らすほどの衝撃が巻き起こった。

？

モニタールームでは、そんな彼らをハラハラと見守る教師とクラスメイトが居た。

スタートと同時に凍りついたビルを見て、決着があっさりついたと思っっていた数分前が嘘のような緊張感が場を包んでいた。

「ちよ、死んだ!?!」

「くっ! 緑谷少年、爆豪少年!! 聞こえてるか!?!」

一階にあったカメラは軒並み吹き飛んでしまったらしく、全てが砂嵐に包まれていた。

たまらず手元のマイクに大声を上げるが、返事はない。

「六道君! 一階に確認を」

『……まだですよ』

「なに?」

『まだ……終わってないんでしょう? 私は邪魔しないって約束した

うえで此処にいます。オールマイト、クラスの皆、ごめんなさい。私は授業より彼らを優先します』

「……」

絶句するクラスメイトと違い、オールマイトは紫の言い分に共感してしまっていた。

出久がヒーローになる事以外で見せた、初めての感情の爆発。これは彼にとって、絶対必要なことだと、感情的な部分が叫んでいたのだ。

「な、何言って」

『ごめんなさい』

最後にそれだけ言って、紫は耳に付けていた無線機を取り外してしまった。

「ど、どうするんだこれ？」

「現場に行くしか……あ、アレ！」

耳郎が一つだけ奇跡的に残っていたカメラ映像を見つけた。

地面に落ちても配線がギリギリ繋がっていたらしく、時折画面がブラックアウトしかけるが、どうにか現場を映していた。

「ば、爆豪しかいねえぞ」

「というか、爆豪君の背中しか見えないね」

息を切らせたように呼吸を荒げる爆豪。

目の前には籠手に溜まった爆発物ニトログリセリンによって生まれた惨状があった。

彼の目の前は壁も柱も吹き飛び、吹き抜けになっていた。

出久の姿は見え、彼が居た場所には大きな穴が空いていた。

「少年……」

モニタールームに居た全員の心が沈みかけたその時、カメラに動きがあった。

『SMASH』

無線機からギリギリ聴き取れた、小さな呟きと共に爆豪の背後に現れた出久は、彼の首筋にトンツと軽い衝撃を放ち、彼を気絶させた。

？

爆豪の最大火力が放たれる直前、出久は腕の力を解いていた。

(違う、ダメだ)

ワン・フォー・オール
この力は誰かを傷つけ、殺すだけの力じゃない。

真逆の意味で使われるようにと与えられたのだ。なら、ここでこんな風に使うべきじゃない。

腕に込めていた力を、右足に集中させた。

爆豪の籠手から力が放たれた直前、身を限界まで屈めて脚に籠めた力を解放する。

出久の、まるでオールマイトの様な超速移動の痕跡は、爆発の閃光と爆音によって見事に隠された。

地面に穴を空けてしまったが、爆破の影響だと思った爆豪は気付かなかった。

そして、残った左足を使って彼の背後に一足飛び。

「――SMASH」

気付かれないように小さく呟き、彼を気絶させることに成功した。

「痛つてえ……!!」

だが、出久も倒れ込んで動けない。着地の衝撃に加え、跳ぶときに10%を超えたのだろう、バキバキになった右足程じゃないが、左足も痛みを訴えていた。

『――そこまで！勝者、ライラン敵チーム!!!』

動けなくなった出久を確認したオールマイトの声が、無線機から響いた。

「つてことは、轟くんと芦戸さんを攻略したんだ……やっぱすごいなあ」

考えていた作戦では、爆豪を自分が抑え、紫を二人がかりで攻略してもらおうつもりだった。

思っていた通りではなかったが、構図としては作戦通りになったから半ば安心して任せたのだが……相手のペースに持って行かれた時点で作戦は破たんしていたのだろう。

二人を見事捕えた紫を、出久は寝転びながら称えた。

「……負けたのか」

「あ、かつちゃん」

「……何だお前、そのザマは」

気絶していた時間は1分にも満たない。流石のタフネスだった。

座り込んだ爆豪は、倒れ込んでいる出久のバキバキに折れた右足を
見て呆れた声を出した。

「……………かつちゃん、僕は」

「あー、いい。何も言うんじゃねえ。……勝者は勝者らしくしてろ」

「あ、いや一応チームではかつちゃんたちの勝——」

「るせえ。お前に負けた時点で俺にとつちや負けなんだよ」

あれだけ感情を破裂した後だからか、何時もの彼らしくないしおら
しさを醸し出していた。

「……………出久」

「……………ええええ!?いい、いまかつちゃん僕の名前……………?」

「るせえつつつてんだろ……………いいから聞け、ボケ」

「あ、うん」

相変わらず口が悪い彼は、ぶつきらぼうに宣言した。

「もう負けねえ、こっから俺は一番になってやる……………お前もあの女も
全員追い抜いてな」

これだけ好き勝手やったのだ。授業としてみれば最下位なのは自
覚していた。

だからこそ。もう負けないと、今負けたとしても頂点に立つのは俺
なのだ、爆豪は出久に宣言した。

「……………僕も、負けない。今はこんな風にバキバキになつちやう勝ち方
しかできないけど、今度はちゃんと、この力を自分のモノにして……………
キミに勝つよ」

「ハッ！勝者が何言ってるんだバカかよ」

そうしてそっぽを向いたつきり、彼らは言葉を交わさなかった。

言うことは言った。全てはこれからだと、顔も合わせようとしな
い癖に、彼らの心は一つになっていた。

頼られるということ

ボロボロになった出久は搬送用のロボによって保健室へと連れていかれた。

残りはモニタールームに集合し、講評を始めた。

「さーって、初っ端から色々問題だらけだが。まず今戦のベストは、六道少女だ！理由分かる人!?」

オールマイトの元気な問いかけにいの一番に手を上げたのは、黒髪ポニーのナイスバディ、ヒーロースーツは自分の個性に合わせて露出の多い八百万 百だった。

「瞬時に骨の鎧を作りだし、見事轟さんの凍結から逃れ、4階にあった核兵器を骨で囲むことで保護した上で戦闘準備を始めた上に、氷を砕いて窓から飛び出した爆豪さんに合わせるように動き、見事轟さんと芦戸さんを捕獲したことです」

「そのとーりー！まあ二人を捕えた後に動かなかったことは減点すべきところだがね」

「……分かってます、寧ろ評価されたことに驚きです」

六道としては二人を捕えた時点で授業放棄していたのだ。

こうしてこの場で、評価してもらえただけ感謝である。

「そして次点は緑谷少年だ。三人一組という有利な状況にあつて慢心せず味方の個性を把握し、作戦を立てようとした。轟少年の独断によつて解説はなかったがね。」

その後爆豪くんととの戦闘も床に大穴を空けた以外は素晴らしい。殺さず意識を刈り取る選択の切り替えも見事！ただ、両足が使えなくなつてしまったのは減点だ。これでは後に繋がらないからね！」

出久の講評については後で彼に聞かせるのだろう。言いながらメモを取つてカンペを作つていた。

「その他の三人は、悪いが同着最下位扱いだ。爆豪少年は私怨丸出しの特攻。しかも一階とはいえ核がある建物を爆破！大きく減点した」

「……うす」

今回の自分の行動は理解しているようで、何時ものように何か怒鳴

るつもりはないらしい。

「轟少年は有利な状況で有利な個性ということで油断遊びが生じたうえに、緑谷少年の作戦を無視。協調性はヒーローにとって素晴らしく大事なことだ。これもまた大きく減点した。それと、凍結しか使わないというその意思、理由は問わない。」

だが！そう決めたのならますます油断してはいけないし、キミは自分の力しか使わないという大きなハンデを背負うことになる。尚のこと協調性は大切だぞ！」

「……すいません」

「最後に芦戸少女！言わずともわかっているだろうが、今回何も出来なかったね。緑谷少年や轟少年の指示待ちでは、ヒーローとしてやっていけないぞ。自発的に動けるように頑張ってくれ。キミは性格は明るく、自己主張は他の二人より優れていた。そんな君が率先して動けるようになれば、核を扱うなんて言う現場でも気持ち明るく、程よい余裕というモノが生まれるはずだ！」

「は、はい」

サラサラツと手元のノートに記載すると、箱を取出し次のチームを決めはじめた。

「さあ、問題だらけだったが、熱い初戦の熱を冷まさないうちに次行こうか！」

？

ヒーローVS敵はその後も快調に進んで行った。

2回戦目の峰田&青山VS麗日&八百万は、意外にも苛烈なものとなった。

始めは見事な講評をした優等生である八百万の活躍を全員が期待していた。

核を守る罫を張り巡らせたり、麗日が重さを無くした鉄塊で核を囲むと言った護り全開の戦法。

期待通りの素晴らしい護りっぷりだったが、相手が悪かった。

女体に全力で向かう峰田と、目立ちたい青山の奇行は良い意味でも悪い意味でも優等生な彼女の思考からかけ離れたものになった。

罨に対し粘着力の高い頭の球体を投げつけ誤発させた上に、球体の上をピョンピョン跳ねて全力で女子二名の胸に飛び込もうとする峰田。

目立つために移動や配置を無視してカメラを意識しまくった的外れな青山のレーザーは意外なことに麗日、八百万の邪魔となった。

想定外にも麗日と八百万を色んな意味で圧倒していたが、抱き着くことに一生懸命な峰田は並んで立った二人に跳びこみ、避けられた上に二人がそれぞれ端を持った確保テープに見事絡め取られ、青山はその後数の差で捕まった上に鉄塊に反射していたレーザーが偶然にも核に掠っていたらしく大きな減点を喰らった。

女体に齧りつくような全力不審者だった峰田も、ヒーローとしてこれまた大きな減点を喰らった。

「……私、今までないくらい疲れたよ」

「私もですわ……色んな意味で疲れました」

もうこの相手とは戦いたくないと思っただ二人の感想だった。

3回戦目、耳郎&上鳴VS蛙吹&常闇。

この戦闘は敵チームである蛙吹&常闇の圧勝となってしまった。

耳郎の個性によって見えない上の階の様子を音で探るまではよかったのだが、向かってみれば常闇一名のみしか立っていないかった。

天井と柱の陰に隠れた蛙吹の奇襲を受け、上鳴がそれを阻もうとしたが、放電することしか出来ない彼はすぐ後ろにいた耳郎を気にして放電できず、伸ばした舌とカエルの特徴を生かした天井からの攻撃に押し負け確保。

耳郎は常闇の個性によって擬似的な2対1に持ち込まれ確保された。音波が通じない影が相手だったというのもまた運が無かった。

配置が逆だったらまた違っていたかもしれない結果となった。

4回戦目、障子&飯田VS葉隠&尾白。

これはヒーローチームの圧勝となった。

透明人間葉隠の動きは複製した耳によって障子が全把握、透明にな

るために裸になった彼女は口クな抵抗も出来ずに確保された。

そして一人となった尾白は高速機動のできる飯田に翻弄され、得意の空手を活かせず確保。相性の悪さがもろに出た結果となった。

最後、5回戦。口田&砂藤VS瀬呂&切島。

これは接戦の結果、ヒーローチームの勝利。

核のある部屋を瀬呂のテープを使い入り難くし、動きづらいその階ではなく、一階下で守ることを選んだ二人。

それに対し、砂藤は持ち前の怪力を活かして堅い切島相手に互角の戦闘を見せた。

その間に少し離れた場で行われた口田と瀬呂の戦闘だが、口田が全力で瀬呂から逃げつつ窓を開けることに専念した。

始めは何をしているのか分からなかった瀬呂だが、窓が開いた瞬間全てを理解することになった。

何処からともなくカラスやハトが飛び込み瀬呂を翻弄。その間に駆け登り核のある部屋を移動し辛そうにしながらもタッチし確保、勝利となった。

？

放課後になり、治癒が終わった出久が保健室から帰ってくると、彼が思っていた以上に教室に人が残っていた。

午後に授業が割り振られていたのは、こうして怪我をすることが予測されていたからだろう。

「おお！緑谷来た！おつかれ！」

「戦闘凄かったよー！」

「一戦目であんなのやられたから俺らも力入っちゃまったぜ！」

「へっ？」

想定外に話しかけられ、困惑する。

その後自己紹介をされつつ、やはり困惑が抜けなかった。

無個性で基本虐められるか無視される日々を送ってきた彼には新鮮なのだろう。

どうすれば、と紫に助けを求めようとしたが……。

「骨の装甲はどんなことを考えて造っているんだ？ 黒影の使い方の参考にしたいんだが」

「え？……えっと、動きを阻害しないように、かな」

「なるほど」

「！ 俺の放電とか纏ったら鎧みたいにならねえかな!？」

「えと、どうだろ。……放出するだけなら、サポート科に頼んで指向性のある装備を造って貰った方が、いいかも。それと、生体電気を加速することが出来たら、擬似的に視覚や思考速度を強化、できるかも？」

「え、加速？ なにそれどういうこと?？」

「六道さん！ 同じ創造系として聞きたいことがあるのですが!」

「え、あ、……あう」

緑谷に負けず劣らずの人気っぷりで緑谷以上に困っていた。

彼女自身昔から出久と行動を共にしており、出久を苛めるような人を排除していたら孤立していた。

端的に言つて、コミュ力最低レベルという共通点を持つ二人にとって、この状況には目を回す事態となった。

頼られるというのは嬉しい事だと、二人が実感する良い日になった。

？

そして、次の日。

マスメディアからの質問を嫌な顔して躲しつつも登校する。

オールナイトが教鞭をとっているという話が広まった結果、入学初日から毎朝毎夕続いていることである。

「さて、昨日はお疲れ。爆豪、お前もうガキみてえなマネするな。能力あるんだから」

「……わかってる」

「ならいい。さて、ホームルームの本題だ。急で悪いが、今日はキミらに……学級委員長を決めてもらう」

一瞬、抜き打ちテストでもやるのかと緊張した空気が、破裂した。

「『『学校っぽい来たー!!』』」

ヒーロー科では集団を纏め導くという、トップヒーローの素地を鍛えられる役でもあり、クラス中が手を挙げた。尚、紫は出久にやってほしいという想いから手を挙げていない。

「静粛にしないか！ 多をけん引する責任重大な仕事。やりたい者がやれるものではない!!これは、民主主義に則って、投票で決めるべき議案……!!」

そう皆を静止した飯田だが、彼の腕もピンと伸ばされていた。

「『『そびえ立ってんじゃねーか!!何故発案した!?!』』」

盛大にツッコまれていたが、それは難しいと思う。日も浅いのに関係など分からないだろうし、そもそも自分に入れるに決まっている。

飯田はだからこそここで複数票をとった者こそふさわしいんじゃないか、とごり押しした結果――

緑谷出久 5票。

八百万百 2票。

他、1票。数人0票となった。

「つて、うえ?!ぼ、僕?!」

出久に入れた紫は驚く出久に拍手を送っていた。

出久に票を投じた紫は、驚く出久に拍手を送っていた。

出久に入れたのは、紫、飯田、麗日、轟、芦戸だろう。受験で世話になった二人と昨日の授業で同じチームになった二人なら入れそうだ。

八百万は彼女自身と、0票になっている蛙吹だと思われる。講評が素晴らしかったからだろうか。

ついでに紫に一票入っているのは、恐らく出久だ。

(……出久くんがやるんなら、副委員長やりたかったかも)

ちよつと不満げになりながらも、その日のHRはそのまま二人を委員長、副委員長として決定した。

「う、が、がんばります……!」

緊張と不安でガチガチになっている出久を見て、出来ることは協力

しようと思いつつ、午前の授業が始まった。

途方もない悪意

昼休みになり、出久、紫、飯田、麗日、轟、芦戸の六人は一緒に学食で昼食をとっていた。此処雄英の学食はランチラッシュというヒーロー主体で回しており、質も量もぴか一である。サポート科や経営科と言った他科の生徒も集まり大賑わいで行列ができているが、それでも大して待たなくていい速度を維持して料理を作り続けている。辺り、さすがプロという事なのだろう。

「委員長かあ……務まるかなあ」

「出久くんなら大丈夫だよ」

「そうそう、だいじょーぶ！」

「ツトマルツトマル！」

「大丈夫さ」

「……まあ何とかなるだろ」

何時ものように出久に微笑む紫、元気に明るいう芦戸、ご飯をおいしそうに食べている麗日、冷静な飯田にぶつきらぼうながらも返事をしてくれる轟。

このメンバーを集めたのは、意外なことに紫だった。

理由は単純で、出久に票を入れた人を予想した彼女が出久が選ばれた理由を教えてあげられる機会を作ろうとしたからである。

「緑谷くんのここぞという時の胆力、判断力は多をけん引するに値する。だから投票したんだ」

「……少なくとも、まだまだ考えが足りない俺が今やっていい役じゃないと思っただけだ」

「授業の時は話聞かなくてごめんねー。でもあの爆豪くん相手によくやったよ、もっと自信持っていって！」

「そーそー、緑谷くん凄いモン。受験の時も授業の時も頑張ってたし！」

「受験って何したの？」

「ああ、彼は実技試験が始まるその前に、試験の救助Pに気付いていたんだ……僕はそれに気づけなかった……!!」

「『僕?』」

悔しそうに呟く飯田のその一人称に、轟以外の全員が反応した。

「ちよつと思つてたけど飯田君つて坊ちゃん?!」

「おぉー!」

「……そう言われるのが嫌で一人称を変えていたんだ。俺の家は代々ヒーロー一家で、俺はその次男だよ」

「凄ーい!」

「……」

一瞬轟が飯田に視線を向ける。

何か思うことがあつたのだろうか、特に会話に混ざらずそばを睨つていた。

「東京に事務所を構えているターボヒーロー「インゲニウム」というヒーローでな。それが俺の兄なんだ」

「ターボヒーロー、インゲニウム!65人もの相サイドキック棒を雇っている大人気ヒーローだね!そっか、そう言えばあのヒーローの個性も……」

「流石詳しい」

「緑谷くんヒーロー知識凄いな!」

「もはや芸かな?」

「アハハ」

「まあともかく、俺は兄に憧れてヒーローを志したんだが。未だ俺に人を導く立場は早いと思う。上手の緑谷くんが就任するのが正しい」
出久の投票の話から、少しずつ会話がずれて行って行ったその時、校舎中に警報が鳴り響いた。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください』

アナウンスが行われ、生徒が一塊になって動き出した。

セキュリティ3は侵入者在り、という報せらしい。雄英の先輩ですら初めてだと騒ぎながら移動していた。

(マズイ、避難経路は入学してからパンフで見ただけだ……! これじゃあ)

出久の予想通り、避難訓練を経験していない1年や、初めてのこと

に大慌てになっている先輩たちによって出入口がぎゅうぎゅうに詰まっていた。

「皆、動かないで！」

「え？」

「な、なんで？」

「む」

「……」

出久の声に麗日、芦戸が疑問の声をあげ、飯田と轟が何かに気付いたように座りなおした。紫は出久の背後に立ち、彼がどうするか見ていた。

「紫ちゃん、台を作ってくれないかな？」

「いいよ……あ」

これから慣れない事をしようとしているのだろう、緊張と不安で震えている出久の肩を、紫はゆっくり両手で押えた。

「大丈夫。出久くんなら大丈夫……貴方は此処にいる5人に選ばれたんだよ？」

「……うん、ありがと」

少し震えが治まった彼に微笑み返し、骨で3メートルほどの台座を作成する。

土台は押し寄せる生徒の邪魔にならないように、テーブルの上¹に造った。

そこに麗日の無重力で軽くなり、登って現状を把握する。

（……侵入者って、報道陣じゃないか!?!）

今朝の²がまだ残っていたのか、と驚きながらも窓ガラス向こうの光景から、³敵が襲ってきたとかいうわけじゃないと判断する。

（……でも、報道陣がセキユリテイを破った、のか？）

一瞬、そんなことをすれば門前払いを喰らう上に警察沙汰になることを察し、本当にこれが報道陣が起こした騒動なのか疑うが、今はそれは後回しだと考えなおす。

両腕に力を込め、許容度⁴限界⁵の力で思いつきり両掌を叩いた。

たかが10%と侮ることなかれ、言ってしまうばオールマイトの1

割の力だ。大きな音と、軽い衝撃波が起こり、食堂中に響いて注目を集めた。

(う、あ)

ジロつと食堂に居た生徒、纏めようとしていたランチラッシュ等の視線が集まったのを肌で感じる。

今まで出久に向けられてきたのは、軽蔑や無価値なものを見る冷たい視線だった。

でも今は違う。同じ雄英生として、受験の段階で此処に来れる存在だと全員がある程度認識を持っている。

いったい何なんだ、という視線に固まるが、直前の紫の言葉を思い出した。

(そう、だ……僕は、選ばれた)

飯田は真面目で、委員長に向いていると思った。

麗日はその持前の優しきで引っ張っていける可能性を持っているし、芦戸だつてあの明るさでクラスをけん引すれば、楽しい雰囲気を作ってくれるはずだ。

轟なんて推薦入学者で、きつと自分より色んなことが出来る人だし、紫だつていつも自分を立ててくれるけど、とても優秀な子なんだと誰より出久が認めている。

そんな彼らに認められたのだ。

(怖がってる、場合じゃないだろ僕!!)

そう、こんな時はどうすればいい？

答えは何時も胸の中にあつた。

——ニコツと、今の自分で出来る最大の笑顔を作る。

「だ、大丈夫です！只のマスコミです！慌てないで、落ち着いてください!!」

出久の言葉に窓側に居た生徒が「ホントだ、マスコミかよ」と眩きを溢したのをきっかけに、騒ぎが落ち着き始めた。

流石雄英、落ち着けばなんてことはない。転んだ生徒を起こし、互いに怪我が無いかの確認をし始める。

誰も怪我していないことが分かると、ゆっくり列を作つて食堂を後

にした。

その後の授業で他の委員を決めるとき、出久は珍しく言い淀んだりせずスムーズに決めることが出来たのは、この経験のお蔭だと後で紫に語っていた。

？

次の日のヒーロー基礎学は少し変わった趣向をとって行われた。相澤、オールマイト、そして13号という三人体制で見ることになった。

その授業とは――

「災害水難なんでもござれ、人命救助訓練だ」

レスキュー。それは、ヒーローの本分ともいえる。全員がやる気に満ちながら、着替えの後に、移動するためバスに乗り込んだ。

出久のコスチュームは修繕中の為、体操服での参加となっていた。(憧れに近づく為の訓練……！頑張るぞ！)

やる気満々の出久に、隣に座っていた女子が話しかけてきた。

カエルの個性をもつ、小柄な少女。蛙吹梅雨という少女だった。

「私、思ったことを何でも言っちゃうの緑谷ちゃん」

「は、はい？蛙吹さん？」

「梅雨ちゃんと呼んで」

彼女には悪いが、長年紫以外全員苗字で呼んでいた出久には、そのハードルはかなり高かった。断る理由もないので頑張ってみることにする。

「あなたの個性、オールマイトに似てる」

「?!?!」

驚きを隠せない出久。

あの超パワーを見せたのは、受験と先日の授業の時の二回のみ。先日の屋内戦闘ではカメラに映っていたのも一瞬だったはず。

だが、やはりオールマイトと言えば超パワー。似ていると言われるのも仕方ないことかもしれない。

「えっと、ほら僕はバキバキになっちゃうし、似て非なるものだよ。あ、アハハハ」

「それもそうね」

内心冷や汗満載の出久。他の皆はともかく、紫にはバレタかもしれないとガクブル状態である。

「しつつかし、増強型のシンプルな個性は良いな！派手で出来ることが多い！」

「切島君の個性だって十分カッコいいと思うよ？」

「でもやっぱヒーローって人気商売みてえなところあるからさー、やっぱ分かり易いってのはいいと思うぜ？」

「硬化能力だって凄いよ。硬い、倒れないっていうのは一種の安心感があると思う」

個性の話、ヒーローの話。

出久にとっては紫としか出来なかつた対話を出来る嬉しい時間となった。

「派手で強えて言ったらやっぱ爆豪と轟だよな」

「あの破壊力と殲滅力はやっぱなあー」

「…でも爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気でなさそ」

「んだとコラ、出すわ!!」

「出すってお前……早速キレてるし。いや、でもこの付き合いの浅さで、クソを下水で煮込んだ様な性格って認識されるってすげえよな」

「何だそのボキャブラリーは！殺すぞコラ!!」

「……ヒーローが殺す発言、信じられませんわ」

「アハハ、でもこういうの好きだ私！」

爆豪がイジられているという今までの日常からは考えられないような体験もしつつ、バスは目的地へと到着した。

？

そこは、一見するとテーマパークの様だった。

実際は水難事故、土砂災害、火事、遭難など様々な災害別に分けら

れた施設なのだが。

「あらゆる災害、事故を想定し、僕が造った演習場です。……その名も、ウソの災害や事故ルーム！」

下手すれば訴えられかねない事を堂々と説明したのは、スペースヒーロー13号。

災害救助で活躍しているヒーローだ。麗日が大ファンらしい。

「……？ 13号、オールマイトは？」

「先輩、それが……通勤時に制限ギリギリで活動してしまっただけで、仮眠室で休んでます」

「不合理の極みだなオイ」

三本指を立てた13号の意味に気付いたのは、相澤と出久。

彼にはもう、一日ヒーローとして動ける時間が3時間ないのだ。

（そっか。今朝のニュースでも、活躍してたって報道があつたつけ）

携帯で読んだ記事を思い出しつつ、より一層やる気を出す出久。

早く一人前になるためにも、訓練あるのみ。

「しかたない、始めるか」

「えー、では始める前にお小言を一つ二つ……三つ、四つ」

何故か増えていくその話を、全員が静かに聴く。

大ファンの授業という事もあり麗日のテンションが少し上がっているが、元気よく頷く位で大人しいものだ。

13号の話は、当たり前だがとても難しい事だった。

自分達が持っている個性は人を救えるが、同時に簡単に命を奪える危険なものでもある。今の超人社会は個性の使用を資格制にして、規制することで成り立っているように見えるが、結局誰もが危険な個性を持ったままだという事。

今までの授業で自分たちの個性の把握、それを人に向ける危うさを体験したからそこは十分に分かっているだろう。

「だからこの授業では心機一転！人命の為に個性を活用する術を学んでいきましょう！君たちの力は誰かを救うためにあるのだと、心得て帰ってくださいな!!」

カツコイイ！とその場にいた誰もが思いながら、授業を開始しよう

としたその時だった。

——ズズ……——

様々な施設に道が繋がっている中央広場。
そこに、黒いモヤのようなものが現れた。

——ドクンッ

「……？」

何故か、それを見た紫の中で何か^が疼いた。

そのモヤから出てきた悪意ある視線を受けて、更にその疼きが酷くなっていく。

「ひと塊になって動くな!!!」

相澤の言葉にハツとして、全員が13号をち中心にするように移動する。

「13号、生徒を守れ！」

切島が、入試の時の様なもう始まっているパターンかと動こうとしたのを、一喝して相澤が止めた。

「動くな！ あれは、」

そう、あれは——。

「^{ヴイラン}敵だ!!!」

——殲滅しなければいけない。

何故そんな言葉が浮かんだのかなんて、紫には分からなかった。

街中で遭う騒動とは違う。攻撃的なその悪意に、紫は思わず自分の腕を自分で握りしめた。

怖いからじゃなく、動かないために。

きつと今動けば自分はあるそこに飛び込んでしまう。そんなことを確信するほど、強い衝動が彼女を襲っていた。

「オールマイト、いないのか？ 貰った情報と違うな……子供を殺せば来るのかな？」

掌を体中に纏わりつかせた、自分達より少し年上の青年の言葉にA組全員がゾツとしつつも、驚愕した。

これが、プロが実際に体験している現実なのだ。こんな殺意のなか人命救助を行っているのだと。

そんな中、同様に感じていた紫の中で何かが眩いた。

——コロセ——

奇しくも人命救助の授業に現れた敵^{ヴァイラン}達。

彼らと1—A、2名の教師の戦いが始まるまで、時間はかからなかった。

計画紛れ思惑現る

「敵!?ばっかだろ、ヒーローの学校に入り込んでくるなんて、アホすぎるぞ?!」

そう慌てた誰かが騒いだ。

だが、彼らは事実侵入者用センサーをすり抜けこの場に現れている。

しかも今日、校舎から離れて行われる授業内容を知っており、用意周到。

「バカだがアホじゃねえ。これは、何らかの目的があつて画策された奇襲だ」

「13号！避難誘導を頼む。それと学校に電話試せ！電波系の個性が妨害してる可能性もあるが……上鳴、お前も個性で連絡試せ」

「ツスー」

相澤はそう言つてゴーグルを掛け、特性の拘束布の準備を手早く済ませる。

「一人で戦う気ですか!?イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛で、正面戦闘は——」

「二芸だけじゃ、ヒーローは務まらない。13号、任せたぞ！」

勢いよく階段を飛び下り、広間へと落ちていく。

射撃しようとした敵の個性を消し拘束布で絡め捕ると、空いた手で異形型を巻きとり、腕を交差するように勢いよく引いて敵同士の頭をぶつけさせ、二人気絶させる。

相澤の個性は異形型を消すことはできない。だが、だからこそ彼らに対する対策もしっかり用意している。

集団相手に突如個性を消し、相手の動揺を誘う。ゴーグルをしていて視線が分からないため、迂闊には動けなくなつて連携に乱れが出る。

「すごい、多対一こそ先生の得意分野だったんだ」

「分析してる場合じゃない！早く避難を——」

USJから移動しようとした13号と生徒たちの前に、黒い霧状の

人間が現れる。

さつきまで相澤の個性によつて移動できなかつたが、瞬きの瞬間を狙つて現れたのだ。

「初めまして、我々は敵^{サイラン}連合。僭越ながら、この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは――

――平和の象徴、オールマイトに息絶えていただきたいと思つての事でした」

全員に驚愕が奔つた。

あのオールマイトを殺す、と言い出したのだ。

あり得ないと思ひながらも、全員臨戦態勢をとる。

「本来ならばいらつしやるはずですが、何か変更があつたのでしょうね。まあ私の役目はそれとは関係なく」

敵のセリフを待つ気はない、とA組でも血の気の多い二人が動いた。

身体を硬化させて顔面を狙う切島と、それに合わせ、視線が切島の腕で隠れるようにワンテンポ遅れて相手の懐へ飛び込み爆撃する爆豪の二人だつた。

「おお!?合わせてくれたのか、サンキュー!」

「未だだ、感触がクソだつた」

「は?」

「危ない危ない」

クソつて?と疑問を浮かべた切島だが、直ぐに敵の言葉が紡がれたことに驚く。そう言えば、振るつた腕が何かに当たつたような感触が無かつたことを思い出す。

「生徒と言えど、優秀な金の卵」

「どきなさい、二人とも!!」

13号の声は間に合わない。

「!みんな、近くの人と手を繋いで!!!」

出久の声に隣同士だつた者達が互いを掴んだ。

瞬間、黒い靄の様なものが全員を呑み込んだ。

「散らして、蹴り——殺す」

視界が黒い霧で埋まっていく中、その言葉だけが響いた。

「ぐ、——水難!？」

出久は目の前にいた二人を掴んでいた。蛙吹、峰田の二人だ。

水中には大勢の敵が見えた。

「……………ここは、悪天候か？」

「……………」

暴風、大雨ゾーンには常闇と口田。

同じように敵に囲まれている。

「何時まで掴んでやがるクソが!？」

「んな怒るなつて!？」

同じように倒壊ゾーンには爆豪、切島が。

「……………」

「わ、わわわやばくない!？」

「ど、どうしょ」

土砂ゾーンには轟に襟首を掴まれた芦戸が、手袋と靴以外が透明なため見失うと面倒な葉隠の手を掴んでいた。

「あ、アハハ、デンジャラス☆」

「この状況でよくキラメいてられるね……………」

火災ゾーンには尾白と、少し弱弱しいながらも星を溢す青山。

「……………え?」

「なに、これ」

「は、はああ!!？」

山岳ゾーンには八百万、耳郎、上鳴の三人。

だが、そのゾーンだけは他のゾーンと違い、隠れていた敵に囲まれるという事態にはならなかった。

「おや、やっときましたね」

「あーあ、ついてないね貴女達」

なぜなら、彼らを襲うはずだった敵は、二名の敵と思われる者に軒並み倒され、地に伏していた。

唯一電気系と思われる敵^{サイラン}だけは、何故か宙に浮いたままジタバタしている。

オカシイことに気付いたのは八百万。優秀な彼女は、この状況に二つのパターンを思い浮かべた。

(仲間割れ?)

可能性は十分にある。

だがオカシイ、まだ何も始まっていないのに序盤も序盤でこんなことをして何になるのだろうか。

(もしくは、元々仲間でも何でもない人たちによる、別の思惑……)

仲間でもないこの二人が敵^{サイラン}連合とやらに潜り込んでおり、何か目的があつて学園に侵入した第三者の場合。これが一番可能性が高いと踏んだ。

そして、拙いと感じる。

敵^{サイラン}の力量は知らないが、未だ広場で相澤先生の戦いは続いている。あれは二対集団だ。彼らが二対集団の戦闘を行ったと考えると、戦闘が終わるのが早過ぎる。

(倒れている者の個性は千差万別、倒され方は亀裂にクレーターが出てくる辺り、増強系もしくは異形型による一撃必殺……!)

全力で自身の創造の個性を働かせる。

物理的防御力をあげる為、鋼鉄の盾を両腕に作り出した。他にも自身の内側で何時でも作れるように準備する。

「お二人とも、気を付けてください……この二人は、強いです!」

「ア、アハハ……マジ?」

「え?え?」

耳郎は八百万の様子から、今の状況を察した。

ざっと見たところ、自分達三人でこの人数相手にすればそれなりに時間がかかるだろう。だが、彼らは恐らく二人で、此処に現れてからまだ数分しか経っていないにも拘らず、この場の敵^{サイラン}を一掃されている。

(実力は、ウチらよりも上……!)

未だ状況を分かっていないバカを小突いてしつかりしろと伝える。

他と違い、異質な思惑が彼らを絡め取ろうとしていた。

？

時間を少し遡る。敵が黒い霧のような個性から次々と姿を現す様子を、別の場所で見ている者達がいた。

「鬼門、開錠」

広場に現れた敵達と違い、その少し奥にある山岳ゾーンに現れた渦。

そこから現れたのは、右のこめかみから黒い上向きの角が伸びた、赤い短髪の17歳ほどの少女だった。

さらにその後ろから、白衣のようなものを着て口元を黒いマスクで覆った、真っ白い長髪の青年も現れる。

「で、こんな場所に何のようなの？」

「サラ様が先生と呼ばれている者の動きを察知したらしいので、ちよつと紛れて一人か二人攫つて来て欲しいそうです」

「此処がああ雄英高校だって知つてて無茶言うわよね……」

「ええ、無茶は承知。雄英の教師、特にオールマイトが現れた時点で逃げるようにとのことでした」

「ふーん。……ん？」

二人が会話をしていると、ぞろぞろと隠れていた敵達が姿を見せた。

「なんだお前ら、生徒じゃねえだろ」

「確か集場所にはいなかったよな？」

チンピラのようなメンチのきり方、個性を発動してはいるが隙だらけの彼らを一瞥する。

「空佑、此奴らはどうしろって？」

「接触した場合は、殺さない程度に加減しろと」

「嘘、あのサドマゾ博士が手加減しろって言ったの!？」

「サラ様が、仮称とはいえ先生と呼ぶような存在だということです。バレるのは承知の上、だからある程度怒りを買わないようにという事だし

た」

信じられないと言った様子を露わにして驚く彼女に、そう言えばと空佑が人差し指を立てた。

「火野さん、そういうえば一応私のことは二号と呼んでくださいね？」

「え、なんで？」

「念の為だそうです。先生をそれだけ警戒しているのですしよ」

「ふーん。……じゃあ私のことも三号って呼ばないと拙いんじゃない？」

「あ、それもそうですね」

これはうっかりと言った様子の空佑に思わずため息をつく火野と呼ばれた少女。

空佑の実力を知っているだけあって、このおとぼけたような感じは慣れないとため息をつく。

「てめえら、人のこと無視してなにイチヤイチャしてんだ!」

しびれを切らせた異形型の敵が岩石の^{サイラン}ように固く、巨大で重い拳を火野に向かって振りかぶった。

「誰が、イチヤイチャしたって？」

「んな!」

少女は細腕一本でその剛腕が止めたが、彼女の足元で地面に亀裂が入って陥没していた。

火野の足元に亀裂と陥没が起こり、その衝撃の強さを現していた。「そうです、私はサラ様一筋。この愛、全て捧げる相手は決まっているのです」

「ガッ」

スツと軽く空佑が腕を揮えば、敵の^{サイラン}身体が、その方向にあった崖に礫になった。

「う、うごけねえ……!!」

「さつきも言いましたけど」

「はいはい、そもそも命令されたって殺さないってっ——ば!!!」

気合いの入った正拳突きが巨漢の敵に^{サイラン}突き刺さる。

岩石のように固い肌を打壊し、叩き付けられた背後の崖に大きな亀

裂とクレーターを作った。

「……あ、やり過ぎた？」

「……まあ死んでないようですし、次は気を付けてくださいね」

「うーん、まだコントロールが難しいんだよね」

「なら丁度いい機会です」

空佑の視線が敵^{サイラン}達へと向けられた。

この場に現れる雄英の子供をただ蹴り殺すだけでいいと言われていただけの陳腐な彼らは、その視線に寒気を感じた。

「——彼らで練習しましょう。都合のいいことに、数だけは居ますからね」

「了解」

「ああそれと、電波を妨害している者がいたら言ってください。私が押えますから」

では、手早くお願いしますね。という空佑の言葉から起こった少女^{サイラン} VS 敵 十数名の戦いは、山岳ゾーンに現れた黒い霧によって雄英生徒が移動させられてくる数秒前に片付くこととなった。

「おや、やっときましたね」

「あーあ、ついてないね貴女達」

やってきた三人の少年少女を見て、二人が呟いた。

警戒を露わにする彼女らを見て、三号火野はため息を溢す。

(ホント、ついてないなあ……)

出来れば誰も来ないでほしかったのに、と誰にも分からないよう口パクで愚痴を溢した。

「悪いけど、捕まってもらうわ。私三号、火野^{ひの}彌生^{やよひ}。こつち二号の空佑^{くう}。今日からよろしくね」

「……番号で言う意味がないでしょそれでは」

「どうせこれから長い付き合いになるんでしょ？ だったらいいじゃない名前くらい」

そう、永く付き合わせるのだから。

憎む相手の名前くらい教えてあげてもいいだろう、と彼女は憐れむ

視線を彼らに向けた。

前哨戦

目の前の爆豪と切島が転移させられた直後、13号がブラックホールで吸い込んだおかげで、正面数名が転移を免れた。

六道、飯田、麗日、障子、砂藤、瀬呂の六名だ。

真正面から霧を噴出されたのが幸いした。360度囲まれていたら幾ら13号でも無理がある。

彼はブラックホールの個性を、指先から吸い込むように範囲を絞り込むような戦闘服を設計し制限している。そのため、意外と範囲攻撃を苦手としているのだ。

「……？ 六道さん、大丈夫？」

ずっと腕を押え込んでいる紫を、麗日が気に掛けた。

紫の視線は虚ろで、どこか虚空を見つめているようだ。

流石に様子がおかしいと生徒の視線が集まる。そんな中、遂に掴んでいた腕から出血しだした。見れば掴んでいる腕から骨が創造され、掌と腕に突き刺さっていた。

「——!! 六道さん、手離して!？」

「六道くん、どうした!？」

「せ、先生なんか六道の様子が!？」

「落ち着いてください。大丈夫、私が守りますから。皆さんは六道さんを看んでください!？」

邂逅する敵の悪意にさらされ緊張や恐怖心のあまり自損行為をしていると思つた13号は、紫を安心させることを優先した。

「……それと、飯田くん」

「は!!」

「キミに託します。個性を使い、学校まで一直線に駆けて伝えてください」

「な!? し、しかし」

「皆を救うために、おねがいします」

「……!」

外に出れば警報機があり、少なくとも先生がいる。

誰かに伝えられれば、危機を伝えれば、

——オールマイトが、来る。

だが自分でいいのか、自分がこの場からクラスメイトを放って行っているのか、と飯田が葛藤していると、瀬呂や砂藤、麗日が背を押した。

「イイから行けって！外に出れば何とかなる！」

「お前の脚ならあのモヤ振り切れんだろ!？」

「サポートなら私超出来るから！一気に加速しちゃって!!」

「見たところモヤを出す入口、最初の発生源はあの敵ヴァイラン自身を基点としているようです、私たちが敵を抑えます」

「お願い、飯田君!!」

彼が決断をしたその時、紫の中で異変が起きていた。

緊張などしていない、怯えてなど決していない。

(ア、う)

——がしやがしやと、骨が蠢く音がする。

誰かが何かを言っている、何かが誰かを呼んでいる。

(ダレ……??)

誰かなんて分かり切っていたけれど、訊かずにはいられなかった。

今の今まで、コレと語り合おうなんて考えたことすらなかったのだ。

だから……返事が返ってくるなんて、想像すらしていなかった。

『『我々は『がしやどくろ』……戦乱の最中に誕生した、愛憎の妖』』

思考に空白が生まれた。

煩い骨の音が響く中、男性の様な女性の様な、大人の様で子供の様な、老人みたいで赤ん坊みたいな声はつきりと聴きとれた。

『殺せ、ころせ、コロセ!!』

『敵をー!』

『戦乱の世を!!』

『平穏を壊す存在を!!』

ゴオツ!!と、凄まじい風切り音を残して、紫の背後から現れた骨の巨腕が巨漢——脳無を襲った。

相澤を押し込んでいた脳無はそれを防ぐ挙動をとり、そのまま弾かれ壁に叩き付けられる。

「おいおい、マジかよ。対平和の象徴用の特注だぞ?」

呆然とした敵から声ワイランがこぼれた。

相澤がピンチに陥ったのを助けたのは、ヒーローでもその卵でもなかった。

「う、グ、ガ——」

「ろ、六道、さん?」

ボロボロと、紫の瞳から何かが零れ落ちた。

それは何故か黒くなり罅割れた瞳周辺の皮膚と、涙。

「に、げ——!!」

声にならない悲鳴をあげながら、彼女の左半身から骨が溢れ出した。

肉や皮膚が骨格を覆うように、さらなる骨によって骨がおおわれていき、巨大な白い左腕が生成される。

背中から生えていた巨腕もさらに太くなり、加えて巨大な骨の尾まで現れた。

右半身は生身のまま、左半身だけに巨大な腕と尾を無理やり付け足したような、歪な骨の化物に変貌する。

目は虚ろになり、重い身体を尾だけで支え浮いた。

「何だアレ。……やれ、脳無」

壁に叩き付けられたままピクリともしなかった巨漢が、青年の声に飛び起きた。

「……」

「ア、ガ、ガ、ガガ、ガガガガガガガガ!!!」

巨漢は喋るといふ機能が無いのか無言のまま駆け出し、対する紫は壊れた声を撒き散らしながら尾で地面をたたき壊しながら勢いよく跳ねる。

悪意と敵意を相互に向けあい、平和を殺そうとする怪物と、命を守

ろうとして怪物と化した少女がぶつかる。

？

「転移させられた者達の中で、いの一番に片が付いたのは土砂ゾーンだった。」

芦戸と葉隠の前に一步出た轟が敵達を一瞬で凍らせ終了。戦闘にすらなっていない。

「す、すごー」

「さっすがあー！」

「……さて」

驚く葉隠とはしやぐ芦戸を一瞥して、自分のやるべきことを行う。殺す、と言ってきた割に連れてきた敵の強さは大したことが無い。精々チンピラレベルだ。

あの広場でヤバそうだったのは、手を体中に纏わりつかせていた男と、黒い靄の転移野郎、そして脳味噌丸出しでギリギリ人間だったとしか分からないにか。

どれが切り札だかわからなかったが、少なくともこのチンピラ連中ではないことは察しがついた。

「なあ、このままじゃアンタ等じわじわと身体が壊死していくわけなんだが」

「……い！」

「え、えし!?!」

「ちよ、轟くん!?!」

敵も味方からもこいつマジでヒーロー科か!?!という目で見られる。今は勘弁してくれと思いつつ、言葉を紡ぐ。

「俺もヒーロー志望。そんなヒデエとはなるべく避けたい」

「なるべくって」

「十分酷いよ!?!」

「……」

正直黙ってほしいが優先事項を効率的にこなすために無視する。

冷徹な視線を意識して、目の前の連中を見つめた。

「あのオールマイトを殺れるつつう根拠、策って何だ？」

まずは情報収集。こつちが考えて動くのも全てはそこからだ。

「ねえねえ、さすがにちよつと可哀想だよ……」

「せめて手足以外は溶かしてあげよう！」

「……はあ」

女子二人に翻弄されつつも、轟は何とか情報を手に入れるのだった。

？

同じくあつさり終わらせたのは、倒壊ゾーン。

ビルの中で授業を受けただけあつて、爆豪も切島もスムーズに動くことが出来た。

「弱えな」

ぽいっと気絶させた連中を地面に投げ捨てながら爆豪が吐き捨てる。

額から汗一つ溢していない。彼のスタミナが凄いのもあるが、切島と要所所でコンビプレーをしたおかげで余裕があった。

切島の硬化は爆豪の爆破に巻き込まれても問題なく、ごり押しという点においてこれほど噛み合うやつは居ないだろうと爆豪は評した。

「っし、皆を助けに行こうぜ！」

「いや、こんなチンピラクソツカス連中相手なら問題ねえだろ。デク……出久のバカ声で少なくとも二人一組以上にはなっただろうしな」

「……お前」

「ア？」

「ホントに爆豪か?！」

「この状況でふざけんなクソ髪野郎ぶつ殺すぞ!!」

「あ、俺の知ってる爆豪だ」

余りにも冷静な思考を披露する爆豪に思わず本音を溢す切島。数日前までの爆豪とは違う様子に思わず動揺したのだ。

「……助けに行きてえなら一人で行け。俺はあのワープゲートぶつ殺す！」

「はあ!?俺らの攻撃通用しなかっただろ!？」

「いや、対策がねえわけじゃねえ。……それに敵の唯一の出入り口だぞ。元締めとく必要あんだろうが!」

確かに、と切島が納得する。

顔も言ってることも敵サイランみたいだが、やろうとしていることは実にヒーローらしい。

「じゃあな行つちまえ」

「待て待て男らしい選択じゃねえか!ノツたぜ爆豪、おめえに!!」

?

火災ゾーンは、とても混沌としていた。

青山のビームの遠距離攻撃と、尾白の高い近距離戦技術は意外と噛み合い、少しずつではあるが敵サイランを減らしていた。

「アツハツハ、さあ僕のキラメキをとくとご覧☆」

「……まあ、いっか」

ビームを撃つ度にどういうわけか煌めく青山にいくらかツツコミを入れたかったが、ぐつとこらえて敵を倒していく。

彼が目立つ分、時折自分を敵サイランの視線から外すことができ、ヒーローとしては余り行いたくないが不意打ちが面白いほど上手くいった。

?

暴風・大雨ゾーン、ここもかなり有利な戦いとなっていた。

口田の個性は他の動物が見当たらない上、嵐の音で少ない動物に声をかけることすら難しかったが、それでも雄英ヒーロー科の一員。動き回り、敵を誘導していた。

そしてこの場で一番の功労者である常闇。彼の個性は暗いほど効果が高まる。

何時もより巨大化した「黒影」は大いにその暴威を振るっていた。しかも、紫の話を参考に、器用にも黒影の一部を自身に纏わせ近距離も行えるようになり、彼の戦闘の幅の広がりがあるまま有利な状況へ導いていた。

「……そうだ、口田」

「？」

「お前に我が闇を授けよう。これで俺の近くでなら戦えるはずだ」

黒影の一部を自分に纏わせる要領で口田にも被せた。

攻撃はともかくとして、防御力はぐっと上がり生存率も上がった。

紫と八百万の会話から、創造する際には物事に囚われない様な工夫が時には必要であると勝手に聴きながら学んでいたのだ。

？

水難ゾーンでは、一度はプールの中で待ち伏せしていた敵達によつて危機に陥ったが、蛙の個性を持つ蛙吹によつて救われた緑谷と峰田。

「……戦つて、勝とう。オールマイトに勝つ算段があるのなら、少なくとも僕たちが足手まといになつちやいけない！」

「は、はあ!? 無茶言うなよ、先生待つた方がいいつて!」

「峰田くんの言う通りの事が出来たらいいけどさ、この状況で先生たちが来るまでもつと思つう?」

「……! それに」

蛙吹によつて窮地を脱したとはいえ、客船の上に飛び乗れただけの現状。

水場に有利な個性の者に囲まれた今の状況が長く続くとは思えない。

「敵達は時間割も設計も把握していたにもかかわらず、蛙の個性を持ってあるあすつつ、梅雨、ちゃんが、ここに移動させられてること、オカシイと思わない?」

「……頑張ってくれてありがとう、自分のペースでいいのよ」

「あ、うん。ありがとう」

蛙吹の名前を頑張って呼ぼうとする出久に和みながらも、会話が続く。

「で、つまり、なんだよ!？」

「僕らの個性は、把握されていない」

「そうでしょうね。私のことが知れているのなら、あつちの火災ゾーンにでも放り込むわね」

「僕らの個性が分からないから、態々散らせたんだ。僕らの個性が未知であるってこと、これが勝利の鍵だよ!」

無論、それは向こうも決してこちらを舐めているわけではないということになる。

事実船が上がってこないのは個性を恐れ、警戒しているからだ。

「個性の確認をしよう。僕は増強系。一定の力を超すとバキバキになるけど、超パワーを発揮できる」

「私は跳躍と、壁に張り付けて、舌を伸ばせるわ。20mほど。後は胃袋を外に出して洗ったり、少しピリツとする程度の毒性の粘液を分泌できる」

「ぶん、ぴつ……」

「……峰田君は?」

何やら感激している彼を促すと、頭の髪でもある丸い球をもぎ取った。

それを壁に貼り付け、ブヨンブヨンと揺らす。

「超くっつく。体調によっちゃ一日たつてもくっ付いたまま。もぎつた傍から生えて来るけど、モギリすぎると血が出る。オイラ自身にはくっ付かずにブニブニ跳ねる」

「……つかえるね」

「無理しないでいいぞ!!どうせオイラの個性は戦闘に向いてねえんだよ!!!」

「いや、ホントに——!!」

うわあああと嘆く彼を宥めていると、船が大きく揺れた。

どうやらじれつたくなつた敵の一人が船を水流で割つたらしい。

「ど、どどどどうすんだああ!?!もう船沈んじまうぞ!?!」

「落ち着いて峰田ちゃん」

「落ち着けるかよ!?!怖くねえのかお前ら!?!ついこの間まで中学生で、入学してすぐ殺されるって何なんだよくっそおおお!!!」

「……どうするの、緑谷ちゃ——?」

泣きわめく峰田から目を逸らし、緑谷へと向けた。

思わず言葉を途切れさせてしまう程、彼は集中して考えていた。

泣いていた峰田も、そちらを見て涙が止まる。

「——これでいこう」

肩を震わせ、必死に恐怖を押し殺しながらも、緑谷出久は二人に作戦を提案した。

破滅的攻防戦

上鳴が自分の危機を悟ったのは、戦闘が開始してから僅か3秒後の事だ。

耳郎が個性であるイヤホンを足のスピーカーに差し込み、音による衝撃を放つまで2秒、八百万が新たに武器を創造した直後のこと。

「なっ——」「ぐ、あ!？」

正面に居た白髪の男が片手をこちらにかざした瞬間、攻撃動作を行つた二人が壁に張り付けにされた。

（——ハ？）

そして自分の目の前には紅い髪の美人さんが。

街でばつたり会つたらまず話しかけるであろう、めつちやタイプだとか数秒前に思考をよぎらせていた自分がその瞬間に消滅した。

（マズ、い!!）

バチツと稲妻が彼の体内を駆け巡る。

以前、紫に自分の個性「放電」について訊ねた時に返ってきた言葉、体内電気を操作できれば、というアレ。

彼なりに調べた結果、彼の個性は体内で電気を造って貯蔵する行為「蓄電」と、体外に放出する「放電」が正解らしい。

残念なことに、彼には片腕から放出すること等は出来ても、指向性を与えることが出来なかった。結局全方向に撒き散らしてしまう。

じゃあ「蓄電」はどうだろうか？

偶に自分の個性を説明するときは何気なく指から電気をパリツと出していたことがある。体内から体外に出すという行為はスムーズに行えた。

じゃあ体内で「蓄電」していた電気を「体内に放出する」というこの行為はどうかというところ……意外過ぎるほどに上手くいった。

（どうするどうしよどうにかしろ!!）

目の前が止まったのかと錯覚するほど遅くなり、それに反比例するように上鳴の思考速度が上昇した。

これが恩恵その一、動体視力、思考能力、その他感覚の鋭敏化であ

る。

鋭敏化というが、上鳴自身若干痺れているため、プラマイで考えれば若干プラス程度にしかなくていないが、動体視力と思考速度の上昇はかなり上手く噛み合ってくれた。

(取りあえず、避ける！)

恩恵その二、脳に電気が奔っているせい、今の上鳴は本来掛かっている人間のリミッターが外れていた。

お蔭でゆつくり見える光景の中、自分だけは何時にも通りに動くことができる。

床を踏み割るほどの威力によって瞬動してきた火野彌生と名乗った彼女の拳を余裕で回避する。

(ついでに、痺れる！)

恩恵その三であり、デメリットその一。

今の上鳴は常時「放電^{個性}」を使っている状態であり、このまま何時も通り放電してしまうと今までの恩恵は全て効果が切れてしまう。

だからこそ、彼は対象に触れなければならない。そうすれば対象のみに稲妻が駆け巡ることになる。今の上鳴は手加減が出来ないからこそ、指先でも触れてしまえば最大威力を一瞬で流せてしまう。

「ギヤウ!？」

火野の首筋にサツと指を触れるだけで、彼女が痺れ倒れてしまう程の威力。

この加減が利かないのは恩恵であり、同時にデメリットその二だ。ヒーローとして相手を殺しかねない行為は避けるべき。

(つて言ってられねえ!!)

自分の思考に自分でツツコみを入れる。だが彼には喋ってる暇も余裕もない。

最大のデメリットその三、常時放電を行っているため、彼はすぐ「アホ」になる。

加速した時間の中では数分動いているつもりだが、殆ど数秒から数十秒の出来事だ。

更に脳のリミッターが外れており、アドレナリンもドバドバ出てい

るから痛覚が働いていないため分からないが、つまり今進行形で彼の体は壊れていつている。

ショートするのはどう考えても脳に電気を奔らせているからであり、放電の威力を調整出来ればいいのだが、今まで放出しかしてこなかった彼に微調整なんて言葉は縁が無かった。

アホになつてはロクな行動をとれず、アホにならなくてもどのみち壊れた体では碌な戦闘は不可能——故に、上鳴は最大威力にして最速で勝負を終わらせなければならぬ。

(近づけ、走れ、走れ——!!)

白髪の男に向かって走る。

ほぼ停止したような時間の中、自分以外が動くことは余りなかった。

あの爆発的な加速をした火野でさえゆっくりになる中、白髪の男は視線をこちらにはつきりと向けた。

(ツとに人間かよ!?)

迷っている暇などない。このままでは自分も捕まってしまう、恐らく誰かに助けられることなく終わる。

(あーつくそ!!)

もう一つ、この技には大きな恩恵であり、最後のデメリットが存在する。

彼はずっと「体内で蓄電」し、それを「体内に放電」している。

つまり、今の彼は電撃を溜めこんだ爆弾と同義といってもいい。

これを開放すれば絶対あの白髪を倒せると言い切れるほどの威力があることを、彼は学校で許可を得て行った放課後の結果から知っている。

そして、それを行えばどうなるかもよく分かっている。

(イメージしろ！イメージ、イメージ!!!)

特訓に付き合ってくれたのは時間の都合上一人、セメントスというコンクリートを操る先生だった。

彼は個性はイメージによって大きく効果を変える、と言っていた。

自分の放電は何処からやっても結局全方位だが、一方向に向けるよ

うに意識すればそちらに威力が重視され、他は拡散した余波になるだろう、と。

だから彼はイメージする。伸ばした右掌だけから雷が放出する光景のみを。

(くらえ――)

技名はない、というか覚えていない。

付けたあの日もぶっ放してすぐ忘れてしまったからだ。

起きたら保健室で、セメントス先生に会っても先生自身技のインパクトに驚いてど忘れしてしまっていた。

「!!!」

それが、最後のデメリット。

雷の大爆発を生んだ直前、大体数秒から数分の記憶が焼き切れる上に、必ず気絶する。

(悪いな、あとの――……………)

八百万と耳郎は幸い、敵によって離れた壁に張り付いたままだ。

余波ならちよつと痺れる位で済むだろうと気楽に考え、彼は笑みを浮かべ気を失った。

?

「か、上鳴……」

「……………」

戦闘開始直後に壁に張り付けられていた二人が地面に降りれた。

つまり、相手に何らかのダメージを与えたのだろう。

あまりに唐突で速い動きに二人にはついて行けなかったが、離れていたが故に何が起こったのか把握は出来た。

怪力任せの高速移動に対し、上鳴が高速のカウンターを行った。

その直後、個性測定の時みせた50m走とは比較にならないほどの速度で駆け、白髪の男、空佑に近づいたと思ったら稲妻が炸裂、二人は降りれた。

炸裂したのかさせたのか二人には分からなかったが、結果として砂

煙の向こうには上鳴が――

「…いまのは、本気で死ぬかと思いましたよ」

――地に伏していた。

空佑は所々火傷や痺れた様子を見る限り無傷とはいかない様だが、無事なようだ。

対する上鳴は空佑の足元で白目を剥いて気を失っている。

「嘘、でしょ!？」

「あれでもまだ」

あの威力は今の耳郎に出すのは不可能。

八百万は可能かもしれないが、創造に時間がかかりすぎる。

空佑がどのくらいで回復するかわからないが、そこまで時間がかからないことは予測できた。

「さて、」

空佑が動こうとしたその時、凄まじい衝撃波と突風が全員を襲った。

「今度は何!？」

「わ、分かりませんわ!!」

それが来た方向は広場で、堪らずそちらへ視線を向ける。

本来なら人間なんて粒以下にしか見えないだろうに、あり得ない物が三人の目に映った。

「骨、の腕!？」

「六道さん…?」

「……これはこれは」

巨大な骨の腕が何かに向かって叩き付けられ、その瞬間に粉碎されては新たに創造されるという行為を繰り返していた。

超威力によって大質量が破壊された衝撃波が、USJ全体に散っているのだ。

「……なるほど、こんなところに居たんですか六号」

「え?」

「火野さん、帰りますよ。オールナイトではないですが、ヤバいのができました。起きてください」

「う、ちよ、まつ、て……かた、かし」

「はいはい」

「かい、じょう」

火野に肩を貸して来たときと同じように鬼門を出現させる。

最後にチラツと広場と、自分たちに傷を負わせた上鳴を見た。

「今回は、退散させてもらいますね。アレに気付かれると面倒なので」
そう言つてマスクで見えないが、恐らくにこやかに男性は去つて行つた。

「なんだつたの……」

「分かりませんわ……あ、上鳴さん！」

「そーだ上鳴！」

二人は大急ぎで上鳴の元へと駆けていった。

？

広場に比較的近い場所に居た出久達は、その光景を遠目に見て愕然としていた。

「あれ、六道ちゃんよね？」

「す、すっげえー」

「……………」

出久の作戦はこうだった。すぐそこにある大きなウオーターライダー。

出久が峰田を抱え、出久の腕に舌を巻きつけた蛙吹を投げ、その蛙吹が空中で更に出久を引っ張り投げる。そうやって空中移動し、なんとか地上戦へと持ち込もうというプラン。

「ごめん、二人とも」

「なにかしら？」

「どうした？」

ウオーターライダーに敵を引き込み、峰田の個性で罾を張って籠

城しながら狭いスペースで敵を打倒していくという堅実な作戦。

これが一番傷を負わないで互いをカバーし合えるような作戦だと、理性的な出久が訴える。

だが、それ以上に出久の中で焦燥感が沸き起こっていた。

「プラン変更しよう、一気に此処を片付ける」

「え？」

「は、はあ!？」

もう一つの策、指一本自損するがこの場を最速で片づけられる作戦を伝える。

プールのど真ん中に超パワーを放ち、水を収束させその中に峰田の個性の球体を投げ入れる。自分たちは蛙吹の跳躍と泳ぎで一気に此処を抜ける。

「そんな、緑谷ちゃんばかりが無茶をしなくても」

「ごめん、それでもいかなきゃ」

行かなきゃいけない。だって、きつと――。

「紫ちゃんが、苦しんでる。だから、お願い」

あんなふうに暴れる子じやないのを出久が誰よりも知っている。

あの白くて優しい女の子を放っておくなんて、ヒーロー以前に彼には出来なかった。

「……緑谷、おめえ」

「？」

「はあ……いいいぜ、のったー」

出久か峰田がしくじれば失敗するこの作戦。

その重圧に圧されながらも、峰田は出久の策を受け入れた。

(カツコいいじゃねえか、くそつたれ)

さっきの策よりも危険で必ず怪我を負う恐怖がプラスされ、峰田以上に緊張しているだろうに言い切る緑谷がカツコよくて、そんな彼にあやかろうとガクブルになりながらも峰田は出久の様に、出久に笑いかけた。

この状況で笑いあう男子二人に呆れたような、感心したような気持ちになった蛙吹も頷き、作戦が開始された。

」
遠くから紫の声が聞こえた気がした。

(直ぐ行くよ)

焦燥感に追われながら、出久のスマッシュが炸裂する。

出久達が広場に辿りつくまで、あと1分もない。

髑髏、骸骨、少女

馬鹿力で動く脳無と尾を叩き付け跳ねる紫。

速度は互角、だが攻撃力は脳無が圧倒的だった。

紫含めA組が知らない事実、シヨック吸収により叩き付ける、殴りつけるという行為は無意味。一方的な暴力によって骨の腕は圧砕されていく。

「ツツガア!!!」

何度も何度も壊され気付いたのだろう、骨の腕を拳から手刀に切り替え、先を尖らせる。

肉を抉り、拳を貫き、その腹を突き刺し横に引き千切ることで真つ二つにした。

「」

だが、それも無意味。もう一つの個性、超速再生によって脳無は上半身から回復した。

抉った程度の傷など隙にすらならない。急所である脳味噌を狙うが流石にそれは避けるか逸らされる。

あまり頭に集中してしまえば、無防備な右半身を狙われてしまう

結果、超速再生の脳無と超速創造の紫の肉弾戦は必然的に泥沼へと陥った。

紫に理性が残っていれば、あるいは何かが違うたかもしれないが、今の彼女に自意識はなかった。

「ろ、六道さん……」

「どうしよ」

「どうしようって、どうにも」

13号先生を介抱しつつも呆然とするA組。

彼らの元にそれぞれのゾーンヴァイランの敵を片付けた者達が集まってくる中、数名違う場所に居る者達が居た。

(速過ぎる)

大急ぎで辿りついた出久は、10%を引き出した動体視力ですら追いつけていないことに驚いていた。

広場はボロボロになっていく中、二人の影だけがギリギリ見える程度。

「お、おい緑谷どうすんだよ?」

「どうって、そんなの……—ツ」

「緑谷ちゃん……!」

今にも走り出していきそうな彼を、蛙吹が腕を掴んで止めた。

「もう少し様子を見ましょう。今飛び込んでもミンチになるだけよ」

「……うん」

?

「は?逃げられた?」

すつとんきような声を上げたのは、此処雄英高校に敵を引き入れてきた青年だった。

黒霧という名の転移ゲートの個性を持ったモヤ人間の報告を受け、苛立ちを隠さずブツブツと文句を溢す。

「ゲームオーバーだ……帰るか」

「脳無はどうします?」

「んー?お前のゲートで上手いこと拉致れよ……ああその前に」

水難ゾーンの端から見ている緑谷たちを見た。

「——平和の象徴の矜持、へし折って帰ろう」

そう言った時には既に蛙吹の顔へと掌を伸ばしていた。

「—!」

高速移動、だがこれは個性ではなく技術だと緑谷は看破した。

何かの格闘技の本で見た歩法と、視線誘導、それに瞬きのタイミング。それらを組み合わせた高速に見える隙の無い移動法。

(マズイ、マズイ!)

この敵は違う、他と違う。個性に構掛けて暴走していたチンピラじゃない。

(今の動きからして逃げるべき方向は——)

考えた時には行動していた。

相手の手が蛙吹に触れる寸前、許容限界^{10%}の力で彼女を抱き寄せる。更に片方の手で峰田の襟首を掴み、全力で後ろに跳んだ。

「へえ」

にたあと気味の悪い笑みを浮かべ感心する青年に、怖気が奔った。跳んだ出久に追いつこうと彼も跳ぶ動作を取る。

(さっきの移動は全力じゃない、としたら)

今の出久は水の重みや抵抗のせいで跳んだとはいっても後ろ向きに人を二人も抱えている。その結果として、大ジャンプしたわけじゃない。しかも、直ぐに落ちる。

そこを狙われれば、容易に餌食になってしまう。

(く、そ——)

相澤先生は広場の戦闘を挟んで向こう側で気絶しているのをさつき見つけた。頭から血を流していた辺り、動くのすら危ういかもかもしれない。

絶体絶命——そう、出久が思ったその時、背後からとても知った声が聞こえた。

「ドけやバツカ野郎オオ!!」

「か、かっちゃん!?!」

恐らくこつちに駆けつけていたところに出久達を見つけたのだろう。

少し離れた場所に爆炎の痕が見えた。

「オオラ死ねエ!!」

「ぐっ」

こちらに跳ぼうとして体勢が不安定だった青年に爆破をぶつけた。

爆破の衝撃を利用して軽業師の様に一回転して後ろに下がって行った。

「ハハ、死ねって、ホントにヒーロー科かよ」

「うぜえ喋るなクソが! 大人しくぶっ殺されとけや!!!」

「……ヒーロー科にも変わったやつってのはいるもんだ、なあ? 黒霧」

「そうですね、死柄木弔^{しがらきとむら}」

死柄木と呼ばれた男の隣に、黒い靄を纏わせた男が現れた。

「チツ、テメエのせいでこっちの計画が総崩れだクソバカが！」

「それ僕等の事？」

「他に誰が居んだよ、こんなところでボサツとしてんなバカ共が！」

全く持つてその通りだと何も言えなくなってしまう出久。

だが、彼が来てくれたおかげでこっちの思惑が上手くいきそうだ。

「かっちゃん、他に人は？」

「ア？・・・切島とかいうクソ髪と紅白頭ならそこらで見かけた。紫と

無色はセンコーとこ行かせた」

「あっち？」

「だったらなんだよ!？」

爆豪が飛んできた背後を指さし、確認を取った出久。

「かっちゃん、詳細は話す時間が無いから手短に言うね」

「おい俺は」

「お願い、上手くいけば状況が変わる」

「……チツ、アッアア!!クツソがア!!」

こっちの計画ぶっ壊しにしたんだ、碌でもなかったらテメエから

ぶっ殺す!!」

「よし、じゃあ……」

手短にやる事だけを話す。

その結果どうなるだとか、その辺は省く。頭が良い彼らなら察しが

付くだろうという考えでもある。

「おいおい、なに企んで——」

「お願い!!」

死柄木の声を見殺して爆豪に合図する。

この襲撃でとつくに溜まった籠手、特大の爆撃を前方二人に放つ

た。

「な、んだあ!？」

「死柄木弔——」

黒霧と呼ばれた敵が死柄木を庇うように覆った。

出久にとっては好都合だった。

」
ぶんと黒煙に紛れ蛙吹が動く。

「あ？」

黒煙が晴れた頃には出久と峰田が消えていた。

「クソ髪！紅白野郎!!」

「へいへい！」

「……」

考えさせる時間は与えない、と近くに来ていた二人を爆豪が呼び寄せる。

氷で囲い、切島が死柄杓を、爆豪が黒霧を抑えようと動く。

だがそれらを避けられ、改めて距離を取られた。

「たく、めんどくさい連中だ」

「流石雄英、金の卵だらけですね」

「……で、緑色とチビは何処に……？」

視線をうろつかせたとき、彼らの背後から爆音が轟いた。

「さっきのか？」

爆豪の籠手、それを戦場の真上に放り込まれた出久が、真下に向けて解放したのだ。

（反動キッツいなこれ!? かつちゃん、こんなの撃つてたのか……!）

思っていた以上の反動に驚きながらも、黒煙が上がる上空の中、爆発を警戒した脳無と驚いた紫、動きが止まった二人の姿が見えた。

「峰田君、お願い!!」

「うおおあああああ!!」

背中にしがみついていた峰田が、雄叫びをあげながら頭に生えている球体の個性を腕いで投げつける。

球体のいくつかは脳無に当たり、さらに周りに散らばる。

足元にくっついたり、腕に付いたのをとろうともう片方の手で触つてくっ付いてしまっていた。

「紫ちゃん!!」

「ガ・ガ」

大急ぎで着地した出久が紫の目の前へと走る。

峰田は未だ恐ろしいのだろう、動きが止まった脳無にどんどん球体を投げつけ続けていた。

「ガー！」

ドンツと黒煙で目測を誤ったのか、出久の真横に手刀が刺しこまれた。

正気じゃないことを悟った出久だったが、それでも目の前の紫へと歩を進める。

「紫ちゃん……この戦い方はダメだよ、殺しちゃう」

紫から尖った骨が複数創製され、出久へ向けて射出された。

「っ……紫、ちゃん」

一本だけ、脇腹を大きく裂いたが他は外れた……外した。

「起きて」

骨が刺さるのも構わず、紫へとたどり着いた彼は彼女に跳びつき、強く抱きしめた。

？

——寒い、痛い、苦しい——。

意識を失っても尚、紫はがしや髑髏に囚われていた。

内側から肌を突き破った骨が邪魔で体が動かなかった。

骨から創造が派生し、紫を囲っていく。

気付けば、がしや髑髏の中に紫は取り込まれていた。

（ああ、そっか……）

否、違う。

（わたし、なんだ、コレ）

腕を動かそうとして、巨大な骨の腕が動いた。

視線をずらそうとして、巨大な骨の顔が動いた。

脚を動かそうとして、巨大な骨の脚が動いた。

真っ黒に変色した生身の体は、ピクリとも動かない。

「いぬ、んね」

唯一動いた口が、ぽつりと謝罪の言葉を溢した。

彼が立派なヒーローになるのを見守ると、一緒にヒーローになると約束した。

でもどうやら自分はヒーローなんて呼ばれるほど綺麗な存在じゃなかった。

—分かってたはずだろう？

がしや髑髏なのか、自分の声なのかすらも分からない声が響く。

—お前は怪物だ、そう教わったはずだ。

(誰から?)

親からこの力について聞かされたが、詳しいことは知らない。少なくとも、がしや髑髏に意思があったなんて知らなかった。

—我々が、教えたはずだ。生まれたその時から、ずっと、ずっと。ずっと？

思い出すのは呪いを吐き続けるがしや髑髏の姿……。

(……あれ、違うのかな)

なぜか今は鮮明に夢を思い出せた。

呪いの言葉を呟いていたのはがしや髑髏ではなかった。

がしや髑髏と自分の周辺に散らばっていた、亡骸達。

ぱつと暗い視界が開ける。

そこに居たのは、がしや髑髏を困う骸骨の群れ。

大きな髑髏を囲んで汚い言葉を投げつけ続ける亡者たちだった。

—お前は怪物だ！

—お前は裏切り者だ!!

——お前達は、只の殺戮者だ!!!!!!

叫びが刺さる、嘆きが蝕む、慟哭が身を裂いた。

それでもがしや髑髏は破壊を止めない、殺戮を止めない。

愛憎の妖と名乗ったがしや髑髏は骸骨を踏みつけながら邁進し続ける。

(あなたは、なんで……?)

がしや髑髏は小さな少女に答えた。

『愛故に、憎いが故に——』

何処までも進むのだと、答えになつていない答えが返ってきた。ただ分かったことが一つだけ。

——お前もこうなるのだと、髑髏も骸骨も告げていた。

そんなの嫌だ、そう思うも身動きできない。

彼女は涙を溢し続ける。唯一の自由である涙と嗚咽を落とし続け、そして——

——唐突に暗闇が弾けた。

「—紫ちゃん—」

大好きな人の声が、最後に聞こえた気がした。

？

パキパキパキ、罅割れる音がする。

ガラスが割れるように、高い音を立てて骨が崩れていった。

「おはよう、紫ちゃん」

「……おはよ、出久くん」

「こんな時に寝るなんて、ダメじゃないか」

「あはは、うん……うん」

ギョツと互いの存在を確かめ合うと、出久の怪我に気付いてバツと体を離れた。

「け、怪我！治療しないと！」

「わー、待って待って!!お願いだから待って!!」

「ダメだよちゃんと治さなきゃ!!」

「イイから、後で治すからあ！せめてこれ着て!!」

「え?…わ!?!」

左半身から骨を出していた彼女。

骨は創造して身体から突き出していくため、彼女の衣服は左半分の

みほぼ裸と化していた。穴だらけでギリギリ着れている状態だ。

そんな彼女に自分の上着を被せ、座らせる。

「おいおいおい、マジかよ。脳無がふざけた球で戦闘不能？は？」

「あの球体、関節に嵌まっているせいですね」

「どうにかしろ黒霧」

「はい」

「させつかよ！」

「死ねクソどもが!!」

「…」

死柄木と黒霧に爆炎、硬手、氷結が襲う。

だがそれらを転移によって躲し、同時に脳無についていた球のみを転移で剥がす。

多少肌と一緒に剥がれても超再生がある脳無ならば問題ない。

脳無が解放され、改めて脅威が蘇る。

「さって、これ以上はホントに拙いな…でも一人位殺しておきたいなあ…：：：そうだ、拉致るか。後でゆっくり殺そうしよう、よつし黒霧——」

黒霧に誰を攫うか伝えようとしたその時、USJのゲートが勢いよく吹き飛んだ。

「もう大丈夫、私が——来た」

混沌の場に英雄が、現れた。

オールマイト

憧れの背中

オールマイトが一日の限界時間を使い切っていることを、出久は知っていた。

オールマイトの事なら調べられるだけ調べるのが日常と化している出久は、彼が朝のニュースで話題になるくらい活躍して学校に出勤してきたのを知っている。

13号先生が立てた三本指の意味も、不合理の極みだと溢した相澤先生の愚痴も重々わかっていた。

(オールマイト、笑ってない……)

だから、彼が既にピンチなのだと、オールマイトの事情を聞かされている出久だからこそ気付けた僅かながらも確かな差異。

限界許容度の出久でもギリギリ影が見える程度の動き、およそさっきの脳無と紫の戦闘の速度と同じか少し速いくらいの速度で動き、未だ残っていた敵達を一掃、全員すれ違いざまに顎や腹を打ち抜かれ、気絶した。

「緑谷少年、六道少女、出来れば入り口に向かって欲しいが、難しい様ならそこでジツとして居なさい」

「は、はい……あ、いやでもオールマイト時間が——」

「大丈夫！プロの本気をそこで見ているといい！」

脳無と出久達の間割り込んだオールマイトは、後ろ手のまま親指を立ててグッドサインを向け安心感をもたらせようとしてくれた。

紫は出久がなぜそんなに焦るのか理解できておらず、出久に抱かれただまま二人行動を合わせてジリジリと距離を離そうとする。

(……無理だ)

紫は冷静にオールマイトでは脳無を倒すことなど出来ない、相性から導き出す。

さつきまでの暴走中の記憶は意外にも覚えていた。寧ろハッキリしすぎている。骨の腕で脳無を殴った感触も、肉を突き刺し抉り、裂く感覚もしつかりしていた。

そこから脳無には打撃は無効、斬撃刺突は有効、しかし超再生に

よってたちまち元の状態に戻ってしまうというのを誰より理解していた。

「……出久くん、静かに聴いて」
「？」

抱かれたまま出久の耳元で囁く。

出久は疑問符を浮かべながらもジツとそのまま彼女の言葉を待つ。

「まず、今のままじゃオールマイトは勝てないと思う」

「…」

小さくうなづくことで同意する。紫と違い、時間が無いことを知っている彼はしぶとい脳無を倒せる確率はかなり低いと思っていた。

「でも、資格のない私たちが参戦するわけには、いかないの」

「資格…」

ヒーローになるには資格、免許が要る。

ヒーローの卵と言っても今回彼らは被害者であり、資格も持たない一般人なのだ。

自衛は認められるだろうが、プロヒーローがいるのに参戦するのは問題になりかねない。

特に、彼オールマイトはプロ中のプロ、頂点ともいえる存在だ。

「だから、後で一緒に怒られよう？」

「え…」

ぽかんと彼女を見てしまう。

可能性は低いけどオールマイトなら倒せてしまえてしまうと思えるほどの信頼と、今までの功績がある。

でも、それでも――。

「助けないんだよね？」

止まらないのがヒーローで、止まれないのが緑谷出久という少年だ。

「CAROLINA SAMSH!!!」

目の前で始まった超速戦闘。

やはり追いつけない。緑谷出久の力ではこの戦闘に介入するには不可能だった。

「私をおぶって」

「え」

「はやく」

抱きかかえていた紫を背中に移動する。首元に腕を回し、腰辺りに脚を使って背中に負ぶさるというよりも、背中に抱き着く感じになる。

八百万程自己主張しているわけじゃないが、高1にしてはそこそこあるその柔らかさに頬を赤らめてしまうのは仕方ない。状況が状況だから表に出さないだけで、抱きかかえている時点でかなり緊張していたのは言うまでもない。

「で、どうするの？このまま戦闘は流石に」

「……出久くんは、痛い我慢できる？」

「つていうと？」

「これからやるのはね——」

彼女はこれから行うことを簡単に説明した。

やろうとしていることに思わず怖気が奔る。どんな痛みになるなんて想像もできない。

思わず口を閉じてしまう。激痛に飛び込むというのは、覚悟がいるのだ。

「—あ」

目の前で脳無を殴っていたオールマイルトが、脳無に対しバックドロップを行った。

衝撃が爆弾が大爆発したような大きなものとしてUSJに響き渡る。

だがダメだ、脳無はすぐに再生し、埋まった上半身を筋力に物言わせ無理やり抜け出す。

死柄木と言われた青年も、黒霧という敵も、爆豪、轟、サイラン切島の三人が対面して無暗に動けないように、オールマイルトに誰かが協力するのは立場的に不可能。

「ぬう、ダメか！」

「言つたら、シヨック吸収に超速再生。諦めて死ね」

「テメエが死んでろ!!」

「爆豪少年、轟少年に切島少年も！此処は私に任せて、出口へ急ぐんだ」

ついに対面していた五人が衝突しかけた時、オールマイトがそれを止めた。

立場もあるのだろうが、彼なりの思いやりと、なにより信念が行ったことだ。

——平和の象徴

世界規模の信念。

もはや狂つてると言われてもおかしくないそれは、どれだけ重いのだろうか。背負い続けるのは、一体どれだけの困難があるのだろうか。

少なくともその信念は、この場に居た敵もヒーローの卵も関わらず、全員が思わず立ち止まってしまふ程だった。

一際大きな衝撃波が響き渡る。対面していた5人が思わず下がってしまふ程の衝撃と、何より気迫。

脳無との殴り合いがさつきよりも激化したのだと全員が理解する。

(100%、一発一発が全部必殺の……)

オールマイトですら、きつと100%を扱うのは難しいのだ。

普段は95か90か、もしかしたら80に抑えているのかもしれない。

(今の、オールマイト……)

今の彼はどんどん力が衰えている。気迫は変わっていないのにも拘らず、彼の力も時間ももう残り少ないのだ。

殴り合ってる中で血反吐を口から溢しながら戦うその背中は大きくて、昔観た映像よりも鮮明で……同時に何よりも痛々しかった。

「お願い、紫ちゃん!!」

「うん、袖噛んでてね」

痛みで舌を噛み切らないために袖を噛む。

始めはチクリとした、針が刺すような痛みだった。

「~~~~~!!!」

そこから派生するように体の中身が痛みを発する。

紫の個性は、骨の創造と操作。背中にくつついた彼女から生えた小さな骨達が大量に出久に突き刺さり、中へと至る。

筋組織に、細胞の一片一片に絡みつく。更に外骨格としても鎧のように骨が展開される。

骨の鎧が組み上がっていく、どんどんと出久が変化していく。

—私が今からするのは、貴方の一時的な改造……凄く、痛いと思う。紫が行うのは出久が100%で戦えるようにすること。

力に耐え切れず内側から爆発するなら、内側を強化すればいい。

細かい骨……妖の力が出久に馴染んでいく。

出久を殺さない様に全神経を扱っている紫は意識の全てをコントロールに裂いていた。

彼女は喋れなく無防備故に、同時に出久を守るためにも背後を骨で覆いきってしまう。骨とはいえ多少重いかもしいないが、これなら一発くらいは耐えられるはずだ。

「ありがとう」

——ワン・フォー・オール、フルパワー%

自分の力には必要ないのかもしれない。

助けた相手は憧れの存在で、要らぬ世話なのかもしれない。

でも、それでも彼がピンチなのだとは自分は知っている。既に無茶も無理も通り越えているのをこの場にいる誰よりも知っているのだ。

(きつと、命を削ってるんだ、文字通り)

オールマイトの行為は、自分の行為はきつとそう言う事。

ヒーローって、憧れて思っていた以上に血みどろで、どうしようもなくどうしようもない。

傍から見ると何考えてるんだって、どうしてそうなんだって、言われるだろう。狂ってるって、オカシイって。

(でも憧れてしまった……カッコいいって、この人みたいになりた
いって)

今は未だ、幼馴染の力を借りて、文字通り足りない事だらけ。

100%を解放した時点で既に内側が軋んでいる。心臓は張り裂けそうで、神経は昂つていても尚痛みを感じる。

この状態も長くは続かないだろう。砕け散る前に骨を回収し、身体から細かい粉として外に排出しているとはいえ、このままでは何時か死んでしまう。

(動けば1分か、下手をすれば秒単位しか保たない)

でも、それでも。

(未だ教わりたいたいことがあるんだ、まだ死んで欲しくないんだ……命を削らないで欲しいし僕がヒーローになるその時を、見て欲しい――)

そんな理由が浮かんでは消えた。

だって全部後付けだから。

動くのも動けるのも短い。なにより、この戦闘に割り入るのは至難だ。

隙を見つけなければいけない。

殴り合いに突っ込むのは不可能だ。

幸い脳無とオールマイトは互いしかみていない。他の者も戦いに目を奪われている。

少し離れた場所に居る出久に気付くものは、いない。

「ヒーローとは、常にピンチをぶち壊していくもの!!」

ああ、知っている。

オールマイトの言葉をよく知っている。ピンチを壊し、ピンチから救うのがヒーローだ。

「^{ウイラン}敵よ、こんな言葉を知ってるか!!? ^更Plus ^向Ultra!!」

ショック吸収にも限界がある。それを超え、限界を超えた一撃を叩きこんだ。

吹き飛んでいくが、黒霧の能力が発動していた。飛んでいく先に霧のワープゲートが出現した。

「こ、こだああああああ!!!」

ゲートと脳無の間に割り込む。

(折れていない、壊れていない。痛むけれどまだ大丈夫!!!)

雄叫びをあげながら全力の踵落としを炸裂。

オールマイトのお蔭でシヨック吸収の限界が来ているため、そのまま地面へ落ちて亀裂の中に埋まる。

「うあああああああ!!!」

落下速度もプラスした拳が脳無に埋まり、亀裂が大きな陥没へと変化する。

貫かれた脳無の腹から血が溢れ、出久の腕を濡らす。

「紫ちゃん、お願い!!」

言葉を返すことはできない。でも、声は届いていた。

出久の合図に合わせて脳無の腕と脚の中に骨が創造される。内側から拘束するという荒業。人間相手なら確実に殺してしまうが、超速再生持ちの脳無なら足りないくらいだ。

事実、内側に生えた骨を砕いて無理やり動こうとしていた。砕けた骨は再生によって外側へと押し出されてしまっている。

「無駄、だ!」

もう一撃、残った腕を埋め込んだ。

シヨック吸収が回復しても大丈夫なように手刀にしたため、さつき以上に肉を裂く感触を受け、思わず顔を歪ませる。

だが、拘束力はこれで倍増。出久の腕を伝って内側を、鎧から更に創造し外側まで骨で絡めとる。

「はあ、ハア……」

跳ぶときに両足を、踵落としで右足を、今ので両腕を酷使したにも関わらず壊れてはいない。

だが痛みはある。その上、これを解除するのにも激痛が奔るだろう。

(考えない様にしよう……)

意識を逸らし、脳無の拘束に集中する。

「うっそ、だろおい」

「これは……」

死柄木は脳無の戦闘不能が信じられないようで、黒霧は密着具合から切り離すのは難しいことを察する。

少なくとも目の前のヒーローと卵たちがいる現状では不可能だと。

「ゲームオーバーだ……今度は殺すぞ、平和の象徴」

そう言葉を残し、黒霧によってその姿を消した。

その直後、飯田によって連れてこられた学校のヒーローたちによって怪我の治療等を行われた。

「さって、緑谷出久くん、六道紫さん。分かっているとは思うけども……」

「は、はい」

「後で説教するから、職員室に来るように」

「はいいい……」

そして激痛に次ぐ激痛の強化と解除を終えた出久達は、放課後の職員室で正座され暫く怒られるのだった。

もともと、その後保健室から出てきたオールマイトに褒められ出久は舞い上がり、紫はそんな出久を見てやれやれと肩をすくめた。

尚、一番効いたのは校長の説教とリカバリーガールの小言だったもよう。

バカにバカが移って大変だとこれからを思った二人が心からの溜息をついた。

始めましてな再会

体育祭が始まる。

雄英体育祭と呼ばれるこのイベントは、かつて個性者がいなかった時代に行われていたオリンピックピックに代わるものであり、全国のヒーローたちもスカウト目的で観戦に来るのだ。

そのままプロの事務所に卒業後雇われるのが定石なのだ。

詰まる所、大チャンス。

(なんだけど……)

珍しく出久は放課後一人でいた。

考え事がしたい時は紫の方をチラツツと見て少し手を振ることで一緒に居る時間を断っている。

こうして一人になる時間が欲しかったというのもあるが、今は彼の隠し事にも関わっている上に紫絡みの悩みであり、誰に相談するわけにもいかなかった。

「……巨悪、か」

USJでの戦闘後、オールマイト、そして仲の良い警部である塚内直正つかうち なおまさと話した内容だった。

「今回の戦いで、あるゾーンにいた生徒三人が全く別の勢力に誘拐目的で襲われたらしい」

「別の勢力?」

「ああ。狙われたのは上鳴電気くん、八百万百さん、耳郎響香さん。対する相手は……たった二人だったそうさ。それも三人がワープされる前に他の敵を軒並み倒していたらしい」

「ワープ前に、瞬殺してたってことか」

塚内の言葉にオールマイトが考え込みだす。

さらに続いた言葉に、頭を抱えた。

「二人は赤髪の少女、名前は火野彌生と言ったそうさ。頭から角を生やしていたそうで、さらにワープ系個性持ちの怪力持ち、二つの個性持ちだと思われる。もう一人は大きなマスクをした白髪の青年で名前は空佑。個性は不明。壁に張り付いたり浮いていたり、引力や斥力

的な何かかと想像されている。……オールマイト、この二人は自分たちを二号、三号と言っていたそうだ。そして、「サラ様」と言っていたらしい」

「Oh…そいつはまた」

「えっと、どうしたんですか?」

オールマイトは少し考えた後、語りだした。

「私がこの傷を負う前に潰し損ねた組織『賽』の女性研究員であり、黒幕だと考えられていた人物の名前なのだよ。サラ・ヴェーレン……賽がもう回復したのか」

「ああ、全く厄介なことだらけだよ。緑谷出久くん、今回この話に君を呼んだのは理由がある」

「り、ゆう?」

「ああ。彼らは逃走する際、暴走していた六道紫さんを見てこう言ったらしい。『こんなところに居たんですか、六号』と」

「ろくごう?」

「そう。ろくごうではなく、ろくごう。六号だよ」

「え、ちよつと待ってください」

出久は一度頭をフル回転させる。

まず、USJを襲った敵達とは別に賽と呼ばれる組織が乱入してきていた。彼らはどさくさに紛れて三人を誘拐しようとしたらしい。

その組織は過去オールマイトが潰し損ねたほどに強力強大な組織だった。

主犯はサラ・ヴェーレンという女研究員らしい。

彼らは自分たちを番号で呼び、紫の事も番号で呼んだ。

「紫ちゃんを、どうしろって言うんです?」

彼女が何かしらの関わりがあるのは確かで、もしかしたら何かを知っているかもしれない。……もし自分を使って情報収集やなにか彼女に不都合なことを頼まれるのでは、と出久は危惧した。

「ああ済まない。そう警戒しないでくれ。こちらとしても彼女が何か知っているとは思えないんだ」

「え…?」

「彼らは暴走していた六道さんを見て、逃げた。能力を知っている風ではあったが彼女のことを何も言っている様子はなかった。他にも過去の賽との戦いで得た資料によると、そもそも六号という名前は出てこないんだ。一号から五号と書かれた資料は少しではあるが見つかったが、六号という資料は見つからなかった。：つまり、六道さんは彼女と能力的関わりがあるが、実質的関わりは恐らくない。それも、襲撃される前の賽には全く関係が無いと思われる」

「えっと、じゃあつまり…？」

「つまり、だ…：サラ・ヴェーレンが六道さんの存在を知って何をするかわからない。ただ、そもそもUSJに人を寄越したのだって誘拐目的だったんだ」

そこまで言われて、出久はピンときた。

「何時も一緒に居る僕に、紫ちゃんを保護してほしい…？」

「正確には余り疑われない様に気にかけて欲しい。出来るだけ一緒に帰ってほしい。それと、怪しい人物にあつたらこれを押すんだ」

渡されたのはストラップだった。よくテレビで見るオールマイトの顔をデフォルメして愛らしく（それでもやっぱり画風おかしいけど）したものだ。直

「その裏には小さなボタンがある。それを押すと、警察、というか私に直接現在地の情報が入るようになってる」

「……」

「いいか、緑谷少年。敵は巨悪だ。私にこの傷を負わせた者と並び立つほどだと私は認識している」

「オールマイトを、引退に追い込んだ敵…」

「そうだ。いいかい、決して戦おうとするんじゃないぞ」

そう言ったオールマイトの強い眼が頭から離れなかった。

怖い、オールマイトを追い詰めた敵と同等だと言いつけるほどの相手。畏れないわけがない。

（…休み時間、終わっちゃおう）

午前最後の授業へと向かいながら、怖い気持ちを潰すように拳をぎゅゅと握りしめる。

「誰だって関係あるもんか……」

紫は出久にとって始まりと言っていていい存在だ。

自分を初めて認めてくれた、初めから応援してくれた、オールマイトとはまた違うオリジン。

(絶対、紫ちゃんを好きにさせない……！)

決意を固め、出久は今日もヒーローになるための勉強に励む。

「取りあえず、今は個性になれることと自分の強化訓練、あと格闘訓練も」ブツブツブツ

集中しだす出久を色んな意味で興味深い視線が貫いていたが、その全てを無視して歩を早める。

「よし、取りあえず常時10%で居るようにしよう……!!」

ちなみに、個性の無断使用は見つかれば注意を受けることを蛇足しておこう。

彼が特訓に夢中になりすぎて一時相澤にストップを掛けられるまで、数時間の事であった。

？

体育祭の発表があつてから次の休みの日。あと一週間足らずというところで、一人の少年が気晴らしに街へと繰り出していた。

「ん、ずっと鍛錬とか死ねるっつーの」

黄色の髪に黒の稲妻模様がある特殊な髪色をした上鳴電気である。

彼はUSJの事件の記憶がすっぽ抜けていた。

大技を使つたらしく、そうした後は必ず記憶が数秒から数分落ちるため、全て後々に聴かされたのだが、如何せん彼はおバカだった。

「赤髪に角生えた美人さんに白髪のマスクだっけ？……いや、そんなんわかんねーっつーの」

個性が溢れる社会の中、その程度では特定不可能だと彼は断じた。

一応彼はまた狙われるかもしれないからと注意されていたのだが、戦闘の実感は身体が憶えていても、脳味噌から抜け落ちているためこうして呑気に街へ繰り出すような真似が出来るのだ。

「つつてもここらのゲーセンは一通り……ん？」

何時も巡っているゲーセン通りをふらついていると、人集りを発見した。

どうやら強引なナンパらしく、嫌がっている女性の手を掴んで無理やり何処かへ連れていこうとしていた。

(あー、しゃーねえなあ)

すたすたと早足で歩いて行き、強情な女性に腹が立ったのか殴りかかろうとした男の腕を即座に掴んだ。

その速度は正に瞬足。男が振りかぶった時には上鳴の手は腕へと伸ばされていた。

「はいはいストロップ」

「な、なんだあ!？」

男からすると訳が分からないだろう。行き成り現れた少年が自分の腕を掴んでいるのだから。

あれから上鳴も成長していた。部分的な電流の加速、それに伴うリスクの低減、そうして辿りついたのが、部分加速アクセラレーションと名付けた電流活用
法だ。

今やったのは、両足と片腕の加速。正確には、両足の加速をした後に片腕の加速をした。同時に行うよりもなるべく分けたほうがアホになりにくいという結果を得ている。

「こんな往来で美人を囲んで暴行沙汰はねーでしょ」

「この餓鬼、おまえ、雄英生か!？」

「へ?…あ」

最近何も考えることなく、電流を流すことで条件反射であらゆる物を済ませられるようになった彼は、何時も通り学校の制服を着て闊歩していた。

不良たちは逃げ去っていくが、これはマズイ。学校に知られると面倒なことになってしまう。

「…ねえ」

「え?」

「ありがと。ちよつと付き合つてよ」

「え？マジ？あ、いやでも俺」

「いいから、ほら」

そうして上鳴は赤髪美人に手を引かれ、近くのカフェへと連れ込まれてしまった。

？

その日、火野彌生が居たのはただの偶然だった。

あつさり負けた火野は飼い主であるサラにすっかり絞られ、ボロボロの体を無理やり治して半ば自棄クソで繰り出した休日の街だったのだ。

(はあ…最悪)

多少は気晴らしになると思っていたのに、なぜ自分は程度の低い連中に囲まれているのだろうと溜息を吐く。

真昼間からバカをやっている連中をあほらしくも羨ましくも思いながら適当にあしらっていると、急に腕を引っ張られた。

今の彼女は力を解放していない。そのため、角は無く同時に怪力も発揮できない状態だった。

(拙いなあ、暴れて警察に厄介になったら今度は何されるか…)

金髪マッドを思い出し、それでもこいつ等に連れ込まれるのは…と考えていると、不良を誰かが止めた。

休みにも拘らず制服を着た少年は、一瞬で現れ殴ろうとしていた男の腕を止めていた。

(こいつ…！)

よりによって一番会ってはいけないのと出会ってしまった。

上鳴電気。自分が誘拐しようとし、失敗したターゲット。敗北を思い出し冷や汗をかく。

(……ん？)

だが様子がおかしい。上鳴は火野を見ても何も言わない。寧ろ今制服に気付いたのか滝汗の様な冷や汗をかいている。

(え、ちよ、マジ？)

一つ可能性が浮かんだ。

とても都合が良くて、とてもとてももあり得ないようでこれしか考えられないこと。

(憶えて、ない?)

でもそうとしか考えられなかった。

つい最近襲ってきた相手を忘れるなんてありえないだろう、警戒の一つも無いとかどれだけバカなんだと思いつながら、ピーンと一つ思いついた。

(元はと言えば此奴が捕まらなかったのが悪いんだ)

だから痛くて辛い目にあつた。それで良かったと思いつながらも捕まえればよかったと後悔したし、次は一人は連れてくるようにと教え込まれた。

だから――。

「ちよつと付き合つてよ」

火野は上鳴で憂さ晴らしをすることにした。

?

YOU LOSE

「つ、つええ」

上鳴は対戦格闘ゲームでボツコボコにされていた。

彼は此処の常連であり、今日の前に浮かんでいる文字は見る側ではなく見せる側だった上鳴は彼女、ヒヨと名乗った美人さんに見せられていた。

「よつわいなあー、ほれほれさつき不良相手にやつたみたいに瞬殺してみなよー」

「瞬殺で。俺は止めただけだつーの」

「逃げたのはあつちなんだからアンタの勝ちでしょー。あ、次アレやろアレー!」

「ちよ、マジ待つて俺この格好のままいるのは」

「イイつて、ダイジヨウブダイジヨウブ」

「すつげえカタコトじゃね!?!」

「あーもう男が細かいこと気にしないの！シヤキツと歩く！」

「いった、分かったから叩くなよ!？」

上鳴は女好きでナンパをしたことがあるがどれも玉砕ばかりだった。

可愛かったり美人さんとのデートは望むところなのだが、こんな負けまくりで、尻叩かれリードされっぱなしの格好つかないデートは望んでいなかった。

(散々・・・でもねえか)

この美人さん、凄く楽しそうにしている。負けても仕方ないあなたに思わず言ってしまうそうになるくらい綺麗で、見惚れた回数ももう覚えていない。

「つてヤバくね俺?」

「んー、どしたのー、次行くよ?」

「お、おう!」

そうやって暫く負けまくりのゲーセンを楽しんだ最後、上鳴は最後にプリクラを撮らないかと提案した。

対戦ゲーや協力ゲーばかりで、何か形の残るものが欲しかったのだ。

「んー、プリクラはちよつとNG!」

「まじかー。どうしても?」

「どーしても! っていうか対戦もスコアも私に勝ててないのに、要求なんて生意気♪」

ピンツと凸ピンを受ける。

摩りながら真面目に残念がっていると、ヒヨがそういえばと話を変えた。

「雄英生ってことは次体育祭あるんだよね」

「おう! まあ俺の大活躍だろうけどな!」

「んー、上鳴バカっぽいからすぐ負けそう」

「な!? そんなことねえって!」

「私にボロ負けしてるのに?」

ニシシと悪戯っ子の様に笑うヒヨ。

悔しいが事実なので何も言い返せない上鳴。そこで、思いついたように人差し指を立てた。

「おっし、そんなに言うなら一つ賭けようぜ」

「賭け？」

「そう。俺は絶対大活躍する！」

「ああそういう。で、賭けてことは私が勝った場合どうするの？」

「もう勝った気かよ!？」

「賭けは対価がないとねー盛り上がらないでしょ？」

「…じゃあ今度会ったときに一つ言うこと聴いてやるよー」

「こんな悪女に言い切っちゃったねえ」

「なんでもいいさ！そんなかわり——」

あーららとあっけらかんな彼女に指さした。

「俺が勝ったら、連絡先教えてくれ」

「……」

「次会ったときにでいいから、連絡先、教えてくれ」

「……え、えつと？」

言い切る彼にどうしよっかなあと悩むヒヨこと火野彌生。

こんなフリーで会うことはもう無いだろう。きつとこの賭けが成立することは——。

(いや、待った。何で私は賭けを気にしてるわけ？バカなの?)

断る一択だろう。何を考えているんだろうか自分は。

(……なんでもいいか)

断ろうと思考を放棄しかけたその時、上鳴が再度強く言った。

「ヒヨんために絶対活躍すつから、俺」

「――」

放棄どころか思考が停止した。

この少年何を言っているのか自覚あるのか？いやきつとない。此処数時間でよく分かった、この少年はアホだ。バカは死ねば治るがアホは治らない。致命的だ。

「あーもう、速く決めろよ！賭けるか、賭けねえか！」

「……アハハ、あーもう」

何やってるんだろ？なあと自嘲して、あの高校のレベルの高さを改めて頭の中で計算していた。

本気で賭けようとしている自分を嗤いながら、火野彌生は上鳴電気に小指を立てた。

「イイよ、賭けよ」

「おっしや！観てろよー！」

こうして悪に飼われた少女と正義を志す少年が一つ、賭けをした。約束

次の日からハチャメチャに頑張りまくってアホになるアホの姿が放課後の校舎で目撃されるのは蛇足である。

雄英祭前

クラスが各々頑張っている仲、六道紫は悩んでいた。

USJに現れた敵^{サイラン}達に向かつて行ったあの憎悪、敵意、殺意。

自分なのに自分じゃない場所から湧き起こったそれについて、彼女なりに色々考察をしていた。

勿論わかるわけもなく、結局夢に出てくる髑髏や骸骨達に立ち会って訊くしかなくなっていた。

「……対話、出来るなんて知らなかったな」

今まで逃げてきたからだだと自嘲した。

あの事件の後、それとなく両親にがしや髑髏について尋ねてみたが、どうやら知らないようだった。

恐らく一族全員が眼を逸らしてきたのだろう。

あんな怪物相手に話が出来るなんて想像するのすら難しい故に仕方ない事だともいえるが、臆病な事に変わりはない。

「……怨念と愛情、愛憎の妖^{あやかし}」

がしや髑髏は自分をそう名乗った。

夢の中で行う質問には、言葉と一緒にイメージまで返ってきたことがある。

戦いや争いが憎くて、でも愛する者のために、愛した者のために戦いと争いを蹂躪してきた存在。

愛情があった。憎しみがあって、悲しみがあった。

あれから幾度となく交わした質疑応答の結果唯一ハッキリしたことがある。

(がしや髑髏は。これは、個性^{個性}じゃない)

異物感もそうだが、返ってきたイメージの中で一つだけ怖気で暫く震えるほどの悪感情を覚えた光景があった。

——骨を体中から突き出した男性。

紫だつて身体から骨を出す、あのイメージで伝わったのは紫が日頃使っていた能力とは違う感触だった。

自分から創造、操作するのではない。

外部から異物を流し込まれ、それが身体中に満ち溢れ、零れた結果突き出していく。

自分というモノを無理やり書き換えられるようなあの感覚は、人間を止めさせられる感覚だと彼女は思った。

彼女はこの力を個性に似た力だと言われ、継がれてきたが、それをハッキリ自覚したのはこれが初めての事だった。

(アレは私で、これは個性じゃなくて……じゃあ、わたしは、わたしは……)

思考が闇に溺れそうになる。

その度に自分の身体を自分で抱きしめて、あの時の感覚を別の暖かな感覚に置き換えようとする。

(いづく、くん……)

骨の化物になりかけていた彼女を文字通り連れ戻した彼の暖かさを想い、彼女は自我を保とうとする。

人知れず、一人の少女が涙を溢した。

？

筆記音が響く部屋。

本来なら勉強のべの字を考えた瞬間にやる気を無くす様な少年、上鳴があり得ないことに机に齧りつく様にしてノートに書き込みをしていた。

「……………」

彼にしてはととても珍しいことに数時間もそうしている。あり得ないことに両親が驚きを通り越して怯えていることも知らずにノートに数式と図面を書いている眺めつこを続けていた。

内容は、電流・電圧に関するまとめ。それに加え、電流の発生による磁界や人体に流れる電気に関して等々。

彼の個性である「帯電」を知り、尚且つ応用できるようにと丸一日使い潰すつもりで行っていた。

前半のまとめは学校でも教わって当たり前前に知っていることであり、自分の力の基礎中の基礎だ。本題は寧ろ後半の「磁界」や「生体電気」の方だ。

「つつても、これは……」

ぶつちやけ高校入学したての子供にはとても難しい内容に加え、前提条件として電流が操作できることが必要となる。

一つ加えるが、上鳴電気は決してバカではない。雄英高校に入学できるだけの実力というのは勿論学力も入るわけで、雄英高校の中では頭が良いとは言えないが、それ以外でならそこそこ良い部類に入る。

そんな彼が電気に関して調べたことが無いわけがない。基本遊び中心な生活だったため触り程度なところが多いが、それでも無知ではなかった。

「無理かあ？」

故に、冷静に自分の能力を察することができる。

彼の個性「帯電」の主な利用法である「放電」だが、これは実際行われる放電とは少し意味合いが違う。

簡単に説明すると、電位差やら電子やらが関係する現象を放電というが、上鳴の個性はどちらかというところ乾電池のそれに近い。

充電した電気を放出するだけ。それを無理やり体の中で加速させたり暴発させたりと無茶苦茶やった結果が、時間が遅くなったように錯覚する超加速現象や、記憶喪失に繋がっているあの電気爆発である。

上鳴は人間であるため、電池と全く同じというわけではないだろうが「帯電」という個性は電池に近い物であり、体内の電流はともかく、磁界等の複雑な指向が必要な外に放出する行為は、何かしらのバックアップが必要ということを再度理解しなおした。

「……サポート科に頼むしかねえけど、大会は道具ダメだしなあ」

ダメといっても、全てというわけではない。

個性使用にどうしても必要な物や、個性を扱った際に起こった現象に対し、安全面からして必要としているような物ならOKが出るらしい。

例えるなら青山のビーム。あれは理屈は知らないが、ベルトによって指向性を持たせているらしい。恐らくベルトが無いと光線が拡散したりするのだろう。拡散したビームの威力がどの程度かはわからないが、安全面から考えてもベルトが無いと危うい。

「うがー、んー……」

上鳴はうなだれた。それはもう机にべつとりと張り付くほどに項垂れた。

帯電の個性は道具があれば有利だが、道具を必ず必要としているわけではない。絶縁体があるうが無くろうが上鳴自身に対する放電の影響は変わらない。

(あとはどうにかアホにならない方法……もしくは回復する方法か)

最大電力を超えると直ぐアホになってしまう。脳の回路がショートしているのだろう。これは電圧を抑えるか、電流を少なくするしかない。

暫くすれば回復するのは人間である上鳴が持っている治癒能力と、後は個性に対する耐性や最大値の向上などによって緩和が可能。

「つてこれも直ぐには無理だよなあ」

個性は使えば使う程高まっていく。使う度にちよつとずつ、アホになるたびに強くなつていくと言えば分かり易いかもしれない。

この治癒能力も、スポーツの様に鍛えては休むを繰り返せば効果が高くなつていくだろう。

(ん？ まてよ、そーいや体内の電流は操作できたよな)

加速だけではあるが、電圧、彼にとつては厚みに近いモノを調整するイメージで行えた。ちなみに電流は水流、蛇口や滝をイメージしている。

(つまり、俺中心に磁界の発生の操作は出来んじゃね?)

彼の想定とは違いかなり小規模になるが、改めてノートに磁界の自力操作を考案しだした。

(磁力はもう力技しかないとして、あとは原子操作か……)

そうして一日使って頭の中で出来る限りのことをノートに書き溜めた彼は、改めて部屋から出た。

「よし、後はもうアレだな……頑張るかあ」

雄英祭まで残り数日。彼は自力の強化の為、大容量のコンデンサを用意した。電力数を調整し、コードを握る。

コンデンサに身体を繋いで無事である辺り、上鳴の耐性の高さ gaussian ならずける。

そのまま電気を作成、蓄電させ自分に流し込み最大電力を維持しつつ最大値を引き上げる特訓だ。

「アバババババババババ!!!」

勿論、最大電力のためすぐにアホになるが、アホになっても大丈夫なようにコンデンサに自身を括り付けて行っている。電気を改めて作成しなければ、自然とコンデンサの最大容量が無くなり終了する。

言うまでもなく危険な行為であり、止められること必須なので人気がない場所で行うのだが問題点が三つ。

一つ、夜はめっちゃくちや目立つ。よって行えるのは朝から夕方まで。

もう一つ、電気を流し込まれながら電気を作ると永久機関化してしまい、コンデンサがいられるか彼自身が危険だと本能的に感じてやめるまで止まらなくなってしまう。

そして最後の一つ……。

「うえ、うえーいい」

終わった後上鳴がアホになるため、一見するとコンデンサに自分を縛りつけた変態^{アホ}というとてもなく残念な光景が見られる可能性が出来上がってしまう。

縛っている故にアホな状態のまま徘徊することはないため、人に見られずにすむことは幸いなものかもしれない。

だが、どっちみちヒーローとしてあまり見られたくはない状態であることを彼は心に思いつつ、日記にすら書かないことを決断した。

?

雄英祭が近づき、前日となったその放課後。

下校しかけた飯田は未だ包帯を巻いたままの相澤に止められた。

「雄英祭だが、お前が宣誓をしろ」

「何故……？」

「毎年の恒例だからだ。入試一位が選手宣誓を行う。本来なら当日その場で指名するのだがな、お前の場合先に言つとかないと長々と語りだしそうだからな」

合理的判断に基づいた行動だ、とこぼす相澤先生に対し、飯田は少し口を噤んだ。

「……先生。入試一位、それは本当に俺ですか？」

「……何が言いたい？」

当たり前だ、事実だと言えたはずなのに相澤は訊き返した。

合理的じゃないが、だが事実として言えば……そんな考えが過つたからだろう。

「俺は入学してから一番になったことがありません。そもそも、あの入試だって緑谷くんの指揮があつたからこそでした……俺は、あの仕組みに気付けなかつた。人助けレスキューというなら、そもそも言い出した彼がポイントが高くなければオカシイと俺は思ってます」

「……」

「他にオカシイと言えば、六道さんです。どの授業でも好成绩どころじゃない。個性も、その運用も、冷静な思考に初めの基礎学で見せたあの爆豪くんに対する接熟い意思し方」

——私は授業より彼らを優先します。

オールマイトにそう言つたと聞いたのは、授業の後でのことだ。授業放棄のつもりで爆豪と出久の決闘を見守る決断をした。

それは、良くも悪くも優等生の飯田には出来ないことで、同時にとても勇気ある行動だと思つた。

「そもそも、彼女は緑谷くんと一緒に試験に臨んだと緑谷くんから聞きました。特待生という肩書を持っていたのなら、試験は必要だったんですか？」

「……」

相澤は目を細めて飯田を観察した。

強い視線、意思ある表情。

(気付いてんのか)

ハアとため息をついて頭を掻いた。

相澤なりの降参のつもりだった。

「…そうだ。今年の受験者^{ナンバーワン}一位はお前じゃない」

「！」

「だが！」

何かを叫びかけた飯田を先に止め、ゆっくり言葉を紡ぐ。

気付いている彼に間違ったことを伝えるのは、ヒーローや教師以前に人として彼自身が容認できなかったためだ。だが、教師として、社会人として相澤は飯田に事実を飲み込ませようとしていた。

「六道でもない。お前、麗日、そして緑谷がそうしたように六道と組んだ奴、そいつが一位だ」

「…つまり、俺は事実三位ってことですか」

飯田にとっては出久が居なければ得られなかった順位だ。

本当は三位以下だと自身を責め、爪が突き立つほどに拳を強く握った。

「あの二人が異常だった。恐らく、あの時点であいつらは仮免を受けさせても良い実力を持っていた」

合格するかは別としてな、と付け加えながら相澤は飯田に一つ選択をゆだねることに決めた。

「で、飯田。お前が何を言おうと、俺含め教師たちは特待生だと言い切った時点でこの決定を揺るがすつもりはない」

「…」

「…まあ、ただ。お前が選手宣誓で何を言うかは自由だ」

「え…？」

「宣誓、考えておけよ」

「……はい！」

頭を下げる飯田にじゃあなと簡単な挨拶をして教室を後にした。

「……不合理だな、教師ってのは」

帰り際に溢したのは、合理的という口癖の彼にとっては、珍しくも

ない愚痴だった。

雄英祭、開催

雄英祭当日、1―Aの面々は控室で各々待機していた。

彼らヒーロー科は公平を期すために自分達が有利になる要素を詰め込まれたコスチュームの着用を許可されていない。そのため、ヒーロー科含めて全員が体育着に着替えていた。

「おっし、今日はお前らの誰より活躍して見せっからなあ！」

「なんだなんだ、やる気だな上鳴」

「おう！今日の俺は一味もふた味も違うぜ！」

自信満々にクラス全員に宣戦布告したのは、何時もやる気に欠けていた上鳴だった。

何やらやる気の源があるらしく、各々がどうしたんだと疑問符を浮かべていると、峰田がふと気づいた。

「！ま、まさかお前…女か!？」

「…なんだっていいだろ」

「おいこつちみろや」

峰田の血走った眼まなこから全力で視線を逸らしつつ、ついでに少し距離も取った。今の峰田は色んな意味で怖すぎた。

「と、ともかく！今回は負けねえ！頂点てっぺん獲ってやるぜ！」

「ケツ、誰がやるかよ。No.1ここは俺がとる、他の誰のモンでもない！俺の場所だ！」

ニヤリといつも以上に悪党顔をした爆豪が上鳴の挑発に乗り、クラス中が俺も私もとやる気を出していく中、轟が出久の前に来た。

「…緑谷」

「え、轟君？なに？」

「お前、オールマイトに目え掛けられてるよな。詮索するつもりはねえが」

「！」

オールマイトは生徒である前に後継である出久に対し、度々呼び出してはワン・フォー・オールについてやこれからについて、色々なことを話し合うことがある。

なるべく放送を使わなかったり、人気のない指導室などで行っているのだが、オールマイイト自体が目立つせいだろう。気づいてる人は、きっと轟だけではない。

「お前には勝つぞ」

「……」

轟はNo. 2であるエンデヴァアの息子だ。彼自身、なにがオールマイイトNo. 1に関する何かがあるのかもしれない。

今轟は出久を見ているが、それ以上に背後の存在……オールマイイトやエンデヴァアを幻視されているように彼には思えた。

「轟君が何を想ってるのか知らないけど……僕だってキミに——皆に、勝つ。本気で、獲りに行く」

「おお」

熱い宣戦布告の中、紫にも彼女の肩を叩く人物が現れていた。

「男子、凄いやる気だね」

「麗日さん」

麗日お茶子。彼女は両親を楽させたくて、ヒーローにいち早くなるんだ、と以前この雄英祭にやる気を出していたのを見かけていた。

「外観た？すっごい数のお客さんだったよ！」

「……例年は三年の先輩のスカウトに集まるけど、今年は私たちが話題になってるから、だとおもう」

「なるほどお」

USJの事件について、事件の詳細を、というより生徒に関して雄英は語っていない。

未成年者だし諸々当たり前なのだが、マスメディアは生徒が事件にどう関わったのか詳しく知りたがっていたし、他の人間もそうだろう。

だからこそ、知れるこの雄英祭に来るのは必然と言えた。

「……USJの時、さ」

「？」

「あたし、跳びこんで行った六道さんみてさ、凄いなあって思ったんだよ」

「アレは、私も色々あって…」

「うん。何時もの六道さんらしくなかったもんね。でもほら、その後緑谷さんと一緒に活躍してたでしょ?」

「それは…まあ」

「あの時、二人ともカツコよくて…：負けてられないなあって。あたし、あんまり動けなかったし」

そんなことはない。麗日は飯田が走り出るためにワイプゲートの黒霧という敵を浮かせたのだと聞いた。麗日の個性は触れなければ発動しない。だから、彼女はあの局面で勇気を振り絞って駆けだしたはずだ。

暴走した紫とは違って、自分の意思で。

「そんなこと」

「なくないの!…そりゃ、みんなあの時それぞれ頑張ってた。でも、うん。だから、私も負けられない。私以上に頑張ってた皆に追いつけないためにも」

「麗日さん…」

「そう言う事なら私も負けないよー!」

「ひゃ!?あ、芦戸さん!」

麗日の言葉に発破を掛けられた芦戸三奈が、紫の背に跳び乗った。

急なことに驚きながらも、他の人の視線まで集まっていることに気付いた紫はてんやわんやしていた。

「戦闘は轟くんのお蔭だったし、あの時あんまり動けなかったって言うのは私だってそうなんだからさー!」

「轟君凄かったよねー、ぱつきーんって一瞬で凍らせちゃうんだもん」

「ねー!」

「…」

轟と一緒にだった芦戸と葉隠がそう言っていて仲良くしていると、気恥ずかしいのか轟が少し顔を逸らしてそっぽを向いた。

「そうね、私も作戦も指揮も緑谷ちゃんに任せっきりだったわ」

「そーいわれるとアタシらなんて上鳴に全部持ってかれちゃったんだよねえ」

「ええ。別にそれを理由にするつもりはありませんが、気合は入りますわ」

今度は女性陣までもが騒ぎ出す。

さつきまで緊張していた空気が吹き飛び、なにやらどんどんヒートアップしていくーA。

「皆凄いね、紫ちゃん」

「うん…頑張ろ」

開会まで、あと少し。

？

『雄英体育祭!!ヒーローの卵たちが、我こそはと鎬を削る年に一度の大バトル!!』

先生の放送が響いて客を湧かせる。

過去、オリンピックが注目されていた代替と言われるだけあって凄い盛り上がりである。

一年の部がこんな騒がしくなることは例年なかった。その理由は、注目を浴びている存在があるからだ。

『どうせためーらアレだろこいつらだろ!? 敵の襲撃を受けたにも拘らず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!ヒーロー科——』

1年!!A組だろおお?!?』

先生の放送に合わせ、A組が入場する。

歓声以上に異様な数の視線が集中し、思わず姿勢をピンと一部メンバーが正してしまう。

「すっげえ持ち上げられたな」

「燃えるだけだつっうの」

「アハハ、爆豪相変わらずだ」

その後のB組、普通科、サポート科に経営科と入場する。

ヒーロー科は2クラスのみだが、他の科は3クラスあり、こうして

集まると一学年だけでもかなりの人数になった。

「選手宣誓!!」

生徒たちの前に立ったのは1年主審、18禁ヒーローと呼ばれるミッドナイト。

18禁なのに普通に1年の場にいるし、テレビにも出る色々な意味でストレスなヒーローだ。

「選手代表、1—A飯田天哉!!」

「はい!」

緊張した趣で台へと昇る飯田。

入試一位の彼だから選ばれたのだと全員が察し、一部からはヒーロー科の入試結果のみで判断されたことをよく思っていない人から若干の野次が飛んだ。

それに対しあくまで静かに移動した彼はスツと一息深呼吸して、言い放った。

「宣誓——の前に、一つだけ」

「ん?」

「俺は、入試以来一番になったことはありません。だから此処に立つたからと言って、驕りも油断もしません」

その強い視線はさつきまで野次を飛ばしていた連中が押し黙るほどで、彼の意味は確かに伝わっていた。

「だから宣誓は勝手ながらこうします——俺は、貴方達に挑戦する」

^{入試1位}飯田の挑戦状が、叩き付けられた。

第1競技 障害物競走（改）

「思い切ったことすんなあ!」

「この盛り上げ上手!」

「痛、ちよ、やめないか!?!」

盛大に宣戦布告をして戻ってきた飯田の背を叩く1—A。

さつきまでやる気なさげだった他クラスには一部火が点いたような眼をしている者が複数現れていた。やる気抜群らしい。

「さーてやる気出たところで第一種目いきましようか! いわゆる予選、毎年此処で多くの者が涙を飲むわ! その一種目、今年は——障害物競走!」

計1—1クラスでの総当たりレース、コースはスタジアム外周役4km! 我が校は自由さが売り文句よ、つまりコースさえ守れば何をしたらって構わないわ! 早速行くわよ!」

スタジアムから外へ続く通路に設置された門のランプが三つ、一個ずつ消えていく。

ついついさつき宣誓を終えたばかりで早速競技とは…と数人が思いつつも、競技が始まった。

（って、ゲート狭い! これじゃ——そうか、もうここから始まつてるのか!?!）

入試の時もそうだった。スタートすればその時点から始まつてるのだ。

気付いた出久は、日常から行っている全身維持^{フルカウル}10%を瞬時に行うと、勢いよく跳ねた。

「って、かっちゃん!?!」

「チッ!」

狭いゲートを利用した三角跳びをして宙を跳ねていると、爆豪が爆破を使って飛んでいた。

一瞬並んだが飛び続けられる爆豪と違い、出久は壁が無くなれば跳べなくなってしまう。

自由落下に身を任せつつ、下を見れば轟が先頭に出て他の生徒の足

元を凍らせている。

(もうちよつと遅かったら僕も凍ってたかも：)

地面が軽く凍っており、着地した際に氷を割って一瞬動きが止まりつつもそう思考を過ぎらせた。

走りながらも背後をチラツと見る。今は一位轟、二位爆豪、そして三位が出久らしいが、続々とA組の面々を初めとした生徒たちが追ってきた。

(上げよう)

手の内を隠すとかしてられない。

三角跳びをしやすいように加減していたが、走るだけなら別だ。

(最近上がったばかりで不安は残るけど――)

少し足元が沈んだ気がした。それはそうだろう、今出久の足元は出久の脚力によって少し罅割れていたのだから。

(フルカウル――17%)

この域に達した事に気付いたのは、雄英祭直前に成ってからだった。

1%でも超過すれば怪我をするこの力は、調節するのがとても難しい。出久は毎回確認する度に緊張して行っている。

このコントロールに関してオールマイトに言わせれば、身体の方は結構出来上がってきているらしく、単純に力に未だ慣れ親しんで無いせいだとか。

彼ならなんとなくで微調整が可能らしい。出久はそこが未だ未熟で、ギリギリの危険域はふと集中が切れれば、そのまま振り切って壊してしまう可能性を孕んでいる。

(僕は15年間無個性だった。だから、慣れるという意味では皆には到底敵わない――だから)

少しの無茶も賭けも行う。それに躊躇しない。

『さーて実況を、つてもう早速とんでもねえことになってねえか!?
なあ相澤先生!?!』

『おい、今余計なルビ振らなかつたか』

『キニスンナ!それより解説解説!』

『ハア……轟がいきなり凍結かましたらしいな。初見であれを避けるのは難しいだろう。爆豪はスタート直後から飛んでた。アイツの個性はこの競技有利すぎるからな。緑谷は三角跳びか。アイツはどんな成長して……ん?』

『つておおー! 解説してる最中に着地した緑谷急加速ー! 爆豪に並び、轟に迫るううう!!』

解説でこっちに気付いた轟は一度舌打ちをした。

と、そこで何やら聞き覚えのある音を聞く。

「ターゲット、大量!」

「こいつは、入試の……」

通路が広くなり、そこに敷き詰めるように仮想敵が大量にいた……。しかもOPの大型仮想敵までも敷き詰められ、ロボだらけになっていた。た。

『第一関門、ロボインフェルノ!!』

「入試ん時のやつか!」

「ヒーロー科あんなのと戦ったの!?!」

「つーか多すぎだろ通れねえつて!!」

驚き、喚く連中を尻目に出久は駆ける。彼にとつてもうこいつらは敵になり得ない。

遅く、脆く、出久の動きについてこれられない全てを置き去りに駆けていく。

『おおー! 緑谷走る走るう! 流星みたいだなおい!』

『以前より大分速くなつたな……とはいえ、まだいるぞ』

『なに? つてあの巨大仮想敵丸ごと凍らせて、倒したあー!?! 轟、攻略と妨害を一度に!』

『もうちょい後ろ見てみる』

『は?…はあ?!』

轟の後ろ、爆豪は言わずもがな飛翔していたが他にも追いつこうとしている者達が居た。

彼ら上位三名を追うように4位を争っているのは、黒水水舟と六道紫、そして上鳴電気だ。

その少し後ろを飯田が追いつがっていた。

「おお、飛ばすねお二人さん」

「黒水さん…」

「美少女コンビに挟まれて今俺めっちゃ幸福感…いや、待て俺!!今俺が頑張る理由を思い出せ!!この幸福感を振り切れええええ!!」

「くっ、あと一速上がれば…!」

黒水は水流を作りだし、波乗りしてさながらサーフィンを楽しんでいるようだ。

紫は以前の暴走で何かを掴んだのだろう。脚甲が大きくごつくなっているにも拘らず、更に速くなっていた。

上鳴は走る、というよりも何やら地面を削るように進んでいた。

『上鳴はなんだあれ?!腕も脚も足元も真っ黒だぞー!?!…何アレ砂塵じゃないよな?』

『…なるほど、砂鉄だな。腕と足に磁場を作り出して、磁力で強引に砂鉄を脚に纏わりつかせてんだな。で、周りの砂鉄は腕から流した電流で巻き上げてんのか。脚と腕で別個の磁界を作って磁力を操ってるだろ』

『すまん、もっと分かり易く頼むZE!』

『あー…脚と引っ付いてる砂鉄がSもしくはN極、同じく腕で操作してる砂鉄が同じくSもしくはN極だ。脚だけ、もしくは腕だけだとデカイ磁石になるだけだからな。要するに、磁石を即席で造ってSとNで引っ張ったり反発したりさせて加速してんだろう。あれじゃ走ってるっていうより本人の感覚的には小まめに跳びはねてるって感じか?』

まあ結果として地面抉ってる上にふざけたこと叫んでるが、かなり集中してるはずだ。じゃないと吸い付いたまま動けなくなるか、反発してあらぬ方向に吹っ飛ぶだろうからな』

『お前、無理やり連れだされた割に、意外と解説ちゃんとしてくれるのな』

『どう思われてるのははよく分かったが、お前も解説しろよ。いい加減放り出すぞ』

『ハツハツハ、こいつはシヴィージョークだぜえ！……ジョークだよな？な？』

意外と小心者なマイク先生は放っておき、次の関門の説明に入った。

『落ちればアウト！それが嫌なら這いずりな！！ザ・フォール！！』

そこにあつたのは、崖、崖、崖……足場と足場をロープで繋がられているが、底はかなり深い。

会場周辺にこんな何時造つたんだ！？とたどり着いた面々が思いながらも進んでいく。

「つとと！流石に、落とさないと危ないなこれ！」

出久は縄を無視して大ジャンプをするが、着地に少し失敗して落ちかける。

コントロールが完璧な15%に抑え、跳び跳ねていった。

その上空を爆豪が通り越し、轟に至っては普通に縄の上を走っている。

『轟の奴なんだあれ！？』

『まあアイツはあれ位するだろうな。一位爆豪、二位緑谷に轟か。さて、他の連中は……』

まず動き出したのは黒水。動き出しが速い、というか彼女は一体何なんだという声が客から湧き起こる。

「ふんふん♪」

スライムのようにドロドロになった水を脚と縄に纏わりつかせ、鼻歌交じりにサーフィン移動していく。粘度を上げれば通常遅くなるが、彼女は寧ろ加速していた。

『随分個性に慣れてるな。水の個性だし、日頃から使ってたんだとは思うが、粘性まで操れるとはな』

『しかも速え！B組もすげえな！！』

黒水に合わせたわけじゃないが、気が合うのだろうほぼ同じタイミングで動いたのは紫。

跳びはねるのも手だが、落ちればアウトと言われれば少し警戒してしまう。

「でも、のんびりする気は、ない」

真上に跳びはね、先の足場へ向かって蛇腹状の骨を射出し突き刺し、勢いよく巻き取った。

勢い良すぎてズンツと鈍い音が響くが、脚甲でそれを緩和する。

(でもこのままじゃ、ちょっと響く……こう、かな?)

もう一回跳ねたついでに、脚甲の改造を行う。

脚の関節に合わせるのではなく、もっと大きく、もっと力強いイメージをする。

『つて、おおなんだありや!?!』

『競技中によくやるな…』

さつきまでの脚甲と違い、ずっとずっと大きなそれは大分異様な形をしていた。【く】の字の脚は衝撃を和らげた上に脚力を跳ね上げた。

これなら骨を一々射出しなくても、脚甲を動かすだけで大ジャンプができる……というか。

「これなら、一足飛びで……!」

脚甲に骨の射出までプラスすることで、ザ・フォールを丸ごと跳び越える大ジャンプを行った。

「よし、とっととー!」

紫は普通に立とうとして、バランスを崩した。

若干ではあるが、前傾姿勢を保たないとこれは転んでしまう。

だが保てば問題ないと判断し、そのまま上ではなく前方へ跳ねていく。

改めて17%を引き出した出久、氷を重ね続けることで加速した轟、そして空を飛ぶ爆豪へと追いついていく。

「は、速いなくっそ! ええと、んーつと……ああ、くっそ! いっけえ!!」

数秒考え、磁力を強めた。ついでに脳のリミッターを一瞬外し、ジャンプする。

地面が無くなったが、強まった磁力の反発と脚力によって上鳴が跳びあがる。このままでは落ちる、と判断した彼はさらに前方に手を伸ばした。

「う、おおおおおおお!!」

両腕両足から若干放電しつつ、上鳴の体は磁力を発し続け、近づいた新たな足場に吸いついた。

「せ、セーフ、つすよね?」

『んー、落つこちてないしテクニカルだからセーフ!!』

「っしや!」

ギリギリ過ぎて上半身のみ足場に辿りついた彼は、改めて磁力のコントロールを磨いていく。

最終的には、危なげながらも着地に成功するようになっていた。

『A組すげえな…お前どんな教育してんの?』

『アイツらの独学だ』

上鳴の後を飯田、サポート科の少女が続いて行った。

飯田の走り方が独特で若干の笑いを醸し出しつつレースは続いていく。

『こんな早いのは初めてじゃねえか!?最終関門!一面地雷原!!!怒りのアフガンだ!!よく見りや位置の把握は出来るようになってんぞ!目と脚酷使しろ!!』

ちなみに威力は大したことねえが、音と見た目は派手だぜ!』

走りながらも出久は考え続ける。

(どうする、地雷を警戒してたら追い抜かれてしまうー)

現在の順位は飛翔し続ける爆豪が若干のリードをしているが、一位争いは出久、轟、爆豪の三人。そして2位以下も直ぐそこまで迫っている。躊躇して足を止めればすぐに追いつかれてしまう。

(—これしかない、出来るか?!それに後続…いや、やれ!)

ズンツと思いつま先を地面に沈める。

この行為は爆豪と轟が先を行く結果になるが、問題ない。

「おおお!!ス、マツシユ!」

17%の力で巻き上げられた砂塵。スマツシユの衝撃波に加え、中には大きな粒も混じっているため——出久の前方にあった地雷は尽く爆破した。

『おお?!地雷大爆発ーっというか力技かよおい!』

『砂煙で爆豪と轟の邪魔も出来て一石二鳥。合理的な力技だな』

『なんだYOそのパワーワード!?』

砂塵に目をやられたのか、爆豪と轟の動きが少し鈍った。

地雷が無くなってしまえばただの広場だ。出久は——追いついた。

「こ、のおクツソがああああああああ!!!」

「チツ待ちやがれ…!」

「——!」

走る、走る、走る——そして。

『ゴオオオオオオオオオ!! 接戦に接戦を繰り返して、一位を勝ち取ったのはアアア!!!』

会場にスロー映像が再生される。

三人の中で一番に辿りついたのは…。

『緑谷ア、出久ううううううううう!!!』

!!!

『二位、爆豪!三位轟!!』

「クソ、くつそがあ!!」

「…」

『四位、黒水水舟。五位六道紫か。六道は脚甲の改造と慣れが早ければ順位上だったろうな』

『六位上鳴電気!七位飯田天哉! オイオイ殆どA組じゃ、つと八位にB組、塩崎茨ー!言ってる間に来たなー、ってやっぱヒーロー科多いなー!』

『まあ仕方ないだろ。そういう授業を受けてるんだ、寧ろ…:観ろ、普通科入って来たぞ』

『まじか!?!』

『ああ言う生徒程曲者な場合が多い。さあて、次の競技はどうなるかねえ』

何だかんだしっかり解説してくれる相澤先生にA組全員が感心しつつ、次の競技へと移って行った。

第2競技 騎馬戦―前

「予選通過は42名！落ちちゃった人も安心なさい、まだ見せ場はあるわ！」

そして次からいよいよ本選よ！早速第二種目いくわよ！」

投影画面に移された競技名は：

「コレ、騎馬戦！参加者は2〜4人でチームを自由に組んで騎馬を作ってもらわ！」

基本は普通の騎馬戦だけど、一つ違うのが先ほどの結果に従って各自にポイントが割り振られてあるわ！42位が5ポイント、そこから一つ順位が上がるごとに5ポイントずつ上がっていくわね。そして、肝心なのが1位！」

ビシッとミッドナイトは出久に持っていた鞭を向けた。

「二位に与えられるポイントは、10000万P!!」

競技場に居た全員の視線が出久へと突き刺さる。

凄まじいプレッシャーに表情を強張らせながらも、出久は雄英祭が始まる前日に言われた、オールマイトの言葉を思い出していた。

——君が来たってことを、知らしめてほしい！」

「——ニイ・ー！」

無理やりでいい、笑え。飯田は言った、挑戦すると。

出久だってそうだ。今日は挑戦者として此処に立っている。勝っているのだ、笑わずなんとする。

「上位の奴ほど狙われちゃう、下剋上サバイバルよ!!制限時間は15分。騎馬と騎手の合計ポイントを奪い合い、競うの。ハチマキは首から上に巻くこと！そして重要なのが、ハチマキを獲られても騎馬が崩れてもアウトにならないこと！そして個性発動有の残虐ファイトよ！もちろん、悪質な行為はレッドカードで一発退場です！」

最後に、第3競技へ進めるのは16名！4人チームなら丁度ね！もしあぶれた時は話し合っ出て場者を決めなさい！」

さあ、今から15分チーム決め交渉タイムよ!!」

？

紫は出久の元へ向かおうとして、自分の意識を全て用いて足を止めた。

何時もなら駆けつけて力になる。自分にできることなら何でもする、出久の為なら全てを賭けたって構わないと自負している彼女が足を止めるのには理由があった。

(……頑張つて)

今日この日だけは、自分と出久はライバル同士。組めるような状況でも、ちゃんとした理由が無いと組まないという約束事をしてきたのだ。

将来出久がプロになったら紫はいの一番に相棒サイドキックに立候補するが、それまでずっと一緒とは限らない。

人の道はずっと交わり続けるというのは、簡単そうに見えて凄く難しいのだ。

「ろーくどうさん」

「…黒水さん」

「いかないの？」

「うん…今日は、お互い頑張るって決めたから」

「なるほど。んー、じゃあ僕もそうしよっかな」

「？」

「いや、六道さんと組もうかなーって思ってたんだけどね。仲の良い二人がそういうことならねーって」

「貴女が気にすることじゃない」

冷たい紫に対し、黒水はチツチツチ、と指を振った。

「あのね六道さん。…僕はね、これでもキミ等を認めてる」

「知ってる」

「うん。だからね、負けたくないんだよ」

「……それは、知らなかった」

黒水はいつも飄々としていて、あまり本心を見せることが無い。

こう言う行事だからこそ見せてくれたその一端に、紫は少し驚い

た。

「貴女は勝ち負けにこだわる人じゃないって、思ってた」

「アハハ、ないない。……特に、六道さんに対してはね」

「??」

「わっかんなくていいよ、これは僕の方の思いだからね！じゃあね、組む相手頑張って探すといいさこのコミュ障ー！」

「一言、よけい……」

高笑いしながら、「てっちゃん組もうぜー！」と誰かと話していたがタイの良い少年の背に跳びついていった。

「……どうしょ」

彼女の一言は余計であったが、とてつもなく変えようのない事実でもある。

そんな彼女に、一人話しかけてくれた人物がいた。

「どしたの、一人？」

「ふえあ!？」

背後から馴染みない声を掛けられ、びつくりして飛びあがってしまった。

「あ、急にゴメン」

「え、あ、いえ、えと、B組の……？」

「拳藤一佳^{けんどう いつか}。良かったら組まない？」

「い、いいの？」

「うん。……というか、組んでくれないと、ちっとまずい」

「へ？」

辺りを見回すと、皆粗方パートナーを選び終えており、自分たちが残ってしまった。

拳藤さんは別に人見知りするわけじゃないのに何で取り残されるんだろう、そう思った分なりにくい紫の表情を読み取ったらしく、苦笑いしながら頭を掻いた。

「いやあ、初めにポイントと実力高くて、尚且つ女子っていう超良物件の二人が揃ってたからさ、組むんなら混ぜてもらおうかなーってちよつと待ってたんだけど……」

「…ごめんなさい」

「ああいいのいいの。寧ろ立ち聞きしちゃつてごめんね？」

「ううん、大丈夫です…えっと、それじゃあ個性の把握しておきましよう？」

「ありがと！私は両手限定の巨大化で、結構パワー出るよ」

「私は、骨の創造。デメリットは特にない、です」

「なるほどってまあ前走って行かれたから知ってるんだけど。…えっと、そう言えば騎馬どうしよつか？私の手に乗る？」

巨大化した拳藤の掌に乗ったり掴んでもらえば取りあえず落ちることは無いが、紫には一つ思いついたことがあった。

「……私が、やります」

「どうするの？貴女素の力はそんなになさそうだけど…」

「骨で騎馬を作ります」

「え、いいのそれ？」

「騎馬を作る事に関して、絶対人間では言わなかったですから。チームの制限人数は2人からと言っただけ、なので。多分大丈夫、です」

「…ん、分かった。まあヒーロー科だしね、個性使わずなんとするってね」

？

『さあ上げてけ鬨の声!!血で血を洗う英雄合戦が今!!狼煙を上げる!!!』

試合開始する直前、骨で創り上げた馬に腰かけた紫は、背後に背中合わせになるように座った拳藤に対し小さく呟いた。

「……ありがと」

「ん、どういたしまして！」

「……」

歓声や放送によって消されると思っていた呟きがぼつちり聞かれており、真つ赤になりながら紫は第2競技に挑む。

「私たちは二人な分持ち点が低めだから、ガンガン取っていきこ！」
「うん、操縦も取るのも頑張る」

開始直前に激しい動きをしても大丈夫なように、骨のベルトを作って二人の体を馬に固定する。

この骨の馬は酷く目立っており、かなり警戒されている。

だが、関係ない。他の人には悪いが、機動力なら飯田の次に自信があるのだ。

『START!!!』

放送と掛け声が合わさった盛大な合図に全員が動き出した。

だが、彼女達に比べれば遅い。

「やあああああ!!!」

「は!?!」

「ちよ、」「ずるい!?!」

自分たちの周囲にいた人たちは距離を取ろうとした者が殆ど。残りの人は出久の1千万を狙って見当違いの方向へ走って行った。

馬で動くだけならともかく何故声上がるのか。理由は簡単。

『骨の檻い!!六道高い機動力のある馬に加えて場を一瞬で掌握しちまったアー!!』

地面から高々と伸びる太い骨達によって、距離を取ろうとした者達は完全にペースを乱されてしまい、走るといっても軽やかに駆けて来る二人から逃れられなかった。

(拳藤さんについて来たから、周りがB組ばかりだった：運が良かった)

これがA組連中なら関係ないとばかりに突っ込んでくるだろう。

彼らのはあの場で下がるというのは賢い選択だが、戦う選択としては一歩後れを取ってしまう一手だと理解している。

(でもB組も動き出しが速い人が居た：…って、黒水さんだ)

鉄哲チームと画面に表記されているが、実質リーダーは黒水だろう。

彼女のサーフィン移動法はこんな大多数を運ぶのにも適している。しかも鉄哲という人は身体を鋼のごとく硬くする個性を持っている

：速い機動力を持った戦車みたいだと紫は思った。

(でも早いお蔭で檻の中に居ない。悪いけど、独壇場！)

(うわ、個性めっちゃ使い慣れてる！動きも速くて、合わせるので一杯一杯だこれ!?)

各々余裕に差は在れど、拳藤と紫はB組の鉢巻を奪っていくのだった。

？

「あ、危ねえ…」

「流石だなあ六道さん」

「つと、感心してる場合じゃねえ！行くぜえ！」

「おー！いけてっちゃんー！」

「つうか、てっちゃん言うな!？」

仲の良い掛け合いをしながら、出久の1000万を狙いに走る、もとい波に乗る。

他にも狙いに来ており、実質出久争奪戦である。

轟、上鳴、飯田、八百万の四人組も創造しながら近づいてきている。

「さて、早速狙われたがどうする?」

「逃げる！麗日さん発目さん、顔避けて！」

常闇、麗日そしてサポート科の発目の力を借りた出久の逃走劇が始まった。

出久達が発目の作品で空に一時退避したと同時に、骨の檻から一つの影が跳躍してくる。

「へ?え!？」

「紫ちゃん!？」

B組から狩り終わった紫たちが骨の檻をそのままに跳びだしたのだ。

これは完全に偶発的な事故であり、思わず反射的に避けようとしてしまう。

(—、ダメ、今は競技中!!)

完全に思考が被った二人はそれぞれの行動をとった。
紫は出久のハチマキへ手を伸ばし、出久は骨の馬の頭に手を乗せた。

「う、あああああああ!!!」

「キヤア!?!」

17%で馬を地面へ押し、彼女たちの上へ強引に上がった。

急な力技に拳藤すら声を上げ地面へと落ちていった。着地にはどうにか成功していたが、出久の代わりに囲まれてしまう。

「――!」

ボツと再度跳躍する。

急なことについていけたのは一組……鉄哲チームだ。

水流を縦に伸ばし、無理やり跳躍した紫たちへと追いついた。

「てっちゃんファイト!」

「てっちゃん言うなっつてんだろ!!」

「拳藤さん、お願い!」

「あいよ!」

伸ばされた手を巨大化した掌が二人を覆うことでガードする。

改めて地面に降りる二チーム。

「くっそ防がれた!」

「だけじゃないね、やられてるよ!」

「は?あ!?!」

鉄哲は頭からハチマキが消えていることに気付いた。

「忘れてないかー、この子は骨使いだよ?」

「……拳藤さん、言わなくていい」

「あ、ごめん」

拳藤の掌なら片手で防ぐことが出来たのに、態々両手を使ったのはガードする印象を強める為。

実際は掌が覆っていなかった隙間から伸ばした骨で鉢巻をかすめ取ることが狙いだったのだ。

骨の馬に目が行き過ぎて、彼女自身が再度創造して操ることから意識が逸れていたことも大きかった。

第2競技が始まって7分、状況は切迫していた。

?

—現在順位—

- 1位 緑谷チーム
- 2位 物間チーム
- 3位 拳藤チーム
- 4位 轟 チーム
- 5位 心操チーム
- 以下、OP

?

「アア!？」

自分のハチマキがとられたことに気付いたのは、鉄哲だけではない。
別の場所でも爆豪が物間に鉢巻を奪われていた。

「まったく、単純なんだよ——ってうわあ!？」

「チツ！」

何か言おうとした物間だったが、空中を爆破で飛んで強襲してきた爆豪に驚き言葉を途中で止めた。

爆豪はギリ避けられ瀬呂のテープにより回収されながら舌打ちを溢した。

「たく、人の話聞く余裕もないのか?」

「ア? 何悠長なこと言ってるやがんだ! あの先公だって言ってるだろうが、これは残虐^{加減}ファイトだ! 話し合いなんて甘いこと言ってるんじゃないぞスカシ野郎が!!」

「このっ誰が話し合いなんて——! 円場^{つぐらば}、防壁!!」

爆豪が改めて突っ込んでいき、円場と呼ばれた少年が空気を凝固させ盾を作り出した。

…今回、何時も物間に絡む黒水が一緒に組まなかったのには一理由がある。

「今更ツんなもんが―」

空中に現れた半透明の盾を避けるように、器用に爆破を使い宙で一回転をして物間の頭上を回って背後を取った。

「効くかつつうんだよ雑魚がア!!!」

「この―」

物間の個性は個性のコピー。鉢巻を取った際に触れておいた爆豪の個性を使い、爆破に対し爆破で対処しようとする。彼の爆破は突っ込んできた爆豪の頬を掠めた。

(この至近距離の爆破に、身体を突っ込んで―!?)

理由は単純。勝利への執念が足りない判断されたからだ。

「オラアア!!」

鉢巻を回収したついでに物間に爆破を浴びせ、その反動をもって騎馬へと戻っていった。

「次は出久だ!!」

今までA組のポイントを掠め取って結構膨大になっていた物間の鉢巻全部首に巻き、爆豪は獲物へと騎馬を急がせる。

第2競技 騎馬戦―後

骨の馬を台に宙でもう数秒滞空した出久達は、少し離れた場所に着地した。

自分達が居た場所では紫たちが争っている。

「敵が減った、この調子で」

「よお」

「！」

話しかけられたと同時に冷気が出久チームを襲う。

もう一度背中のバックパックを使い飛びあがったが、そこへ八百万が創造した網が放たれる。

「スマッシュユ！」

拳ではなく、掌で煽ぐ事によって旋風を起こし網から逃れる。

見れば網を持っているのは八百万ではなく上鳴だった。あのまま捕まっていれば痺れされ動けなくなっていただろう。

「轟君か・左側に付く様にして！」

「分かった！」

「うむ」

「話し合っていた通りに、ですね！」

事前に轟対策は考えてあった。

彼の個性は強力だが、左側炎熱を使おうとはしない。右側凍結からしか攻撃しないのなら、右から左へ冷気を流さなければならなくなる。

(でも今の状況はチーム戦・右から左に冷気を流せば、自然と自分の騎馬も攻撃してしまう！)

全く使えないことは無いだろうが、扱い辛いはずだ。

いち早く轟も出久の狙いに気付き、よく見て考えてやがると感心しつつ、ならばと八百万に造って貰った鉄棒を地面に接させた。

棒を伝って冷気が地面に流れ、出久と轟のチームを囲う様に地面が凍っていく。

「お前のそのバックパック、飛距離はそんなにないだろ？」
「くっ」

バックパックは上へ逃げる為のモノであり、横には十メートル前後しか移動しない。

麗日の個性によって大分緩和されても数メートルの誤差。

氷の範囲はその辺を意識されてしまっている。着地地点が氷というのはかなり拙い。しかも背後はライン際。後ろにはもう逃げられない。

「皆、ともかくこの距離をキープしよう！」

「ハア・逃がさねえ」

大分広範囲を凍らせたからだろう、轟の体に若干霜が降りていた。初めの基礎学の時にも確かそうになって、動きづらそうにしていたのを思い出す。

（大丈夫、そんなにポンポン広範囲を打てるわけじゃないんだ……：それに、打消しは可能だ）

出久は轟の最大規模を知らないが、仮にさつき氷の塊を撃ち込んでこようものなら、出久は100%を使ったかもしれない。

これだけの広範囲を凍らせる力をそのまま氷の塊にしてしまえばどれだけの威力になるのだろうか計り知れない。

それでも、オールマイトの100%ならば打ち消せると出久は考えていた。

（小規模なものや、この距離で襲ってくる冷気に氷位なら17%で対処できない事もない……でも全部後手後手だ。考えろ、考えろ……）

17%の拳が生み出す衝撃波は100%には遠く及ばないものの、岩やコンクリなら破壊できることを事前に確認済みだった。連続でパンチし続ければ、冷気を吹き飛ばし氷を砕き続けられるだろう。

チーム戦だと考えれば、恐らくこれが大規模な冷気で行える限界だと思いを続ける。

右から左に撃ち込みづらいように、余りに規模が膨大になればなるほど味方を巻き込んでしまう。だからあの棒を使って、冷気の指向性を高めたのだろう。

（轟君が凍らせる速度は、実際眼で負えない程じゃない。棒を伝っていくなら尚の事速度もある程度遅くなる。大丈夫、対処できる）

さつき見た情報をもとに、冷気はどうにかなるという結論を出した。だからこそそのキープ。轟と組んでいる八百万、上鳴、飯田はかなりの強敵だ。

最近威力以外にも個性を鍛え始め、磁力を操り出した上鳴。

その上鳴の攻撃に指向性を持たせたり、絶縁体を造って放電だって可能にさせる八百万。

そして、入試では大変世話になった飯田の機動力。

(最悪なのは飯田君の加速範囲内に入ってしまう事だ。この距離から数メートル入れば、彼の機動力ならあつという間に距離を詰められてしまう。)

そうなれば氷に加えてなにより上鳴が厄介すぎる。

常闇と上鳴の相性は最悪で、上鳴の雷光によって常闇の個性は弱まることを出久は予想していた。

弱まった常闇の個性では、氷と創造を相手取るのにはかなりキツイだろう。

「この距離を維持すれば―」

「獲れよ轟君!!」

だが、何事も思考通りにはいかないものだ。

「トルクオーバー!!レシプロバースト!!!」

想定を超えた超速度の加速。

17%を無理して維持し続けていた出久にもギリギリ反応出来るほどで、彼の騎馬は全く反応できなかった。

「――くそ、やられた!」

1000万を取られた出久。

だが、轟の方も良い表情はしていなかった。

「ちっ、マジか」

レシプロバースト、その加速力に驚きながらも1000万を掠め取った轟だが、自分の鉢巻が消えていることに気付いた。

『お、おおおお!!飯田謎の超オ加速!!1000万を奪い取ったあー!』

『だがすれ違いに轟の鉢巻を奪ってんな。反射的に体が動いたんだろ

う』

来たと思つたときは1000万の鉢巻に轟の手が掛かっていた。瞬時に取られると判断した出久は反射的に彼の頭に手を伸ばしていたのだ。

「どうする!?!」

「取り返す!・黒煙出てるってことは、アレ多分連発は無理なはずだ!」
緑谷と轟は順位がひっくり返り四位と一位になった。十分範囲内だが、狙うは一位。

貪欲になれ、勝利を狙うのだと言う意思を込めて出久は声を張り上げた。

——BOOOM!!!

そんな彼らの間に、爆炎が巻き起こる。

「1^{1000万}位は、俺ンだああああああ!!!」

「か、っちゃん!?!」

!!!

氷結を爆破して派手に割り込んできたのは、爆豪勝己。
残り1分、三つ巴の争いが始まった。

?

ポイント持ちが争う中、OPの者達も負けじと向かって行つていった。

氷結と爆炎に入っていくものは流石にいなかったが、代わりに鉄哲チームと争っている紫達と、心操チームに群がっていく。

「うわ、凄い人気」

「拳藤さん、捕まってる!」

骨のベルトを緩め、振り返り紫にしがみつく。

同時に、二人を骨の膜が覆った。更にそれを核として馬の形が変わっていく。

「」「ちよ、おま、ずりいいいいいいいい!?!」「」「」

『お、おとおお!?!骨の巨人だあー!つーかあれどうなってるんだおい!?!』
『ポイント保持を選んだんだろう。ポイントが低かった最初はともか

く、今はあれこそ合理的だな……周りが何で視えてんのかは分かんねえが、流石だ』

「あ、あはは……凄い言われよう」

「……勝つため、だから」

骨の巨人。その中にいる拳藤には、外の様子は見えない。

だが、紫には分かっていた。

(骨に半身が埋まっていた時も、視界が塞がっていたわけじゃなかった……どういう理屈かはわからないけど)

骨の巨人には視界が存在した。骨で造った眼球がそのまま紫の視界として反映されているようだった。

元々自分の能力の感触は把握していたが、あの半暴走を経てから何かが紫の中で強くなっているのを感じていた。

「ん、来る」

「え?」

身構えた紫。骨の巨人をみて大半が諦め、逃げ回る心操チームに群がっていく。

だが、心操チームは何をしたのか、群がっていた半数が反転し紫たちへと襲い掛かって来ていた。

その全ての個性を弾き飛ばしつつ、防衛していると——聞きなれた声の上から聴こえた。

「いっけえ、てっちゃん砲!!!」

「後で覚えてろお前ガボゴボガボボ!!!」

反射的に上を見た巨人の視界に映ったのは、水の分子運動を止め、水の砲台を作り上げた黒水が、水の中に鉄哲を入れ、圧力で発射する瞬間だった。

「伏せて!!」

「わ!?!」

何が起こっているかわからない拳藤の頭を抱きかかえ、核の中で小さくなる二人。

砲門が解放され、鋼と化した鉄哲が骨の巨人を斜めに通過した。

鉄哲は個性を解除し、下で仲間が作り上げた蔓のクッションに救わ

れていた。

「覚悟！」

「!!」

鉄哲が作った穴にとびこんだ黒水。

その手から放たれた粘度の高い水が、紫の鉢巻を狙う。

?

黒水水舟は、六道紫と知り合う前から知っていた。

親から話を聞いていたのもあったが、それ以上に髪も肌も真っ白な彼女は、只いるだけで神秘的だったのを覚えている。

「水舟、我が黒水家はな——」

只綺麗だな、なんて思えたのは少しの間だった。

ある日、六道家と黒水家は近所ということもあり、紫に会える機会があった。

機会と言っても、ちよつとしたお茶会みたいなものだ。

彼女たちの家同士はとても仲が良く、改まって何の話だろうと小首を傾げた昔の小さな水舟は、聞かされた話に驚いた。

「——六道家、その深淵が暴走した際に食い止め……場合によっては討ち取ることを約束した家系なのだ」

「……………は？」

曰く、今まで個性や体を鍛えさせたのは、家柄もあるがそれ以上にその約束^{誓約}を全うするための一環だという。

しかもその約束を覚えているのは黒水家だけだとか。

よく分からない黒水は、よく分からないまま紫に邂逅した。

「初めまして、ボク黒水水舟、よろしく！」

「…六道、紫、です」

あの頃は自分と大して変わらない背丈だったのに、自分よりずっと小さな存在に見えた。馴れ馴れしく話しかけてはちよつかいかけてくる黒水を冷たくあしらいなながらも、時おりふつと小さく楽しげに微笑むその表情が大好きで。

(ああ…ごめん、父さん、母さん。よく分かんないご先祖様)

黒水は一つ、誓ったことがあった。

(僕は、この子を護りたいです)

討ち取るなんてしたくない、争いなんてしたくない。

成らばどうすべきか、どうなるべきか。

(強くなろう。約束が何かは分からないけど、討つ…殺すためじゃなく、護る為に)

紫の個性の強力さと異常さには気付いていた。

自分の個性も強い方だと自覚していた。だからこそ、この自分勝手な誓いを自分にしたのだ。

(負けない、特に彼女には負けちゃいけない)

護る対象に負けるなど、あつてはならない。

だから――。

？

「――勝ち、たかつたんだけどなあ」

黒水の水が届くよりも、紫の骨が彼女を追い払うほうが速かった。

当たり前だ、砕かれてもこの骨の巨人の内側は紫の支配領域テリトリーなのでから。

「くっそ、ああチクショウ」

骨に吹き飛ばされながら、黒水は心底悔しそうに呟いた。

？

「出来ましたわ!!」

「上鳴!」

「おう!!」

絶縁シートによって可能になった上鳴の放電が、出久チームと爆豪チームを襲う。

「知るかアアア!!」

爆豪は自分のみ爆破で飛翔した。

完全には逃れられなかったが、なんと痺れながら突撃する。

「任せて！」

爆豪のチームメンバーの一人、芦戸が粘度の高い酸液の壁を作りだし、どうにか上鳴の放電を逸らした。

予選での黒水の粘度操作を見て、参考にしたのだ。

「バックパックが!？」

「ベイビーちゃん!？」

常闇の個性に助けられながらもバックパックが壊れてしまった。

もう空に移動は出来ない。

「それ、でも!!」

「おおらあ!!」

「っ！」

突っ込んでくる出久チームと、目の前で痺れながら爆炎を振るおうとする爆豪の気迫が轟を襲った。

(ッ、俺は、何を)

思わず左腕を出した自分に驚きながら、二人の気迫に何か既視感を感じる轟。

(こいつは——)

それに気づく寸前。

『そこまで、競技終了——!!!』

第2競技が終了した。

？

1位 轟 チーム

2位 爆豪チーム

3位 拳藤チーム

4位 緑谷チーム

5位 心操チーム (内2名)

以上の者達が、第3競技へと進む切符を手に入れた。

最終競技 始

一時間の休憩をはさみ、午後の部が開始される。

皆が昼食を食べに行く中、出久と爆豪は轟に呼び出されていた。

関係者しか入れない人気のない場所に呼び出した轟に対し、出久はおどおどと、爆豪は不遜な態度で構えていた。

「……最後の最後、お前らに気圧されたよ。思わず自分の誓約破っちまいそうになるくらいにな」

「え…?」

「……」

「飯田も上鳴も八百万も常闇も麗日もあのサポート科の奴も、何も感じちゃいないようだったけどな……どういうわけだか、あの一瞬。脳無と殴り合うオールマイトの気迫を想起しちまった」

暫しの空白を挟み、出久と爆豪をしっかりと見つめる。

「お前らが俺には持ってない、No. 1ヒーローの何かをもってるなら俺は、お前らにだけは勝たなきゃいけない」

「そ、それってどういう…?というか、なんで?」

「……個性婚って知ってるか」

「う、うん」

「個性が発覚してから、第二第三世代で問題になったやつ。自分の個性をより強化して継がせるためだけに配偶者を選び、結婚を強いる。うちのクソ親父は金と実績は有り余らせてたからな。このご時世に母の親族を丸め込んで、母の個性を手に入れた……」

全ては自分の子にオールマイトという伝説を越えさせる為に。己が越えられないという屈辱を認めた男の、倫理観を無視した欲望の叶え方。

「記憶の中の母はいつも泣いている。お前の左側が憎い、そう言っただけで母は俺に煮え湯を浴びせた」

顔の左側にある火傷痕はその時のモノなのだろう。

家庭崩壊を起こして尚、彼の父エンデヴァーは止まらなかった。

「ざっと話したが、俺がお前らに突っかかってるのは見返すためだ。

クソ親父の個性なんざなくなつて……いや、使わず一番になることで、奴を完全否定する」

今日まで、出久も爆豪も家族には恵まれていた。

だからこそ世界観が違うと言える話を聞かされ、少し頭の整理が必要だった。

少しの思考の後、先に口を開いたのは出久だった。

「……僕は、ずっと、小学生のあの時からずっと、助けられてきた」

出久は他人に恵まれた。隣人に恵まれた。

あの日、紫と出会わなければ体を鍛えはじめるとは無かつただろう。きつと無個性なのを言い訳に、もしくは周りの嘲笑に押し潰されて何も出来なかつたはずだ。自分も母もあの無個性が発覚した日からずっと、暗い雰囲気を引きずることになつたかもしれない。

あの日、オールマイトに出会わなければ自分は雄英に合格できなかったはずだ。無個性のまま受験して、落ちていただろう。無力を嘆き、受け入れ、全て諦めていたかもしれない。

「誰かに助けられて此処にいる」

強く、そう思う。

誰かが欠けても今の自分は居ないのだと、皆によって創り上げられたのだと。

「オールマイト・彼みたいに、笑って人を救ける最高のヒーローになりたい。そのために一番になるくらい、強くなくちゃいけない……他の人からはずっと笑われてきたこの目標を、応援してくれた子がいる。頑張る自分を見守ってくれた家族がいる。雄英に来てからは、そんな人が増えていった」

そんな人たちに応えたい。だから、彼は負けたくないのだ。

「応えるためにも……勝ちたい、いや、勝つ。僕は僕の為にも、一番になる。」

轟君の話は正直ビビつたけど、同情とかしない。——前言撤回はしない。僕は勝つよ、キミにも、皆にも」

それが轟の想いを受け入れつつも、出久の出した答えだった。

そして良くも悪くもそんな出久と正反対の爆豪も……。

「ハッ、くつだらねえ。結局やる事なんざ変わんねえだろうが」

「かつちゃん、そんな言い方」

「黙ってろ」

「――！」

出久を一瞬睨んだ爆豪の瞳は、別に轟を嘲るだとかそういう物は入っていなかった。

強い、とても強い気迫に出久が思わず黙り込む。

「ただ言うなら、気にいらねえ」

「なにがだよ」

「No. 2のクソ親父を見返すつつうのは別に構わねえよ。ただやり方が気にいらねえつつてんだ・力を使わず一位になる？ —— 舐めてんのかテメエは!!!」

握り締めた拳が小さく爆破を起こした。

思わず個性を使ってしまう程、今の爆豪はキレていた。

「クソ親父がムカつくつてんなら、テメエの力で捻じ伏せればいいだろうが!! テメエのそれは、立ち向かうのを止めた腰抜け野郎のただの言い訳だ!!」

「……」

目つきが鋭くなっていく轟。自分の信念を否定されれば彼も頭に来るのだろう。

爆豪と違い、冷酷に轟の怒りは増していく。

「万年No. 2の雑魚なんざ目じゃなくなるくらいになりやあいい! クソヤロウのモノ全部お前が塗り潰しちまえばいいだろうが!! No. 1になって見返すつつうのはそう言う事だろうが! 履き違えてんじゃねえぞ!!!」

「かつちゃん……」

出久とは真反対。拒絶からの怒声を轟に浴びせる。

だがそれは、彼の実力を認めているからこそその怒りだった。

お前ならできるんだから、やれ、逃げるなど。

「左側、使つて来い。その上で俺が全部ぶつ潰す!」

一番になるつつうのがどれだけ厳しいか、テメエに教えてやるよ舐

めプ野郎」

三人以外誰も知ることのない宣戦布告が交わされた。

？

「アー、きつちい」

上鳴電気は昼食を食べ終え、気分転換に少しの間会場の外に赴いていた。

外は露店が賑わっており、まさにお祭り騒ぎとなっている。

「……」

自分なりに、かなり無茶をしている自覚があった。

特に磁力操作なんて道具が無い状態で行うのがこんなにキツイとは思ってもしなかった。今でも過度の集中力を使った精密作業のせいで少し頭が痛むほどだ。

「よっ」

「おわ!？」

座り込んでいた彼の首筋に、何か冷たいものが当てられた。

背後を振り返ると、悪戯っ子の様な笑顔を浮かべた彼女が居た。

「ひ、ヒョ!？」

冷えたコーラの缶を持った彼女の子供の様な笑顔に少し赤くなりながら、隣に座る彼女に何も言えず上鳴は驚きを隠せずにいた。

「はいこれ。頑張ってるご褒美」

「さ、サンキュー……来てたのな」

「ん、まーね」

正確には鬼門の中からずっと見ていたのだが、そんなこと知らない上鳴はそっかーと何でもない様にコーラを飲む。

角を隠しているとはいえ、上鳴の近くには自分の姿を直に見た八百万と耳郎がいるため、今の今まで会場に侵入できずにいたのだ。

「どう、調子は?」

「まあ、任せとけて!この俺の活躍を目に焼き付けるといいぜ!」

「アハハ、見栄っ張りだなあ。さっきまで暗い顔してたくせに」

「うぐ」

あつさり見破られ、思わず言葉に詰まる上鳴。

ナンパ慣れしている自覚がある上鳴は、前回同様彼女に振り回されていた。

「まあ、皆強いからな。しよーじきいって、結構一杯一杯なんだぜ」

「素直なのは良い事だよ。……あー、上鳴?」

「ん?」

疲れた様子を見せる彼を見て、彼女は何かをしてあげたくなった。

だから声を掛けたのだが、何を言ったらいいのか分からず無言になっってしまう。

彼女にとつて、こうして異性と普通に語り合うのは、もうずっと過去の話だったから、尚の事戸惑ってしまう。

「どうしたよ?」

「あーえつと……ええい!」

女は度胸!と色々もやもやを振り払うように立ちあがると、彼の目の前に立った。

「頑張ってくれて、ありがと……カッコいいよ」

視線を逸らしながら顔を真っ赤にした彼女に見惚れながら、ああもうドストライクだコンチクショウと心のフォトフォルダに全力保存していた。

「でもまだ頑張ってるね」

「おう、約束だからな!」

「うん……応援してる」

大活躍をする。絶対に、その約束を果たすのだと上鳴は改めて誓っていた。

「よ、よーっし、まだ時間あるよね、ちよつとまわろ!」

「え」

「お祭りってテンション上がるよねー!」

完全に羞恥を誤魔化そうとしているのがバレバレだが、突然のデートの誘いに上鳴が乗らないわけもなく、彼は時間ギリギリまで彼女と一緒に露店を巡って行った。

気付けば、頭痛は消えていた。

？

休憩終了し、全員が会場へ集合する。

『最終種目発表の前に！予選落ちへ朗報だ！こいつはあくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してあんぜ！なんと、本場アメリカからのチアリーダーも呼んでいっそう盛り上げん？ありや？どーしたA組!!?』

A組の女子面々は、何故かチアリーダーの格好をしていた。

「皆がチアの格好をしないって……」

「私は先生がそうおっしゃったと聞いて準備を……」

「人づての伝言はダメね……」

「ごめん、峰田からの言葉だということにまずウチが警戒すべきだったわ……」

各々が反省しつつ、はめた峰田はA組のみならず他の組からも称賛を受けていた。

「い、出久くん。あんまり見ないで……」

「ハッ……！ あ、いや、ごめん!!」

真つ白な紫は性格もそうだが個性の扱い方からして、基本骨に覆われたりしている。

そのため、腕も足もこんなに人前に見せることは余りなかった。

綺麗で恥じらう姿がとても可愛らしく、一瞬で脳内に保存した出久を誰も責めることなんて出来やしないだろう。

「……」

「つて上鳴が静かだな。オーイ、どした？」

「……ん？え、ああ……って何でチアア?!」

「今かよ!?!」

瀬呂によって正気に戻った上鳴。

勿論考えていたのはさっきまで一緒に居た彼女の事であり、ぶつちやけ今の今まで彼の思考はどこか遠くへ飛び去っていたのだ。

『あー、まあ祭りだしな！そのままチアしてもらおうか！』

おっしやーという歓声が客からも響いた。

此処に集まっているのはほとんどヒーロー職の者だと思うのだが、大丈夫なのだろうかこんな調子で。

『レクリエーションが終われば最終種目、進出5チームから16名からなる、トーナメント形式！一対一のガチバトルだ!!』

例年形式は違うが、最終種目は一対一というのがお決まりなのだ。慣れた様子でくじ引きを出すミッドナイト。

「それじゃあ、組み合わせのクジ引きしちゃうわよ。決まったら、レクリエーション挟んで開始になります！進出者はレクに参加するもしないも個人の判断に任せるわ。息抜きしたい人も、温存したい人もいるだろうからね。そういえば、心操チームは面子決まったかしら？」

心操チームは4名だが、人数の都合で二名までしか参加できない。

「はい、大丈夫です」

「……」

心操以外、特に二人は何やら暗い雰囲気だが決まったのならいいと1位チームからくじを引かせる。

？

- 一組目 緑谷VS切島
- 二組目 常闇VS青山
- 三組目 飯田VS発目
- 四組目 六道VS心操
- 五組目 上鳴VS芦戸
- 六組目 麗日VS八百万
- 七組目 瀬呂VS轟
- 八組目 拳藤VS爆豪

？

トーナメントが決まり、各々が散っていく。

紫は羞恥に耐え切れず全速力で着替えに行ってしまった、出久は切島との戦いに向けて個性を記載したノートを読み返していた。

他の者もそれぞれが緊張を解きほぐすため、集中するために行動していく。

レクリエーションが終了するのは、そんな彼らにとってはあっという間だった。

一回戦、一組目&二組目

セメントス先生によって会場の真ん中に作られた闘技場。

そこへ出久と切島の二人が対峙した。

『一回戦！ 此処まで超好成績！ヒーロー科、A組クラス委員長もやってるスーパーボーイ!! 緑谷出久!! 対！^{バーサス}同じくヒーロー科A組！今んとこパツとした活躍はないが巨大ロボに潰されても逆に突き破つてくる硬さに注目！切島鋭児郎オ!!』

マイク先生の言葉を尻目に、二人はじつと見つめ合う。

お互い良く知るクラスメイト、情報は他のクラスの誰よりも集まっている。

(自損が前提とはいえ、巨大ロボを一撃粉碎したっていう力はやべえよな：つつても、俺にやれることなんて一つだけなんだ。やれるだけやってやらあ!!)

出久の超パワーに関しても人づてに聞いているだろうから、100%も警戒されている。

(切島くんの個性はインターバルが狙い目だ。大体30秒から40秒、一分保ったところを見たことが無い。あの身体を殴るのは、危険：)

切島の個性、硬化だつてよく分かっている。ガチガチの体はまるで鋼のようだとノートにも書いた。

(この闘技場という限られた場所で逃げ回るのは…可能、だけど)

—観られている。沢山の人に、親しい人に、そうでない人に、憧れの人に。

勝ちたい、だから手段を選ぶべきで勝算が高い方法を取るべきだ。理性はそういう風に語ってくる。

でも観て欲しいのなら、逃げ回つて隙を見つけるやり方はあまりとりにたくないと、出久は思った。別にその手段が愚かだとか格好悪いとかじゃなくて、切島の個性から考えてもきつとこうする方が誰よりも自分が納得出来る。

『レディイイイ!!スタート!!!』

「だから——」

「!」

合図された瞬間に、慣れた力加減10%の出力で間合いを詰める。

その一瞬の間に驚きながらも切島は硬化で体を固め終わっていた。それでも出久はその拳を握りしめ——ガチガチに硬くなった切島を殴り飛ばした。

「おお?」

とつさに腕をクロスして防いだ切島にダメージはそこまでない。だが、防ぐのに使った硬化した腕からはジンジンとした痺れが彼に伝わっていた。殆ど防ぎきれていない。

(一発で、コレかよ……!)

明らかに成長している、一対一で闘うとこんなにも相手の成長具合が分かるのかと切島は驚いた。

毎日の授業で段々出久の動きが速く、そして巧くなっていくのは遠めから見ても分かっていたことだったが、やはり体験するのは違うなと切島は思いつつも体勢を整えた。

「ハハ、爆豪を才能マンって上鳴の奴は言ってたけどよ、お前も十分才能マンだと思うぞ!」

「そうでもないよ」

一発殴って痛む拳を摩りながら会話をする。今ので場外に出来たら良かったのだが、さすがに耐え慣れている。

(真正面から受け止められたのに大したダメージ無し、か)

本当に才能マンなら、きつと放った衝撃を余すことなく伝えきれていたはずだ。

格闘技を経験したこともある出久だが、極めてはいない。ヒーローになるための体作りと、なった後で身体を上手く動かせるようにと多岐に渡って教わっても修めてはいない。

(中途半端だなあ)

スーパードーイなんてマイク先生は紹介してくれたけども、それは

色々な人の好意から色んな経験をさせてもらったからだ。

今此処にいる自分は他の人によって象られたもの。そんなことは分かっている。

(今日、始めるって決めたんだ)

緑谷出久は此処にいるぞ、自分という善意の卵は此処にいるぞ、と世界に伝える。だからこそ、真正面から向かってくる彼に真正面から応え、勝つ。

人々の視線を集める、脅威を伝えろ、安心感を与えろ！

「…やつぱ、すげえな緑谷」

「え？」

「拳痛えんだろ？なのにもう構えてオレを殴る気満々って」

「え、あいやその」

狼狽える出久を見て、思わず苦笑してしまう切島。

脳裏に浮かぶのは腕を犠牲にして巨大ロボを破壊したという武勇伝や、USJ事件の際に速く駆けつけるために指一本犠牲にした上に、紫の協力の元痛々しい強化をして脳無を取り押さえた光景。

(ああいう痛みに飛びこむ勇氣。ホントすげえよ…こつぱずかしいから言わねえけど)

だけどそれは硬化能力を持つ自分にこそ必要不可欠だと彼は思いなおす。

見ているだけなんて嫌だ、立ち尽くすだけなんてまっぴらゴメンだ。

「真正面からきてくれるってんならオレはそれに応えるだけだ！行くぜ緑谷、今の俺の最高硬度をみせてやらあ!!」

硬く、堅く、固く…自分の個性はそれしか出来ないのだから。だったら誰よりも何よりもそれを極めよう。

それが切島がこの大会が始まるまでの間、悶々と考えた結果至った結論だった。

「オオオオオオオオ!!」

ギシギシと身体が軋む音が聴こえた。

此処まで固く出来たのは切島自身初めての事だった。緊張感が生

んだ火事場の馬鹿力とでもいうのだろうか。

今まで以上に固く鋭利になる切島に対し、出久は一瞬気圧されたが拳を握りしめ覚悟を改める。

(勝て、勝つ、絶対——!!!)

出力を15%^{操作上限}まで上げた出久も、気付けば雄叫びを上げていた。

「ツラアアアアアアアアアア!!!」

殴る、殴る、殴る殴る殴る殴る殴る殴る——!!!

両者の拳がぶつかり合い、弾け、血が舞い散る。

一撃一撃放つ度に出久の拳から血が滴り、切島は一撃一撃受け止めるたびに最高硬度の硬化を超える衝撃を受け止め、割れながらも殴り続け殴られ続ける。

攻撃速度からしても出久の方が速い、簡単に自分の硬化を割つてくる!

そう判断しても、切島は退きはしなかった。

「ガアアアア!!!」

「——!」

割れた傍から固めていく彼は一步も動かないどころか、前へ詰めていく。

自分の拳が届く距離から逃がさない、殴るなら殴ればいいと。

「——あ」

殴り合っていた最中、唐突にボツと拳が空ぶつたのを感じた。

今まで切島の攻撃は全部出久の拳によって弾き飛ばされていたが、それが空ぶつた。

(ああ、くそ)

出久の顔が目の前にあった。

そう、避けられた。両者ともに猛攻し続けていたからこそ、熱狂していた頭から抜け落ちていた避けられるという動作。

ゼロ距離になった出久に組まれ、殴った勢いを利用されそのまま体が宙に浮いた。

(つええなあ)

自分の身体が投げられるのを全く止められず、そのまま彼は場外へ

と投げ飛ばされた。

「切島くん場外！勝者、緑谷くん!!」

『一試合目から熱い戦いサンキュー!!燃え滾る戦闘から勝利をもぎ取ったのは、緑谷出久だあああああ!!』

うおおおおお!!という歓声をどこか遠くに聞きながら、彼は医务室へと運ばれていった。

？

「まったく無茶したねえ」

「すいませんでした、ありがとうございます!」

出久は両拳、切島はほぼ全身を治癒し終わり、小言を貰いつつ頭を下げた。

観客席へと戻りながら、二人は言葉を交わす。

「ツカー、負けた負けた!やっぱ強えな緑谷」

「えつと・・・」

何か言おうとしたが、何を言うにしても自分が言うべきではないと言葉が脳裏に浮かんで消えていった。

そんな出久を分かっている切島は、ただ一言だけ告げた。

「後頑張れよ」

「・・・うん!」

「よし、行こうぜ!」

バンつと力強く背中を叩かれ、出久はA組の観客席へと戻っていく。

背に残るその衝撃を誇りに思いつつ、試合は進む。

？

『さあーって第一試合の熱が冷めねえうちに次行くぞ!』

第二試合、他の競技で活躍していた一風変わった個性持ち、常闇踏影! バーサス 対! どうやってんのやらキラキラしているこれまた一風変

変わった個性者^{変人}青山優雅!』

「んー、失礼☆」

「…」

変人というキーワードに煌びやかに反応する青山に対し、静かに構える常闇。

元々日光で弱っている自分の影に頼るのは危険と考える。

(だが、この一対一の戦い。想定していなかったわけではない…:i)

個性^{ダークシャドウ}黒影は光に弱い。だが、闇の回復手段が無いわけじゃない。

常闇が一度戻し、彼の中で回復することができるのだ。勿論一定値の上限があるし、外に出せばあつという間に弱ってしまう。

だが、何時までも光に弱いからというのを常套句にした言い訳にはしたくなかった彼は彼なりに個性の扱いを工夫することにしたのだ。

(イメージだ、重要なのは想像だと六道は言った)

マイク先生の『スタート』という言葉聞いた瞬間に、常闇は飛んだ。

常闇が居た場所を光線が通り過ぎていく。

この日光の中アレを受け止めるのは不可能だっただろう。

(無論、今のままでも危ういことには変わらないが)

『お、おこれなんだー!?常闇、背に翼があるぞ!!』

『また繊細なコントロールが必要なことを…』

『なんだなんだ、分かるのかよレイザー!?!』

『まあ想像だがな』

飛翔し光線を避ける常闇の個性に関して二人が説明を始めた。

『見ろ、常闇の体が黒くなってるだろ』

『ん?…:oお、お前よく見てんなあ』

『まあ個性柄観察は得意だからな…:恐らくだが、黒影と一体化しているんだろう。変幻自在で物理現象に縛られない黒影の力を纏うのではなく、取り込んだんだろう』

『なあるほど、それで黒い翼が』

自分達の教師は優秀だな、と考えつつもそれに補足することを脳内で思う。

この個性の使い方は強力だが、あまりに危うい。

なにせ自分の闇、凶暴性の塊と一体化するというのはすぐに暴走し
かねない危険性を孕んでいるのだ。

一度夜中に試してみれば、次日光が出るまで暴れ続けてしまったと
いう汚点がある。

(あの時は誰もいないような山中で良かった……それはさておき、そ
ろそろ決めるとしよう……！)

この力は同化しているだけあり、闇の力が尽きることが無い。日光
程度ならばプラスマイナスゼロにすることが出来る。

だからこそ更なる光は弱点になる。光速を避けるのは相手の動き
を予測した結果であり、光速を越えているわけではない。

だからこそ、避けられている今のうちに速攻で終わらせなければい
けない。

「この――」

「新技――黒^{ダーク}・」

一瞬、自分の内に潜む闇を全て解放する。

上限値をそのまま内側から吹き出しその身を包みこみ、さながら黒
い鳥のようになる。

^{プレイバード}
「閃 鳥!!」

外に出してしまえば日光によって弱ってしまう。その前に全てを
飛翔の瞬発力に変え、青山が何かをする前に突撃する。

「クッ」

「――!!!」

ギリギリ反応した青山が放った光線。

一直線に突っ込むという行為は他の行動をするのがとても難しい。
だが盾にするような力は残っていない。日光の中では突撃し、一発
攻撃するのが限界だった。

身体を捻り、無理やり光線を避ける。結果片翼が光線に貫かれる
が、既に加速した身体は止まらない。そのまま常闇は青山にタツクル
し、吹き飛ばした。

「……はあ、ハア」

「う……」

青山を吹き飛ばした常闇は息を荒くし、これ以上の攻撃が不可能な
のを隠す余裕もなかった。

対する青山はギリギリ場外を免れ立つが、ベルトが壊れてしまっ
ていた。

その上吹き飛ばされた際に頭を打ったのだから彼は、それでも試合
続行しようと前へ一歩踏み出した所で数度体を揺らし……その場に
倒れ伏した。

「……青山くん戦闘不能！勝者常闇君!!」

「ふっ」

こうして息を荒くしながらも不遜な態度を取ろうと取り繕う常闇。

青山が医務室へ運ばれるのを見送ると、すでに黒影を出す力もない
彼はフラフラと観客席へと戻って行った。

一回戦、三組目&四組目

『よおーし、次の試合行くぞー！第三試合、宣誓布告してくれた熱い入試主席、飯田天哉！対、サポートアイテムでフル装備、サポート科発目明！』

「飯田くん、気は変わりませんか？」

試合開始前に軽く体をほぐす飯田に、幾つか発明品を持った発目が話を持ち掛けていた。

実は対戦が決まった直後にも彼女はこうして発明品を付けて戦ってくれないか、と打診していたのだ。

「挑戦する、そう言った手前そういうのを付けるわけにはいかない。それに、俺自身の力だけでどこまで行けるか気になるんだ」

「そうですか……まあいいでしょう」
(マイク?)

装備していない発明品を舞台外に出し、スツと彼女が取り出したのはマイクだった。

『試合、開始！』

合図と同時に飯田が駆ける。

相手はサポート科でどんなアイテムを持っているかわからない。レシピプロバーストで速攻を掛けても、それを事前に警戒されて避けられるとも限らない。だからこそ、彼はまず個性を使った加速で発目に近づく。

何をするにしても近づかなければ何もできないのだから。

『やはり速いですね飯田くん！加速しきってしまえばあなたの速度に追いつける人は早々居ないでしょう。しかし、私はこの「油圧式アタッチメントバー」で回避もラクラク！』

彼女の腰の装備から勢いよく棒が飛び出し、あり得ない体勢で斜め横に避けた。

棒につつかえてコケてしまったあたり、レシピプロしていたら間違いない場外にぶっ飛んでいただろう。

(にしても、まさか試合を発明品の宣伝にするとは……いや、彼女はサポーター科。寧ろこれが目的だったのか)

感心と呆れが混ざった複雑な心境を胸にどうするかを考える。

今自分が何をすればいいのか、その解を考え尽くす。

まず超加速のレシプロだが、却下だ。あの伸縮するバーは意外と速い。超加速には一瞬だが溜めが要するため、真正面から行くのは難しいだろう。

『更に前の競技でも使いましたが、このフロートシューズにバックパックで空中だって自在に動き回れます！そして遠距離はこの回収自在のゴムシューター！ゴム弾にも関わらず高威力且つ、ゴム弾に取りつけた糸ですぐさま回収可能！ちなみに鉄を織り込んだ特性の頑丈な糸ですので素手で切るのは諦めたほうがいいでしょう！』

二丁銃から放たれる弾丸を避けつつ、彼女の観察を続ける。

アタッチメントバーで避ける、シューズとバックパックで跳ぶ、銃を撃つ、降りる。

この一連の動作は意外と隙が無い。バーで避けられた直後に跳ばれれば自分も彼女を一瞬見失うし、降りるときも銃弾を気にしないといけないのだ。

そして降りた時には距離が離されており、振出しに戻ってしまう。(隙はもうこれくらいしか思いつかないか：プルスウルトラだ、行け！)

勢いよく走り寄り、避けられ跳ばれる。

その瞬間、跳んだ方向に全力で体の向きを転換し、レシプロを発動する。

これは一つの賭けだった。レシプロの急加速に彼女の銃を撃つ速さと命中率が追いつくかどうかという。

そして、幾らなんでも跳びながら狙いを定めるのは無茶だったのだろう。飯田の体を一発だけゴム弾が掠り、降りて来るであろう場所に先回りを成功させた。

「僕の、勝ちだ！」

降りてきた彼女を背後から羽交い絞めにし、そのまま場外へ。

『発目さん場外！よって勝者、飯田くん!!』

ちなみに負けたが自分の発明品を見て貰えた発目は、幾らか満足感を得たのだろう。敗者とは思えないにこやかさで舞台を降りていった。

？

『ほれほれじゃんっじゃん行くぞ！第四試合、競技連続好成绩、騎馬戦の時なんてえらいインパクトだった骨つ娘^骨！六道紫！対、今のところは目立った活躍はないが、ここまで唯一残った普通科だア！心操人使!!』

歓声やどんな個性を使うのかという興味と期待の視線を受けた上に、想定以上の人口密度に紫は若干緊張していた。

というかマイク先生の声や歓声に隠れるようにして、若干チアコスの感想が混ざっているのだが、誰だ羞恥の姿が可愛らしかったとか萌えたとかお願ひします忘れてください。

『準備は良いな？そろそろ行くぜ！試合——』

「えらい人気だなお前……なんならさつきしてたチアコスに着替えてきたらどうだ？」

『開始！』

「遠慮しておきます……アレはそもそも、——!？」

それ以上言葉が続かなくなった。

紫の意思から外れ、身体はピクリとも動かなくなった。

『おおーっと、六道動かない!?!どうした?!』

「……だからあの入試は合理的じゃないってんだ」

流石に入試に関するという事もあり、一時的にマイクを切ってぼやく相澤。

「完全対人個性、「洗脳」。そりゃ入試落ちるに決まってる」

戦闘向きではない彼では加勢なんて出来ないだろうし、普通に救助しようとしても、彼の個性では応急手当すら行えない。そこらの瓦礫から鉄棒でも探し出して添え木にするくらいだろう。見つかるかわ

からない上に、どのみちそれだけではポイントは溜まらない。

「騎馬戦ではアイツの騎馬だけクラス入り混じってたからな。恐らく温厚かつプライド高い奴らを狙って騎馬を作らせたんだろうさ。操られただけで気づいたら残ってた、なんてまるで人任せの結果に乗りたくないっていうのは、まあ分からんでもないからな」

「な、なるほど」

人心を操るだけあって流石の観察力ということだろう。

青山は気にせずトーナメントに挑んでいたが、それ以外の二人は実際何も言わず辞退だけを宣言していた。

「……悪いな、分かんないだろうけどこんな個性でも夢見ちまうんだよ。さあ、そのまま場外へ行って負けてくれ」

「……………」

「？」

数歩背後に歩いたかと思うと、突如ピタツと立ったまままるで動かない紫。

あり得ない。個性はしつかり掛かっていることは彼の感覚もそうだが、紫の虚ろな瞳からしても明らかなのに、命令に従わない。

(……………どうして?)

疑問に思ったのは、彼だけではなかった。

(何で、助けてくれるの?)

がしやがしやと硬い物が鳴り合う音が紫にだけ聴こえていた。

虚ろな瞳は会場なんて映してはいなかった。目前にあるのは巨大な骨の化物。まるで自分を飲み込まんとする、巨大な力の塊だった。

——我ら、己で全てを選択せし傲慢者

——汝、我らの同胞なれば

——己で選択するべし——

怪物の口に吞まれる幻影と共に、身体から数多の骨が勢いよく飛び出すと同時に頭が晴れた。

「なっ!?!」

「……」

『お、おぉーこれは、六道とどまったー!!』

歓声も驚きも、全て紫は遠くのように感じていた。
選択しろと云われ、思わず考えてしまう。

(ううん、違う。ずっと、考えてた……)

力の特訓をしながらも、ずっと頭の隅に追いやっていたことが彼女の眼前に突き付けられたように感じていた。

「なんで……身体の自由は利かないはずだ！何した!？」

「……」

背後を見ると、ここまで戦闘向きじゃない個性で必死に闘ってきた少年が居る。

周りを見ると、今日まで戦い、明日からも戦い続けるであろうヒーローたちが居る。

クラスの方を見ると、今日まで一緒に頑張ってきたクラスメイトが……友達がいる。

(私は……)

自分の力が化物だと自覚したのは、USJ事件の時だった。あの時からずっと、ずっと思っていたことがあった。

(此処にいるべきなのかな?)

客観的に観ればきつと自分は討伐される側だと思う。

何がきっかけで暴走するのか、予測は出来ても未だハッキリとは分かっていないのだ。

ヒーロー以前の問題だ。もし、自分が誰かを傷つける可能性が……否、傷つける未来しかないのなら、ここで降りるべきじゃないのか？

「何とか言えよ……」

「……」

警戒しているのもあるが、骨が邪魔で近づけないのだろう。彼は口を動かすことがそのまま戦うことに直結している。どうにかこちらの口を開かせようと、話しかけてくる。

「変幻自在、威力も迫力もあって羨ましいよ、俺はこんな個性でスタートから遅れちまった。恵まれた人間には分かんないだろ」

「……………あ」

分からない、そう思った直後に一人だけ脳裏に浮かび上がった。

(……………ああ、もう。バカだなあ私)

その人も恵まれなくて、でも必死に頑張って頑張って、自分なりに戦い続けていた。

眩しくて、未だに直視するのがちよつと難しい。

でもそんな後ろ姿に憧れたんだ。そんな彼だから、大好きになったんだ。

(思うだけで、決めちゃうなんて……………ううん、違うか。決めてたんだ) 悩んでいたことに対し、改めて彼女は選択する。

(彼をずつと傍で見て居たい、そのために何でもする……………だから)

クラスメイトの中から彼の姿を見つけたし、そして目の前の少年を見て覚悟を改める。

(闘おう、私も)

化物でもなんでも、六道紫は利用する。必要ならばコントロールして見せる。

……………もし無理なら。

「その時は、彼や貴方みたいなのが、きつと如何にかしてくれるよね」
「ハ？なに訳わかんない事、言つて……………」

——もし無理なら、その時は……………大人しく、討たれよう

——出来ることなら、彼らの様な頑張つて足掻き続けるヒーローによつて

「ゴメンね」

骨の脚甲を使った高速移動で心操の背後に移動し、巨大な骨の籠手で彼を掴む。

「それと、ありがとう」

きつと何を言われてるかなんてわからないだろう、それでもいいと紫は傲慢にも思っていた。

「……………」

何を言っているかなんて分からなかったけども、その微笑みはなんだか嫌だな、と心操は対戦相手にも関わらず、場外に投げられながら

もそんなことを考えた。

『心操くん場外！勝者、六道さん!!』

歓声や、彼の個性を理解した観客が色々と思う所があるのかざわつく中、二人はしばし見つめよう。

「……私が言う事じゃないけど、貴方ならきつと、ヒーローになれるよ」

「……ほんと訳分かんねえな。……言われねえでも、なるさ」
「うん」

ガリガリと苛立つように頭を搔くと、彼は舞台から降りていった。
「……頑張る」

そんな彼の背に、そして自分に言い聞かせるように呟くと、紫も反対側へと退場した。